

三木 清著(解説・宮川 透)
語られざる哲学

哲学者三木清の哲学的人生の出発を画するもので、著者二十三歳のときの書。悩ましい青春の体験を懐かしつつ、懐疑からいかに自己確立をはかるかを思索した告白の書でもある。ほかに「我が青春」を収録。

144

佐藤一斎著／川上正光全訳注
言志四録 (一)～(四)

江戸時代後期の林家の儒者、佐藤一斎の語録集。変革期における人間の生き方に関する問題意識で貫かれた本書は、今日なお、精神修養の糧として、また処世の心得として得難き書と言えよう。(全四巻)

274～277

吉田松陰著／近藤啓吾全訳注
講孟劄記 (上) (下)

本書は、下田渡海の挙に失敗した松陰が、幽囚の生活の中にあつて同囚らに講義した「孟子」各章に対する彼自身の批判感想の筆録で、その片言隻句のうちにも、変革者松陰の激烈な熱情が伝み込まれている。

442・443

宇野哲人著(序文・宇野精一)
論語新釈

「宇宙第一の書」といわれる「論語」は、人生の知恵を滋味深く語ったイデオロギーに左右されない不滅の古典として、今なお光芒を放つ。本書は、中国哲学の権威が詳述した、近代注釈の先駆書である。

451

下村湖人著(解説・永杉喜輔)
論語物語

「論語」を心の書として、物語に構成した書。人間味あふれる孔子と弟子たちが現代に躍り出す光景が、みずみずしい現代語で描かれている。「次郎物語」の著者の筆による、親しみやすい評判の名著である。

493

橋本左内著／伴 五十嗣郎全訳注
啓発録 付 書簡・意見書・漢詩

明治維新史を彩る橋本左内が、若くして著した「啓発録」は、自己規範・自己鞭撻の書であり、彼の思想や行動の根幹を成す。書簡・意見書は、世界の中心の日本を自覚した気宇壮大な思想告白の雄篇である。

568

諸橋轍次著

孔子・老子・釈迦「三聖会談」

孔子・老子・釈迦の三聖が一堂に会し、自らの哲学を語り合うという奇想天外な空想冊談。三聖の世界観や人間観、また根本思想や実際行動が、比較対照的に鮮やかに語られる。東洋思想のユニークな入門書。

574

宇野哲人全訳注(解説・宇野精一)

大学

修己治人、すなわち自己を修練してはじめてよく人を治め得る、とする儒教の政治目的を最もよく組織的に論述した經典。修身・齊家・治国・平天下は眞の学問の修得を志す者の熟読玩味すべき哲理である。

594

宇野哲人全訳注(解説・宇野精一)

中庸

人間の本性は天が授けたもので、それを「誠」で表し、「誠とは天の道なり、これを誠にするのは人の道なり」という倫理道德の主眼を、首尾一貫、渾然たる哲学体系にまで高め得た、儒教第一の經典の注釈書。

595

宮本武蔵著／鎌田茂雄全訳注

五輪書

一切の甘えを切り捨て、ひたすら剣に生きた二天一流の達人宮本武蔵。彼の遺した「五輪書」は、時代を超えて我々に眞の生き方を教える。絶対不敗の武者武蔵の兵法の奥義と人生観を原文をもとに平易に解説。

735

洪自誠著／中村璋八・石川力山訳注

菜根譚

儒仏道の三教を修めた洪自誠の人生指南の書。菜根とは粗末な食事のこと。そういう逆境に耐えてこそこの世を生きぬく眞の意味がある。人生の円熟した境地、老獪極まりない処世の極意などを縦横に説く。

742

今道友信著

西洋哲学史

西洋思想の流れを人物中心に描いた哲学通史。古代ギリシアに始まり、中世・近世・近代・現代に至る西洋の哲人たちは、人間の魂の世話をいかに主張したか。初心者のために書き下ろした興味深い入門書。

787

張鍾元著／上野浩道訳

老子の思想 タオ・新しい思惟への道

本書は今なお、世界の思想に大きな影響を与えている老子の『道徳経』を、ハイデッガーや西田哲学、ユングなど現代思想の観点から捉えなおした。従来の思想のパラダイムを変える新しい思惟の道を拓く剖目の書

789

柄谷行人著 解説・浅田 彰

内省と廻行

〈外部〉に出ること、これが著者がめざした理論的仕事の課題である。内部すなわち形式体系に自らを閉じこめ、徹底化することで自壊させようと試みた思考の軌跡を辿り、「内省」から始まる哲学理論の批判を提示。

826

諸橋轍次著

荘子物語

五倫五常を重ね、秩序・身分を固定する孔孟の教えに対し、自由・無差別・無為自然を根本とする老荘の哲学。昭和の大儒諸橋博士が、その老荘思想を縦横に語り尽くし、わかりやすく説いた必読の名著。

848

廣松 渉著 解説・柄谷行人

〈近代の超克〉論 昭和思想史への一視角

太平洋戦争中、各界知識人を糾合し企てられた一大座談会があった。題して「近代の超克」。京都学派の哲学に焦点をあて、本書はその試みの歴史的意義と限界を剔抉する。我々は近代を〈超克〉しえたのか。

900

R・カイヨワ著／多田道太郎・塚崎幹夫訳
遊びと人間

超現実の魅惑の世界を創る遊び。その遊びのすべてに通じる不変の性質として、カイヨワは競争、運、模倣、眩暈を提示し、これを基点に文化の発達を解明した。遊びの純粹なイメージを描く遊戯論の名著である。

920

湯浅泰雄著 解説・T・P・カスリス
身体論 東洋的心身論と現代

西洋近代の〈知〉の枠組を、東洋からの衝撃が揺るがしつづつある。仏教、芸道の修行にみられる、身心一如の実践哲学を、M・ボンティらの身体観や生理心理学の新潮流が切り結ぶ地平で捉え直す意欲的論考。

927

柄谷行人著(解説・小森陽一)

マルクスその可能性の中心

辻直四郎著(解説・原寛)

ウパニシヤッド

金谷治著

孔子

今道友信著

エコエティカ 生圏倫理学入門

木田元著

現代の哲学

廣松渉著(解説・熊野純彦)

世界の共同主観的存在構造

あらゆる問題を考えるために必要な一つの問題として、柄谷行人は「マルクス」をとりあげた。価値形理論において「まだ思惟されていないもの」を読んだ話題の力作。文学と哲学を縦横に通底した至高の柄谷合理論。

人類最古の偉大な哲学宗教遺産は何を語るのか。紀元前十五世紀に遡るインド古代文化の精華ヴェーダ。その極致であり後の人類文化の源泉ともいえるウパニシヤッドの全体像と中核思想を平明に解説した名著。

人としての生き方を説いた孔子の教えと実践。二千年の歳月を超えて、今なお現代人の心に訴える孔子の魅力とは何か。多年の研究の成果をもとに、聖人ではない人間孔子の言行と思想を鮮明に描いた最良の書。

人類の生圏の規模で考える新倫理学の誕生。今日の高度技術社会の中で、生命倫理や医の倫理などすべての分野で倫理が問い直されている。今こそ人間の生き方に関わる倫理の復権が急務と説く注目の書き下し。

現代哲学の基本的動向からさぐる人間存在。激動する二十世紀の知的状況の中で、フッサール、メルロ・ポンティ、レヴィ・ストロースら現代の哲学者達が負った共通の課題とは？ 人間の存在を問う現代哲学の書。

世界像の共同主観性存在論的基礎づけとは。言葉による認識の媒介、さらに世界像の歴史的、社会的な相対性という事実が定位しつつ、その事実、ひいてはイデオロギーが存立する事態を究明すべき構図を提出する。

998

968

946

935

934

931

柄谷行人著(解説・島 弘之)
反文学論

いま必要なものは文学理論ではなく、「文学」に対抗する理論である。70年代後半の個々の日本の文学状況について独自の立場からするとく発言した話題の文芸時評集。闘争する批評家柄谷行人の異色文芸時評!

1001

金谷 治著(解説・楠山春樹)
 えなんじ
淮南子の思想 老荘的世界

無為自然を道徳の規範とする老荘の説を中心に、周末以来の儒家・兵家などの思想をとり入れ、処世や政治、天文地理から神話伝説まで集合した淮南子の人生哲学の書。諸子から戦国時代までを網羅した中国思想史。

1014

柄谷行人著(解説・野家啓一)
探究Ⅰ・Ⅱ

闘争する思想家・柄谷行人の意欲的批評集。本書は《他者》あるいは《外部》に関する探究である。著者自身をふくむこれまでの思考に対する「態度の変更」を意味すると同時に知の領域の転回までも促す問題作。

1015・1120

市川 浩著(解説・中村雄二郎)
精神としての身体

人間の現実存在は、抽象的な身体でなく、生きた身体を離れてはありえない。身体をポジティブなものとして捉え、心身合一の具体的身体の基底からの理解をめざす。身体は人間の現実存在と説く身体論の名著。

1019

新田義弘著(解説・鷺田清一)
現象学とは何か

《客観的》とは何か。例えばハエもヒトも客観的に同一の世界に生きているのか。そのような自然主義的態度を根本から疑ったフッサールの方法論的改革の営為を追究。危機に瀕する実在論的近代思想の根本的革新。

1035

市川 浩著(解説・河合肇雄)
 み
《身》の構造 身体論を超えて

空間がしだいに均質化して、「身体は宇宙を内蔵する」という身体と宇宙との幸福な入れ子構造が解体してゆく今日、我々にはどのようなコモロジが可能かを問う。身体を超えた錯綜体としての《身》を追究。

1071

柄谷行人著

言葉と悲劇

闘争する批評家・柄谷行人の代表的講演集。「漱石の多様性」「江戸の注釈学と現在」「フアンシズムの問題」等、文学から歴史、思想まで作者の広大な思考経路を示す十五編を収録。刺激的な知の世界が展開する。

1081

森 三樹三郎著

老子・荘子

東洋の理法の道の精髓を集成した老荘思想。無為自然に宇宙の在り方に従って生きることの意義を説いた老荘。彼らは人性の根源を探究した。仏教や西洋哲学にも多大な影響を与えた世界的思想の全貌を知る好著。

1157

柄谷行人著

差異としての場所

走りつづける思想家・柄谷行人の注目の論考。「臆論としての建築」と「批評とポスト・モダン」の中から、さまざまな現代の知の構造を著者独自の視点で再構築し、改めて世に問う最新作。

1230

加藤尚武著

現代倫理学入門

現代世界における倫理学の新たな問いかけ。臓器移植や環境問題など現代の日常生活で起る道徳的ジレンマ・難問に、倫理学はどう対処し得るのか。現代倫理学の基本原理を明らかにし、その有効性を問う必読の倫理学入門書。

1267

プラトン著／三嶋輝夫訳

プラトン対話篇ラケス 勇気について

プラトン初期対話篇の代表的作品、新訳成る。「勇気とは何か」「言と行の関係はどうあるべきか」を主題に展開される問答。ソクラテスの徳の定義探求の好例とされ、構成美にもすぐれたプラトン初學者必読の書。

1276

金谷 治著

老子 無知無欲のすすめ

無知無欲をすすめる中国古典の代表作「老子」。無為自然を尊ぶ老子は、人間が作りあげた文化や文明に懐疑を抱き、鋭く批判する。「文化とは何か」というその本質を探り、自然思想を説く老子を論じた意欲作。

1278

C・ダーウィン著／荒川秀俊訳

ビーグル号世界周航記 ダーウィンは何をみたか

進化論の提唱者ダーウィンが、南米・豪州・南太平洋への若き日の航海で目撃した世界の驚異。詳細な旅の記録「ビーグル号航海記」から人間・動物・植物・自然の記述を抜粋、細密な図版を豊富に交えて再編集。

1981

湯川秀樹著 解説・川合 光

創造への飛躍

現代科学は技術文明を一変させる一方、人類と地球の危機も招来した。科学と平和とは。人間の創造性とは。自らの人生に真摯に向き合った思索の軌跡。小松左京との対話に加え、「この地球に生れあわせて」も収録。

1983

松沢哲郎著

おかあさんになったアイ チンパンジーの親子と文化

1786

池田清彦著(解説・養老孟司)

科学とオカルト

大文字版

1802

高田誠二著

単位の進化 原始単位から原子単位へ

1831

虎尾正久著(解説・高田誠二)

時とはなにか 暦の起源から相対論的「時」まで

1889

佐賀亦男著／木村しゅうじ画(解説・小島郁夫)

進化の設計

1960

伊谷純一郎著(解説・佐倉 統)

高崎山のサル

1977

漢字や数字を理解するアイが息子アユムを産んで六年。彼女が修得した知識や技能は、次の世代へどのように伝承されるのか。野生下での研究をも踏まえて探る「進化の隣人」たちの親子関係、教育、文化。

客観性を謳う科学の登場は、たかだか数百年前のこと。原理への欲望とコントロール願望に取りつかれた科学とオカルトはどこへ行くのか。社会、科学、オカルトの三者の関係を探究し、科学の本質と限界に迫る。

メートル、キログラムなどの身近な単位はどのように定められたのか。それは時の権力に翻弄されながら、懸命に研究を続けた先人たちの苦難の道程だった。秘められた歴史を、碩学がユーモア溢れる筆致で語る。

人々の生活の基本にあり、日常を区切り律する「時」は、どのような歴史を経て決められているのか。先人たちが苦勞を重ね定めてきた歴史とともに、現代的な観点も含めて、専門家が壮大なテーマを易しく解説。

神が動物を設計するなら、どのように図面を引くのか？ 動物の生存と滅亡を分けたものは何か？ 九十余点のイラストをまじえ、航空力学の権威が動物の構造と機能を独自の視点から解明する異色の「進化論」。

世界最高水準を誇る日本の霊長類学の扉を開いた記念碑的名著。野生のニホンザルを追跡し観察を続ける、世界で初めて群れの社会構造の全貌を解明するまでの過程をみずみずしい文章で綴る。毎日出版文化賞受賞作。

杉下守弘著
言語と脳

高次な精神活動、言葉を操る大脳の謎を解く。話す、聞く、読む、書く——人間を人間たらしめている言語機能はどう生まれしているのか。その解明過程を歴史を遡って追究し、大脳と言語との関係を明らかにする。

1672

植原和郎著

人類の進化史 二〇世紀の総括

猿人から現生人類への五百万年の遙かな道程。最初期のヒト⇨猿人から現生人類へ到達するには、五百万年もの時間を要した。DNA解析等による最新の研究成果を踏まえてたどる、興味深く壮大な人類の進化史。

1682

W・ハーヴィ著／岩間吉也訳

心臓の動きと血液の流れ

大文字版

血液循環を証明し近代医学を切り開いた名著。体内の血液はどう流れているのか。解剖学的探索と精密な実験によって、循環説を確立。科学革命の先鞭をつけた名著のラテン語からの新訳。懇切な解説と補論を付す。

1697

日浦 勇著(解説・宮武彌夫)

海をわたる蝶

蝶と人間の密接で意外な関係を描く注目の書。一分間に数千匹が移動するイチモンジセリ、日本列島をさまよいつつながら生きるウラナミシジミ、外国から渡来する迷蝶。蝶の不思議な生態と人間との関係を解明する。

1719

杉本つとむ著

江戸の博物学者たち

中国から伝来し、日本で独自の発展をとげた本草学。その水準は、江戸期・小野蘭山らの登場で頂点に達した。自然科学研究に巨大な足跡を残すとともに近代科学の礎を築いた日本本草学の消長と、本草学者群像。

1764

桶谷繁雄著

金属と日本人の歴史

人類と金属が織りなす壮大な歴史ロマン。青銅器、草薙剣、奈良大仏、日本刀、火繩銃、そして近代製鉄業。歴史の間に垣間見える日本人と冶金技術の興味深い関係を金属学の泰斗が平易な文章で綴る。

1772

池田清彦著

構造主義科学論の冒険

1332

杉田玄白著／酒井シツ現代語訳(解説・小川鼎三)

新装版解体新書

1341

沼田 眞・岩瀬 徹著

図説 日本の植生

1534

牧野富太郎著

牧野植物随筆

1543

大文字版

梶田 昭著(解説・佐々木 武)

医学の歴史

1614

牧野富太郎著

牧野富太郎自叙伝

1644

旧来の科学的真理を問直す卓抜な現代科学論。科学理論を唯一の真理として、とめどなく巨大化し、環境破壊などの破滅的状况をもたらした現代科学。多元主義のもとづく科学の未来を説く構造主義科学論の全容。

日本で初めて翻訳された解剖図譜の現代語訳。オランダの解剖図譜「ターヘル・アナトミア」を玄白らが翻訳。日本における蘭学興隆のきっかけをなし、また近代医学の足掛りとなった古典的名著。全図版を付す。

植物を群落として捉え、長年の丹念なフィールドワークをもとにまとめた力作。植物と生育環境の関係に視点を据え、群落の分布と遷移の特徴を簡明に説いた入門書で、日本列島の多様な植生を豊富な図版で展開。

「植物学の父」による蘊蓄たっぶりの随筆集。植物研究に不滅の名を残す碩学が、草木の名や分類に関する通説の誤りを齒に衣着せず此正す。該博な知識や植物に寄せる深い思いがほとばしる印象深い文章の数々。

盛り沢山の挿話と引例。面白く読める医学史。絶えざる病との格闘。人間の叡智を傾けた病氣克服のドラマとは？ 主要な医学書の他、思想や文学書の文書まで自在に引用し、人類の医学発展の歩みを興味深く語る。

植物分類学の巨人が自らの来し方をふり返る。幼少時から植物に親しみ、独学で九十五年の生涯の殆どを植物研究に捧げた牧野博士。貧困や権威に屈せず、信念を貫き通した博士が、独特の牧野節で綴る「わが生涯」。

村上陽一郎著

近代科学を超えて

クーンのパラダイム論をふまえた科学理論発展の構造を分析。科学の歴史の考察と構造論的考察から、科学史と科学哲学の交叉するところに、科学の進むべき新しい道をはらいた鋭い著者の画期的科学論である。

764

森 毅著

数学の歴史

数学はどのように生まれどう発展してきたか。数学史を単なる記号や理論の羅列とみなさず、あくまで人間の文化的な営みの一分野と捉えてその歩みを辿る。知的な挑発に富んだ、歯切れのよい万人向けの数学史。

844

T・クーン著／常石敏一訳

コペルニクス革命 科学思想史序説

地動説の提唱はなぜ「革命」だったのか。西洋の伝統的宇宙観に対しコペルニクスの投じた一石の思想史的意義を、自然科学の枠を超えて初めて明らかにした名テキスト。パラダイム概念をめぐる論議の「原点」。

881

森 毅著解説・野崎昭弘

数学的思考

「数学のできる子は頭がいい」か、それとも「数学などやる人間は頭がおかしい」か。ギリシア以来の数学的思考の歴史を一望。現代数学・学校教育の歪みを一刀両断。数学迷信を覆し、真の数理的思考を提示。

979

森 毅著解説・村上陽一郎

魔術から数学へ

西洋に展開する近代数学の成立劇。小数はどのように生まれたか、対数は、微積分は？ 宗教戦争と錬金術が猖獗を極める十七世紀ヨーロッパでガリレイ、デカルト、ニュートンが演ずる数学誕生の奇麗な物語。

996

アルド・レオポルド著／新島義昭訳(解説・三島輝夫)

野生のうたが聞こえる

消えゆく野生への共感と哀惜にみちた自然誌。獣、鳥、魚、樹木など、ウィスコンシン州での四季折々の野生生物との出会いや、環境問題へのさまざまな思いを綴る。環境倫理が叫ばれる今、必読の古典的バイブル。

1301

今西錦司著(解説・小原秀雄)
進化とはなにか

正統派進化論への疑義を唱える著者は名著「生物の世界」以来、豊富な踏査探検と卓抜な理論構成とで、今西進化論を構築してきた。ここにはダーウィン進化論を凌駕する今西進化論の基底が示されている。

1

朝永振一郎著(解説・伊藤大介)
鏡の中の物理学

鏡のなかの世界と現実の世界との関係は……この身近な現象が高遠な自然法則を解くカギになる。科学と量子力学の基礎を、ノーベル賞に輝く著者が一般読者のために平易な言葉とユーモアをもって語る。

31

湯川秀樹著(解説・片山泰久)
目に見えないもの

初版以来、科学を志す多くの若者の心を捉えた名著。自然科学的なものの見方、考え方を誰にもわかる平易な言葉で語る珠玉の小品。真実を求めての終りなき旅に立った著者の研ぎ澄まされた知性が光る。

94

湯川秀樹著
物理講義

ニュートンから現代素粒子論までの物理学の展開を、歴史上の天才たちの人間性にまで触れながら興味深く語った名講義の全録。また、博士自身が学生時代の勉強法を随所で語るなど、若い人々の必読の書。

195

W・B・キャノン著／館 郷・館 澄江訳(解説・館 郷)
からだの知恵 この不思議なはたらき

生物のからだは、つねに安定した状態を保つために、さまざまな自己調節機能を備えている。本書は、これをひとつのシステムとしてとらえ、ホメオステシスという概念をはじめて樹立した画期的な名著。

320

牧野富太郎著(解説・伊藤 洋)
植物知識

本書は、植物学の世界の権威が、スマレヤユリなどの身近な花と果実二十二種に図を付して、平易に解説したもの。どの項目から読んでも植物学に対する興味がわき、楽しみながら植物学の知識が得られる。

529

阪倉篤義・林 大監修
国語辞典 改訂新版

豊富な項目と充実した機能の文庫版国語辞典。外来語など時代に即した語を中心に六千余語を旧版に増補し七万六千語を収録。基準表記や慣用表記なども明示した用字用語辞典、漢字辞典の機能もつ最新決定版。

1238

村上重良著
世界宗教事典

国際社会理解に不可欠な世界宗教の基礎知識。世界の主要な宗教・宗派・教典、宗教上の事件や運動、宗教観念等を地域別・系統別に整理。大項目方式の読む事典であるとともに主要な宗教の通史としても読める。

1436

北村一夫著
江戸東京地名辞典 芸能・落語編

落語・講談・浄瑠璃などの大衆芸能には各時代の地名が人々の日常を伴って登場する。江戸・明治期の町名、橋・坂名、寺社、大名家、妓楼など一五〇〇余を収録。当時の人びとの暮らしぶりが生き生きと甦る。

1870

日置昌一著
諸橋轍次著
日本系譜綜覽

實族各家・武門・宗教者・学者・芸術家・碁将棋・相撲等各派各流の脈を因示する。日本の歴史と文化を支えてきた人々の流れが一望でき、歴史研究の至便の書。皇族から学問・芸能の各派まで系譜の集大成。

322

中国古典名言事典

人生の指針また座右の書として画期的な事典。漢学の碩学が八年の歳月をかけ、中国の代表的古典から四千八百余の名言を精選し、簡潔でわかりやすい解説を付した。一巻本として学術文庫に収録する。

397

神保環一郎著
クラシック音楽鑑賞事典

人々の心に生き続ける名曲の数々をさらに印象深いものとする鑑賞事典。古典から現代音楽まで作曲者と作品を網羅し、解説はもとより楽聖たちの恋愛に至るまでが語られる。クラシック音楽愛好家必携の書。

620

牧村史陽編
大阪ことば事典

最も大阪的な言葉六千四百語を網羅し、アクセント、語源、豊富な用例を示すとともに、言葉の微妙なニュアンスまで詳しく解説した定評ある事典。巻末に項目検出索引、大阪のしゃれことば一覧を付した。

658

村上重良著
日本宗教事典

日本の主要な宗教は勿論、宗教史上の重要な事件と運動、代表的な信仰や宗教観念などを大項目で体系化し、各項目を年代順に配列した。この一冊目では宗教の全てを網羅した日本で最初の読む宗教事典である。

837

末広恭雄著
魚の博物事典

本書は「魚博士」として知られた筆者が、日本人に特に親しい魚百三十四種について、その生息から釣漁法まであらゆる情報をまとめた末広魚談叢の集大成。絶妙の文章で綴る楽しい魚類百科である。

883

小松英雄著(解説・石川九博)

いろはうた 日本語史へのいざない

千年以上も言語文化史の中核であった「いろはうた」に秘められた日本語の歴史と、そこに見えてくる現代語表記の問題点。言語をめぐる知的な営為のあり方を探り、従来の国文法を超越した日本語の姿を描く一冊。

1941

田中克彦著

ことばとは何か 言語学という冒険

時の流れや社会規範によって姿を変える「ことば」。地球上にある何千種類もの言語、変化を続けるそのとらえどころのない本質に、言語学はどこまで迫れたのか。その到達点と現代社会が抱える言語問題を探る。

1942

杉 勇著

楔形文字入門

楔形文字が語る古代オリエンツの社会と思想。シュメール人によって発明され、三千年にわたりメソポタミア全域で使用された古代文字。豊富な図版、丁寧な解説史と言語学的な概説による、最良の楔形文字入門。

1744

坂本賢三著

「分ける」こと「わかる」こと

「わかる」ために人間が行う「分ける」という行為。分類の仕方はまた認識の仕方を決定づける。古代ギリシャ・東洋の思想や近代科学の分類方法と論理を渉猟し、「わかる」ことの人間の真相に迫る。

1767

藤堂明保著

漢字の起源

不思議な文字＝漢字はどのようにできたのか。模様(文)とそれらの組み合わせ(字)が、幾万もの漢字を生み出した。すべての文字には、意味がある。中国語学の泰斗による、豊かな漢字世界への絶好の手引書。

1792

杉本つとむ著

西洋人の日本語発見 外国人の日本語研究史

十六～十九世紀、布教や交易のため来日した西洋人は、独自の方法で熱心に日本語を学び辞書を作った。のちの日本語研究の礎にもなった驚くべき功績と、彼らの日本語観を紹介し、当時の生きた日本語に迫る。

1856

阿辻哲次著

漢字道楽

三〇〇〇年以上昔の甲骨文字の時代から、漢字はどのように造られ、文化圏を広げたか。IT時代をいかに担っていくか。漢字に囲まれて育った著者がその魅力と歴史と未来への可能性を語り尽くす。漢字文化論。

1883

山口仲美著

ちんちん千鳥のなく声は 日本語の歴史 鳥声編

「父父」とスズメが呼べば「子か子か」とカラスが応え、ホトトギスは「時過ぎにけり」と囀っていた。万葉集から近現代の童謡まで、日本人が聴いた鳥の声をとれば味わい豊かな日本語の歴史が見えてくる。

1926

池上嘉彦・山中桂一・唐須教光著

文化記号論 ことばのコードと文化のコード

あらゆる文化現象を言語記号の総体として捉える文化記号論。意味論・修辞学等の基礎理論から、記号論のアクチュアルな課題まで。三人の第一線言語学者が、記号論の現在を多面的に論じた必携の入門書。

1137

菊地康人著

敬語

日本語の発所、敬語の仕組みと使い方を詳述。尊敬語・謙讓語・丁寧語など、日本語ほど敬語が高度に発達している言語はない。敬語の体系を平明に解説し、豊富な用例でその適切な使い方を説く現代人必携の書。

1268

M・J・アドラー、C・V・ドローレン著／外山滋比古・榎未知子訳

本を読む本

知的かつ実際的な読書の技術を平易に解説。読書の本来の意味を考え、読者のレベルに応じたさまざまな読書の技術を紹介し、読者を積極的な読書へと導く。世界各国で半世紀にわたって読みつがれてきた好著。

1299

西尾道子著

新約聖書の英語

現代英語を読む手引き

現代英語の底に息づく新約聖書の教えと言葉。西洋人の考え方・感じ方の背景には聖書の教えがある。新聞・雑誌・小説等に材をとり、新約聖書の表現が日常生活で使われる生きた英語にどのような形で表れるかを探る。

1368

松尾式之著

大統領の英語

巨大国家をうごかす、輝く大統領英語を読む。平明でありながら格調高く、アメリカ人の心をうごかす大統領の英語。ケネディからブッシュまで、八人の文体系やレトリックを読み解き、その政治感覚や人間性に迫る。

1573

齋藤 毅著

明治のことば 文明開化と日本語

異文化の概念を反映する明治生まれのことば。文明開化は、個人、社会、哲学等、西欧文化に根ざす多くの新語を生んだ。日本人がそれらの概念をいかに吸収し、自国語化したかを、豊富な資料と精緻な分析で探る。

1732

外山滋比古著解説・宮岡多恵子

日本の文章

日本語の根源の問題を扱った画期的文章論。英文学・英語教育に精通する著者が、外国語と日本語の文章を対等に比較・客観視して日本語のあるべき真の姿を解明。学者的直観と先見に溢れた好著である。

648

小塩 節著

ドイツ語とドイツ人気質

ドイツ語に深い愛を寄せつつ率直かつ平明にその特徴を解析し、頑強・明快・重厚なドイツ精神を浮き彫りにする。日常のドイツ語からドイツ人気質をさぐり、日本とはおよそ異なる文化世界への扉を開ける書。

825

佐藤信夫著解説・佐々木健一

レトリック感覚

日本人の言語感覚に不足するユーモアと獨創性を豊かにするために「言葉のへあや」とも呼ばれるレトリックに新しい光をあてる。日本人の立場で修辭学を再検討して、発見的思考への視点をひらく画期的論考。

1029

佐藤信夫著解説・池上嘉彦

レトリック認識

古来、心に残る名文句は、特異な表現である場合が多い。黙説、転喻、逆説、反語、暗示など、言葉のあやの多彩な領域を具体例によって検討し、獨創的な思考のための言語メカニズムの可能性を探る注目の書。

1043

B・L・ウォーフ著／池上嘉彦訳

言語・思考・現実

言葉の遣いは物の見方そのものに影響することを実証し、現代の文化記号論を唱導したウォーフの主要論文を精選。「サピア・ウォーフの仮説」として知られる言語と文化について鋭い問題提起をした先駆的名著。

1073

佐藤信夫著解説・佐々木健一

レトリックの記号論

記号論としてのレトリック・メカニズムとは。我々を囲む文化は巨大な記号の体系に他ならない。微妙な言語現象を分析・解説するレトリックの認識こそ、記号論の最も重要な主題であることを具体的に説いた好著。

1098

三浦つとむ著解説・吉本隆明)
日本語はどういう言語か

さまざまな言語理論への根底的な批判を通して生まれた本書は、第一部で言語の一般理論を、第二部で膠着語とよばれる日本語の特徴と構造を明快かつ懇切に論じたものである。日本語を知るための必読の書。

43

沢田允茂著(解説・林 四郎)
考え方の論理

日常の生活の中で、ものの考え方やことばの使い方は非常に重要なことである。本書は、これらの正しい方法をわかりやすく説いた論理学の恰好の入門書であり、毎日出版文化賞を受けた名著でもある。

45

澤田昭夫著
論文の書き方

論文を書くためには、ものごとを論理的にとらえて、それを正確に、説得力ある言葉で表現することが必要である。論文が書けずに悩む人々のために、自らの体験を踏まえてその方法を具体的に説いた力作。

153

保坂弘司著
レポート・小論文・卒論の書き方

レポート・論文作成の実際過程を懇切に説く書き下ろし。テーマの捉え方、資料の探し方、構成の組立て方など、論文の書き方のコツを豊富な具体例を引きながら詳述。実際的で即効的な指針に満ちている。

297

藤原 宏・氷田光風編
文字の書き方

毛筆と硬筆による美しい文字の書き方の基本が身につくまで。用具の選び方や姿勢に始まり、筆づかいから字形まで、日常使用の基本文字についてきめ細かから実例指導をほどこし、自由自在な応用が可能である。

436

澤田昭夫著
論文のレトリック わかりやすいまとめ方

本書は、論文を書くことはレトリックの問題であるという視点から、構造的な論文構成の戦略論と、でき上がるまでのプロセスをレトリックとして重視しつつ論文の具体的なまとめ方を教示した書き下ろし。

604

糸賀きみ江全訳注
建礼門院右京大夫集

建礼門院徳子の女房として平家一門の栄華と崩壊を目の当たりにした女性・右京大夫が歌に託した涙の追憶。「平家物語」の叙事詩的世界を叙情詩で描き出した日記的集の名品を情趣豊かな訳と注解で味わう。

1967

興津 要編(解説・青山忠一)

古典落語(統)

日本人の笑いの源泉を文庫で完全再現する！ 大衆に支えられ、名人たちによって磨きぬかれた伝統落語。古典落語。「まんじゅうこわい」「代脈」「妾馬」「酢豆腐」など代表的な二十編を厳選した、好評第二弾。

1643

雨海博洋・岡山美樹全訳注

大和物語(上)(下)

「あはれ」の情感が色濃く漂う歌物語の傑作。十世紀後半に成立した一七三段から成る歌語り集。失意と不遇、宇多天皇の退位から始まり、宮廷を中心に、人々の悲しくも美しい魂の交流が連鎖的に語られてゆく。

1746・1747

森田 梯訳

日本後紀(上)(中)(下) 全現代語訳

『日本書紀』・『続日本紀』に続く六国史の三番目。延暦十一年から天長十年の四十年余、平安時代初期の律令体制再編成の過程が描かれていく貴重な歴史書。漢文編年体で書かれた勅撰の正史の初の現代語訳。

1787~1789

松尾芭蕉著／ドナルド・キーン訳

英文収録 おくのほそ道

元禄二年、曾良を伴い奥羽・北陸の歌枕を訪い綴った文学史上に輝く傑作。磨き抜かれた文章、鑲められた数々の名句、わび・さび・かるみの心を、いかに英語にうつせるか。名手キーン氏の訳で芭蕉の名作を読む。

1814

白石良夫全訳注

本居宣長「うひ山ぶみ」

「漢意」を排し「やまとたましい」を堅持して、真実の「いにしえの道」へと至る。古学の扱う範囲や目的と研究方法、学ぶ者の心構え、近世古学の歴史の意味等、国学の偉人が弟子に教えた学問の要諦とは？

1943

倉本一宏訳

藤原道長「御堂関白記」(上)(中)(下) 全現代語訳

摂関政治の最盛期を築いた道長。豪放磊落な筆致と独自の文体で描かれる宮廷政治と日常生活。平安貴族が活動した世界とはどのようなものだったのか。自筆本・古写本・新写本などからの初めての現代語訳。

1947~1949

片桐一男全訳注
杉田玄白蘭学事始

一八一五年杉田玄白が蘭学発展を回顧した書。「解体新書」翻訳の苦心談を中心に、蘭学の揺籃期から隆盛期までを時代の様々な様相を書き込みつつ回想したもの。日蘭交流四百年記念の書。長崎家本を用いた新訳。

1413

江口孝夫全訳注
懐風藻

国家草創の情熱に溢れる日本最古の漢詩集。近江朝から奈良朝まで、大友皇子、大伴皇子、遣唐留学生などの佳品百二十編を読み解く。新時代の賞美や気負に燃えた心、清新潑刺とした若き気漲る漢詩集の全訳注。

1452

今泉忠義訳(解説・田邊正男)
新装版源氏物語 (一) (七)

不朽の中古物語文学を現代語で読む。稀代の国語学者が、鋭敏な言語感覚と学問の嚴肅さを融合させた完訳「源氏」。光源氏と彼を取り巻く人々の栄光と落日、華やかな恋愛模様をあますところなく描いた王朝絵巻。

1456~1462

秋本吉徳全訳注
常陸国風土記

古代東国の生活と習俗を活写する第一級資料。筑波山での歌垣、夜刀神をめぐる人と神との戦い、巨人伝説・白鳥伝説など、豊かな文学的世界が展開する。華やかな漢文で描く、古代東国の人々の生活と習俗とところ。

1518

宮崎莊平全訳注
紫式部日記 (上) (下)

「源氏物語」の作者、紫式部の宮仕え日記。親王誕生の慶びに沸く御堂関白家。初孫を腕に抱き目を惜める道長の姿。次々と繰り広げられる祝儀や賀宴の情景。中宮彰子に仕えた式部の繰る注目すべき日記の傑作。

1553・1554

興津 要編(解説・青山忠一)
古典落語

名人芸と伝統——至高の話芸を文庫で再現！人情の機微、人生の種々相を笑いの中にとらえ、庶民の姿を描き出す言葉の文化遺産・古典落語。「目黒のさんま」「時そば」「寿限無」など、厳選した二十一編を収録。

1577

次田香澄全訳注

とはずがたり (上) (下)

後深草院の異常な寵愛をうけた作者は十四歳にして男女の道を体験。以来複数の男性との愛欲遍歴を中心に、宮廷内男女の異様な関係を生々しく繰る個性的な手記。鎌倉時代の宮廷内の愛欲を描いた異彩な古典。

795・796

宇治谷 孟訳

日本書紀 (上) (下) 全現代語訳

龐大な量と難解さの故に、これまで全訳が見送られてきた日本書紀。二十年の歳月を傾けた訳者の努力により全現代語訳が文庫版で登場。歴史への興味を倍加させる、現代文で読む古代史ファン待望の力作。

833・834

宇治谷 孟訳

続日本紀 (上) (中) (下) 全現代語訳

日本書紀に次ぐ勅撰史書の待望の全現代語訳。上巻は全四十巻のうち文武元年から天平十四年までの十四巻を収録。中巻は聖武・孝謙・淳仁天皇の時代を、巻三十からの下巻は称徳・光仁・桓武天皇の時代を収録した。

1030~1032

今物語

三木紀人全訳注

埋もれた中世説話物語の傑作。全訳注を付す。和歌・連歌を話の主軸に据え、簡潔な和文で綴る。風流譚・道世譚・恋愛譚・滑稽譚など豊かで魅力的な逸話を五十三編収録し、鳥羽院政期以降の貴族社会を活写する。

1348

萩原千鶴全訳注

出雲国風土記

現存する風土記のうち、唯一の完本。全訳注。古代出雲の土地の状況や人々の生活の様子はもとより、出雲の神の国引きや支佐加比売命の暗黒の岩窟での出産などの神話も詳細に語られる。興趣あふれる貴重な書。

1382

上坂信男・神作光一全訳注

枕草子 (上) (中) (下)

「春は曙」に始まる名作古典「枕草子」。自然と人生に対する鋭い観察眼、そして愛着と批判。筆者・清少納言の独自の感性と文才とが結実した王朝文学を代表する名隨筆に、詳細な語釈と丁寧な余説、現代語を施す。

1402~1404

保坂弘司訳

大鏡 全現代語訳

藤原氏一門の栄華に活躍する男の生きざまを、表では讚美し裏では批判の視線を利かして人物の心理や性格を描写する。陰謀の事件を叙するにも核心を衝くなど、「鏡物」の祖たるに充分な歴史物語中の白眉。

491

桑原博史全訳注

西行物語

歌人西行の生涯を記した伝記物語。友人の急死を機に、妻娘との恩愛を断ち二十五歳で敢然出家した武士藤原義清の後半生は数奇と道心一途である。「願はくは花の下にて春死なむ」ほかの秀歌群が行間を彩る。

497

三角洋一全訳注

堤 中納言物語

十篇の物語から成る平安時代の短編物語集。伝統的なもののあわれの世界を描く一方、皮肉な笑いで人生の断面をとらえるなど、むしろ近代小説の性格に近く、意匠のこらされた佳作群は中古文学中、異彩を放つ。

557

桑原博史全訳注

おとぎ草子

おとぎ草子は、女性子供に愛読された室町時代の絵入り短編小説である。滝口入道の悲恋「横笛草子」、今も歌舞伎などで親しまれる安珍清姫の「道成寺縁起」、童話でなつかしい「鉢かづき」等七編を収載。

576

品川和子全訳注

土佐日記

平安前期の歌人・紀貫之が国守として赴いた土佐から任満ちて京に帰るまでの紀行日記。仮名文学の出発点として価値が高い。本書は、諸文献のエッセンスを採り入れ、周到な訳注・考証に新知見を盛り込んだ。

605

有吉 保全訳注

百人一首

わが国の古典中、古来最も広く親しまれた作品百首に明快な訳注と深い鑑賞の手引を施す。一首一首の背景にある出典、詠歌の場や状況、作者の心情にふれ、さらに現存最古の諸古注を示した特色ある力作。

614

久曾神きよそがみ 昇ひた全訳注

古今和歌集 (一)～(四)

古今集は勅撰二十一代集の嚆矢であり、それ以後の勅撰集・私撰集の規範となった。平安時代の最も優れた歌一千余首を精選分類したもので、歌を通して平安貴族の情趣的生活を窺い知ることができ。 (全四巻)

432～435

井上宗雄全訳注

増鏡 (上) (中) (下)

王朝文学の有終の美を飾ったともいえる「増鏡」を、古本系によりつつ、しかし増補本系の本文をも排除することなく的確かつ情趣に富む全訳注を行った。きらびやかな王朝の残映を記述した歴史物語。(全三巻)

448～450

久富哲雄全訳注

おくのほそ道

芭蕉が到達した俳諧紀行文の典型が「おくのほそ道」である。全体的構想のもとに句文の照応を考え、現実の景観と故事・古歌の世界を二重写的に把握する叙述法などに、その独創性的一端がうかがえる。

452

安良岡康作全訳注

方丈記

「ゆく河の流れは絶えずして」の有名な序章に始まる鴨長明の隨筆。鎌倉時代、人生のはかなさを詠嘆し、大火・大地震・飢饉・疫病流行・人事の転変にもまれる世を連れて出家し、方丈の庵を結ぶ経緯を記す。

459

小松登美全訳注

和泉式部日記 (上) (中) (下)

平安時代の情熱歌人、和泉式部と帥宮敦親王との熱烈の恋を物語風に綴った日記である。仮名日記文学中でも、古來名作と謳われた「和泉式部日記」に綿密な解釈と、明快な学術的洞察を加えた秀作。(全三巻)

473～475

青木正次全訳注

雨月物語 (上) (下)

「雨月物語」は人間の執念のすさまじさを描く。「菊花の約」「浅茅が宿」は靈となっても守りぬく約束の執念、「吉備津の釜」「蛇性の姪」「青頭巾」は愛欲の執念、「貧福論」は金銭の執着など卓抜な作品を収載。

487・488

川口久雄全訳注
わかんろうえいしゆう
和漢朗詠集

王朝貴族の間に広く愛唱された、白楽天・菅原道真の詩、紀貫之の和歌など、珠玉の歌謡集。詩歌管絃に秀でた藤原公任の感覚で選びぬかれた佳句秀歌は、自然の美をあまねく歌い、男女の愛恋の情をつづる。

325

中田祝夫全訳注
のりおわ
日本靈異記

(上)(中)(下)

日本靈異記は、南都薬師寺僧景戒の著で、日本最初の仏教説話集。雄略天皇(五世紀)から奈良末期までの説話百二十篇ほどを収めて延暦六年(七八七)に成立。奇怪譚・靈異譚に満ちている。(全三巻)

335~337

杉本圭三郎全訳注

平家物語 (一)~(十二)

平氏一門の極まりない栄華の滅びゆく過程を、歴史の動乱の全体像として語った一大叙事詩『平家物語』は、中世を代表する古典であり、かつ民族的遺産として永遠に読みつがれる名作である。(全十二巻)

351~362

森本元子全訳注
いざよいにつぎ
十六夜日記・夜の鶴

亡夫の遺産相続をめぐる訴訟のため、高齡の身で鎌倉に下った歌人阿仏の、知性と抒情にあふれた作品『十六夜日記』。それに歌道入門書として執筆された『夜の鶴』をあわせて、生鮮な現代語訳をつけた。

373

阿部俊子全訳注
伊勢物語 (上)(下)

平安朝女流文学の花開く以前、貴公子が誇り高く、颯爽と行動してひたむきな愛の遍歴をした。その人間悲哀の相を、華麗な歌の調べと綿い合わせ纏め上げた珠玉の歌物語のたまゆらの命を読み取ってほしい。

414・415

三木紀人全訳注
つよと
徒然草 (一)~(四)

美と無常を、人間の生き方を透徹した目でながめ、価値あるものを求め続けた兼好の随想録。全二百四十四段を四冊に分け、詳細な注釈を施して、行間に秘められた作者の思索の跡をさぐる。(全四巻)

428~431

古典訳注

関根慶子全訳注
さらしな

更級日記 (上) (下)

九百年前の一地方官の娘が、父母や姉にいつくしまれ、夢多い文学少女から一時は宮廷に仕えるが、やがて妻となり母となりついに未亡人となりつて四十余年をふり返る。美と真実に生きた一人の女性の回想録。

172・173

次田真幸全訳注

古事記 (上) (中) (下)

本書の原典は、奈良時代初めに史書として成立した日本最古の古典である。これに現代語訳・解説等をつけ、素朴で明るい古代人の姿を平易に説き明かし、神話・伝説・文学・歴史への道案内をする。(全三巻)

207~209

上村悦子全訳注
かげろう

蜻蛉日記 (上) (中) (下)

一夫多妻下の平安時代、貴族に嫁しながら夫の愛欲に悩み続けた才色兼備の一女性の日記。当時の物語の架空性を否定し、女性の真の姿を描いて後世に多大な影響を与えた女流日記文学の先駆的作品。(全三巻)

236~238

上坂信男全訳注
うえさか

竹取物語

日本の物語文学の始祖として古来万人から深く愛された「かぐや姫」の物語。五人の貴公子の妾争いは風刺を盛った民俗調が導かで、後世の説話・童話にも発展する。永遠に愛される素朴な小品である。

269

桑原博史全訳注

とりかへばや物語 (一) (二) (三) (四)

平安末期成立のこの物語は、男装女装して宮廷に暮らす兄妹が、悲劇喜劇の経験を積みながら人間的に成長し、自力で運命を開いて本来の姿にもどる話。人の世の愛のあり方を考えさせる内容を持つ。(全四巻)

293~296

北村季吟著／有川武彦校訂
きたむら

源氏物語湖月抄 (上) (中) (下) 増注

「源氏物語」を真に味読するための最高の伴巻。上巻には「源氏」の考証を行なった首巻と、本文桐壺の巻から明石の巻まで、中巻には落標の巻から柏木の巻まで、下巻には横笛の巻から夢浮橋の巻までを収録。

314~316

松田 修著

古典植物辞典

自然に恵まれてきた日本人は、古来美しい花々を愛で暮らしてきた。「古事記」「風土記」「万葉集」「源氏物語」などを精査し、飛鳥・奈良・平安の人々はどんな草花に接し、共に暮らしてきたのか考証を加える。

1958

V・グレンベック著／山室 静訳

北欧神話と伝説

キリスト教とは異なる独自の北方的世界観を有していたヨーロッパ周縁部の民々ゲルマン人。荒涼にして寒貧な世界で育まれた峻厳偉大なる精神を描く伝説の魅力に迫る。北欧人の奥深い神話と信仰世界への入門書。

1963

堀内 修著

オペラ入門

イタリヤ派・ドイツ派はもちろん、バロック・オペラから挑発的な新演出まで、歴史と歌手・指揮者・演出家など最新事情を紹介。「偉大な芸術にして滅法楽しいエンターテインメント」の世界へ誘う魅惑のガイド決定版!

1969

鈴木棠三著

ことば遊び

しゃれ(秀句・地口・もじり)、尻取り、回文、早口ことば……。万葉の時代より、和歌、連歌、俳諧、雑俳とからみつつ発展してきたことば遊びの系譜を一覧し、洒脱にして豊かなる日本語の世界を逍遥する。

1972

井波律子著

中国人の機智 「世説新語」の世界

後漢(2世紀末)から東晋末(5世紀初)の激動期。「竹林の七賢」など傑物達の当意即妙、舌鋒鋭い言葉を集めた「世説新語」で展開する、虚無と哄笑が織りなす世界。命賭けの機智は乱世を生き抜く武器だった。

1975

馬杉宗夫著

黒い聖母と悪魔の謎

大文字版

中世ヨーロッパに盛んに建てられた大聖堂には、数々の奇怪な造形が組み込まれていた。目隠された女性像、棄人間、黒い聖母、悪魔、ガルグイユ……。『神の国』に表現された異形のものたちの意味を解説する。

1844

堀越孝一著

中世の秋の画家たち

十五世紀ネーデルラントは「中世の秋」と名付けられた一個の生活空間であった。そこに花開いた活気溢れる北方ルネサンスの文化。ファン・アイク兄弟、メムリンク、ボッスなどの絵画に中世空間の文法を読む。

1854

田中善信著

芭蕉二つの顔 俗人と俳聖と

俗世を捨て、奥の細道を旅する晩年とは対照的に、青年時代には、処世に長け、伊達を好んだ芭蕉。旅をする以前は何を生業とし、どんな交友関係を結んでいたのか。芭蕉の前半生の謎に切り込む画期的な論考。

1892

磯山 雅著

モーツァルトⅡ翼を得た時間

「時間を追い越し、時間が追いつけないほど足早に走って、高く飛翔してゆく」モーツァルトの音楽。「フイガロの結婚」の革新性、「協奏曲」の冒険……その「音楽美」をさまざまな角度から探る、贅沢な音楽論。

1898

皆川達夫著

中世・ルネサンスの音楽

グレゴリオ聖歌、ポリフォニー・ミサ曲、騎士世俗歌曲……。バロック以前の楽曲はいかに音楽史の底流を流れ続けたか。ヨーロッパ音楽の原点、多彩で豊かな中世・ルネサンス音楽の魅力を歴史にたどる決定版。

1937

石川忠久編

漢詩鑑賞事典

滔々たる大河、汲めども尽きぬ漢詩の魅力をいかに味わい、楽しむか。古代の「詩経」から現代の魯迅まで、中国の名詩二百五十編に現代語訳・語釈・解説を施し、日本人の漢詩二十四編「漢詩入門」も収録する。

1940

柳 宗悦著

民藝とは何か

大文字版

本当の美は日用品のなかにこそ宿る。昭和初頭に創始された民藝運動。美術工芸品ではなく、日用雑器の美を追求した柳宗悦。彼はなぜこの思想にめぐり、何をめざしたのか？ 民藝論への格好の入門書。

1779

杉本秀太郎文／安野光雅絵

みちの辺の花

カラー版

日本の四季のうつろいを彩る花々。みちの辺でふと出会ふ野の花、山の花。季節ごとに届けられた花を诗情豊かに描き、また、愛する花へのあふれる思いを綿々と綴る。身近で秘やかに咲く花への恋情こもる画文集。

1782

磯山 雅著

バロック音楽名曲鑑賞事典

心の深奥を震わす宗教音楽、古楽器が多彩に歌う協奏曲、宮廷を彩る典雅な調べ、誕生したてのオペラ。カッチーニ、モンテヴェルディからヘンデル、バッハまで、西洋音楽史の第一人者が厳選した名曲百曲の魅力。

1805

トマス・ブルフィンチ著／市場泰男訳

シャルルマーニュ伝説 中世の騎士ロマンス

『ギリシア・ローマ神話』、『中世騎士物語』と並ぶ、T・ブルフィンチの伝説三部作のうちの一作。キリスト教世界の守護者として、サラセン人や魔法使いと戦うシャルルマーニュと十二勇士の冒険物語。

1806

高山 宏著

近代文化史入門 超英文学講義

ニュートンが新たな詩の形式を生み、王立協会がシェイクスピアを葬った。科学、歴史学、哲学、辞典、造園術、博物学……。あらゆる知の領域を繋ぎ合わせて紡ぎ出す、奇想天外にして正統な文化の読み方。

1827

清水孝純著

ルネサンスの文学 遍歴とパノラマ

中世の枠を越え、未知への探究に乗り出した西欧文学をどう読むか。果敢な挑戦心、リアルな人間認識、横溢する創造力……。『ドン・キホーテ』『阿呆船』等の名作を通してルネサンス文学に流れる精神を解剖する。

1840

A・J・ルービン著／高儀 進訳
ゴッホ この世の旅人

天才画家の心の葛藤と作品の関係を徹底説明。激しい色調、情熱的で独特な画風。深い悲しみ、強い孤独感。闇から光へ向けての一人旅。自己と激しく格闘した天才画家の魂の秘密と絵のもつ深い美しさを探り出す。

1728

西村 亨著

知られざる源氏物語

不幸な大作・源氏物語の本当の面白さ解説。長すぎる故に読まれない、正当な評価を受けない。有名なだけのこの作品はどう作られ何が語られるのか、作者は一人なのかなど、新たな読み方を提示する刺激的論考。

1739

皆川達夫著

バロック音楽

音楽ファンを魅了する名曲の数々。オペラやカンタータ、ソナタやコンチェルト。多種多様で盛り豊かな音楽の花園、バロック音楽とはどのような音楽なのか。その特徴と魅力をあまさず綴る古楽への案内書。

1752

神林恒道著

近代日本「美学」の誕生

明治以降、西欧の美学はいかに咀嚼されたのか。フェノロサを端緒とし岡倉天心が展開した芸術論、囀外の結論などを検討し「日本の美」学から「日本の美学」へと練り上げられてゆく論点の軌跡を探る。

1754

堀内民一著(解説・上野 誠)

大和万葉旅行

「国のまほろば」と謳われた古代史・万葉集の主舞台、大和。かの地をくまなく踏査、国文学・民俗学研究成果を結実させ、万葉の世界を鮮やかに描く古典文学紀行。大和の地、万葉世界への格好のガイドブック。

1755

水尾比呂志著

近世日本の名匠

豪快で絢爛、活力に満ちた絵、清冽なリリシズムが漂う障壁画等々。日本の独自の美を創り出した造形家たち。永徳、等伯、織部、光悦などの業績と魅力を意匠家という独自の視点から捉え直した注目の論文集。

1757

石川栄作著

ジークフリート伝説 ワグナー「指環」の源流

ワグナーの楽劇「ニーベルングの指環」の魅力は何か。その主人公ジークフリート像を古代ゲルマンの英雄伝説に遡り、その系譜を辿り、英雄伝説から脈々と流れるドイツ文化の特質とその精神の核心に迫る。

1687

戸板康二著

歌舞伎の話

歌舞伎評論の第一人者が説く、歌舞伎の本質。著者ならではの蘊蓄を随所にちりばめつつ、歴史・役柄・演技・劇場・脚本等、多様な角度から歌舞伎の本質を浮き彫りにし、歌舞伎への正しい認識のあり方を説く。

1691

ヒュギーヌス著／松田 治・青山照男訳

ギリシャ神話集

壮大無比なギリシャ神話の全体像を俯瞰する。紀元二世紀頃、ギリシャの神話世界をローマの大衆へ伝えるために編まれた、二七七話からなる神話集。各話は極めて簡潔に綴られ、事典的性格を併せもつ。本邦初訳。

1695

藤岡忠美著

紀 貫之

日本人の美意識を創造した平安朝文人の全貌。「土佐日記」の作者で、「古今集」の代表的歌人、紀貫之。彫琢された日本語、余情妖艶な風趣。平安朝国風文化の牽引者の生涯を日本美に溢れた歌を鑑賞しつつ辿る。

1721

柳 宗悦著(解説・水尾比呂志)

工藝の道

工芸の美を発見し、評価した記念碑的論文集。民芸研究家柳宗悦が宗教学者から転じ、工芸の美を世に知らしめた最初の著述。それまで顧みられなかった工芸に作爲のない健康の美、本物の美があることを論じる。

1724

兵藤裕巳著(解説・川田順造)

太平記へよみの可能性 歴史という物語

忠臣と異形の者。楠正成が見せる異なる相貌。太平記よみの語りによって既存の神話やイデオロギーは掘り崩されてゆく。物語として共有される歴史が新たな現実を紡ぐダイナミズムを解明する戦記物語研究の傑作。

1726

バーナード・リーチ著／柳 宗悦訳／水尾比呂志補訳
バーナード・リーチ日本絵日記

イギリス人陶芸家の興趣溢れる心の旅日記。独自の美の世界を創造したリーチ。日本各地を巡り、また、濱田庄司・棟方志功らと交遊を重ね、自らの日本観や芸術観を盛り込み綴る日記。味のある素描を多数掲載。

1569

井口海仙著

ちやんどう
茶道名言集

大文字版

茶道とは何か。本書は、茶道書の古典から名人の言葉や逸話を豊富に集めて解説を施し、茶人のみならず我々の日常生活にも生きる茶の精神を平易な言葉で紹介する。わび・さび、一期一会——茶の世界への誘い。

1599

清水 勲著

江戸のまんが 泰平の世のエスプリ

大衆文化・漫画の起源は江戸時代にあった！ 寄せ絵、文字絵、鳥羽絵、大津絵、北斎漫画……。次々飛び出す笑いと驚き。江戸の代表的な漫画百点余から、庶民の日常生活と時代の意外な相貌を探る異色の評議集。

1603

せん げんしゅう
茶の精神

大文字版

茶の湯とはなにか？ その究極の理想とは？ 中国から日本へ伝わった喫茶の風習は、茶道という特異な文化を形成し、利休により大成された。裏千家四百年の伝統を継承する十五世家元が説く茶道精神の文化史。

1621

村井康彦著（解説・熊合功夫）
千利休

精緻な論証が鮮やかに描き出した茶聖の実像。信長・秀吉との交流、草庵茶湯の大成、そして悲劇的な死——。天下一の宗匠の生涯と思想を究明し、さらに日本文化史における彼の位相をも探る、利休研究の名著。

1639

おきつ かつら
興津 要著

落語 笑いの年輪

第一人者が軽妙に綴る江戸話芸・落語の歴史。戦国期に端を発する落語は、江戶期に円生、志ん生、幕末期に円朝らの名人を輩出、隆盛の礎を築いた。笑いを求める民衆が育んだ落語、その芸と芸人四百年の来歴。

1675

小泉八雲著／平川祐弘編
光は東方より 小泉八雲名作選集

日本を深く愛した小泉八雲の名作選集。自然や日常生活でのありふれた出来事。そんな身近なものの中に「華やかなるもの」を見る日本人の感性に八雲は共感をもって視線をむける。日本人を語る珠玉の短編集。

1373

ヴェルナー・フェーリクス著／杉山 好訳
バッハ 生涯と作品

楽譜に結晶させたバッハの音楽とその人間像。バロック音楽を代表する作曲家、バッハ。神に対する深い信仰心、創作活動の魂の葛藤に視点を当て、彼の生涯と豊かな作品世界、その魅力を見事に位置づけ描き出す。

1401

クイントゥス著／松田 治訳
トロイア戦記

本邦初訳。古代ギリシアの長編英雄叙事詩。アマゾンの女王の華麗な活躍、木馬作戦の顛末等の魅力的挿話を多数ちりばめ、トロイア崩壊までを描く。「イリアス」と「オデュッセイア」を架橋する壮大な試み。

1447

柳 宗悦著(解説・戸田勝久)
茶と美

民芸研究の眼でとらえた茶道と茶器への想い。茶器の美とは何か。「庶民が日々用いた粗末な食器が茶人の眼によって茶器となる。美の作爲を企てて名器とはなり得ない」美の本質を追求した筆者の辛口名エッセイ。

1453

ドナルド・キーン著／吉田健一・松宮史朗訳
能・文楽・歌舞伎

日本の伝統芸能の歴史と魅力をあまきず語る。少年期より演劇の癡になって以来、七十年。日本人以上に日本文化に通暁する著者が、能・文楽、歌舞伎について、そのすばらしさと醍醐味とを存分に語る待望の書。

1485

杉本秀太郎著
平家物語 無常を聴く

「平家」を読む。それはかすかな物の気配に聴き入ることから始まる。「無常」なるものと向きあい、揺れて定まらぬもの、常ならざるもの、不朽の古典とおして描く、珠玉のエッセイ。大佛次郎賞受賞作。

1560

井上章一著

つくられた桂離宮神話

神格化された桂離宮論の虚妄を明かす力作。タウトに始まる(日本史の象徴)としての桂離宮神話。それが実は周到に仕組まれた虚構であったことを社会史的手法で実証した。サントリー学芸賞受賞の画期的論考。

1264

高島俊男著

李白と杜甫

飄逸と沈鬱——李・杜の全く異なる詩の境地。同時代を生き、同様に漂泊の人生を送った李白と杜甫。二人の生涯の折々の詩を味読し、詩形別に両者の作品を比較考察。李白と杜甫の詩を現代語訳で味わう試みの書。

1291

アンナ・マグダレーナ・バッハ著／山下 肇訳

バッハの思い出

名曲の背後に隠れた人間バッハを描く回想録。比類なき音楽家バッハの生涯は、芸術と生活の完全なハーモニーであった。バッハ最良の伴侶の目を通して愛情深くつづった、バッハ音楽への理解を深める卓越の書。

1297

藤井貞和著

古典の読み方

現代人が日本古典を読む方法を平易に解説。伝承的なものが日々失われつつある現代こそ、日本古典に目を向ける時だ。物語や和歌を読みこなすための基本的な知識と技術をわかりやすく解説した最良の入門書。

1315

村上哲見著

唐詩

詩聖杜甫、詩仙李白を生んだ唐代の詩を読む。中国古典詩の頂峰といわれる唐詩。七世紀初めから約三百年間に作られた唐詩を大きく四つの時期に区分し、各時期の時代情況と唐詩の関係を考察した文庫オリジナル。

1352

つのだまゑい
角田文衛著(解説・瀬戸内寂聴)

平安の春

平安の都を彩なす人間模様を巧みに描き出す。紫式部と清少納言の比較、藤原師輔の真実の姿、尊朝君主白河法皇の悪評の根元などを透徹の文章で見せる名エッセイ。謎れた人間関係を様々な文献によってとき解す。

1360

杉本秀太郎著
花ごよみ

美しい日本の四季を彩る花づくし百三十二章。わが国の山野、路傍、水辺、町なかに見出される四季折々の可憐な花々。近代日本の詩歌を中心に、古今東西の花にまつわる詩歌についての蘊蓄をかたむけた好著。

1141

小西甚一著(解説・平井照敏)
俳句の世界 発生から現代まで

俳諧連歌の第一句である発句と、子規の革新以後の俳句を同列に論じることはいできない。文学史の流れを見すえた鋭い批評眼で、俳句鑑賞に新機軸を拓いた不朽の書。俳句史はこの一冊で十分、と絶讃された名著。

1159

柄谷行人著
終焉をめぐって

移動する思想家・柄谷行人が見た終焉とは？ 一九八九年にはさまざまな《終り》があった。昭和が終り戦後体制の終りがあった。大江健三郎や村上春樹らの脱解を通し終焉の意味と無意味を明視した文芸評論集。

1179

田中仙翁著
茶道の美学 茶の心とかたち

現代の茶人が説く流儀と作法を超えた茶の心。先人によって培われた茶道の妙境には、日本独自の美意識と精神性がこめられている。茶道の歴史の変遷と、茶室における所作の美を解説。現代人のための茶道入門。

1221

池内 紀著
モーツァルト考

十八世紀の光と影を背景に描く天才の素顔。フランス革命によって暮をおろした華やかな十八世紀西欧文化の最後の体現者としてのモーツァルト。誕生から死まで、その謎にみちた生涯をエピソード豊かに語る。

1244

三浦雅士著(解説・柴田元幸)
私という現象

いまや芸術のすべての領域で自我の崩壊が主題となっている。《私》という現象のありようを、物語の終焉を体現する作家たちを通して考察した処女作。《現象としての自己》を論じた第一評論集、待望の文庫化。

1250

H・D・ソロー著／佐渡谷重信訳
森の生活 ウォールデン

コンコードの村はずれのウォールデン池のほとりに、ソローは自ら建てた小屋で労働と自然観察と思索の生活を送りながら、自然に生きる精神生活のすばらしさを説く。物質文明への警鐘、現代人必読の古典的名著。

961

吉田秀和編訳(解説・佐伯彰一)
モーツァルトの手紙

モーツァルトは愛を知る心や平和な魂にとつての無二の伴侶だ。万人必読の書とロマン・ロランも讃美した至上の書簡集から百余通を精選し、適確な名訳で紹介。天才音楽家の手紙からその情熱の生涯を辿る。

969

田中英道著(解説・杉浦明平)
レオナルド・ダ・ヴィンチ

「三王礼拝図」「聖アンナと聖母子」「モナリザ」など名作中に秘められた《絵の言葉》を解説し、レオナルドの神秘的芸術思想を明らかにする。《万能の天才》の謎にみちた生涯と芸術を解明した注目の独創的研究。

1013

小西甚一著(解説・ドナルド・キーン)
日本文学史

洗練された高い完成を目指す「雅」、荒々しく新奇な魅力に富んだ「俗」。雅・俗交代の視座から日本文学の歴史を通観する独創的な遠近法が名高い幻の名著の復刊。大佛實・日本文学史の原形をなす先駆的名著。

1090

T・G・ゲオルギアードス著／木村 敏訳
音楽と言語

音楽も言語も共同体の精神が産み出した文化的所産である。ミサ音楽を中心に、両者の根源的な結びつきと対決の歴史現象の根底にある問題を追究した音楽史の名著。ミサの作曲に示される西洋音楽のあゆみ。

1108

岡倉天心著／桶谷秀昭訳
英文収録茶の本

ひたすらな瞑想により最高の自己表現をみる茶道。西洋文明に対する警鐘をこめて天心が綴った茶の文化への想いを、精魂こめた訳文によって復刻。東西の文明観を超えた日本茶道の神髄を読む。原著英文も収録。

1138

小泉八雲著／平川祐弘編
日本の心

障子に映る木影、小さな虫、神仏に通じる参道——名もない庶民の生活の中に、八雲は「無」や「空」の豊かな美しさを見た。異国の詩人が見事に描いた古き良き日本。八雲文学の中心に位置する名編。

938

小泉八雲著／平川祐弘編
明治日本の面影

美しい風土、様々な人との出会い。八雲は日本各地を旅し、激しい近代化の波の中で失われつつある明治日本の気骨と抒情を、愛措の念をこめてエッセーに綴った。懐かしい明治日本によせた八雲の真情を読む。

943

小松英雄著
徒然草抜書 表現解析の方法

「徒然」とは何か、「ものぐるほしけれ」とは？ 研究し尽くされたかに見える名高い古典「徒然草」だが博大な学殖による読みと重厚な論理的追究、驚くべき炯眼により、見過ごされてきた真実が照らし出される。

947

小泉八雲著／平川祐弘編
神々の国の首都

出雲の松江という「神々の国の首都」での見聞を八雲は新鮮な驚きにみちた眼で捉えた。明治二十年代の一地方都市とその周辺の風物、人々の姿を鮮やかに描いた名著。みずみずしい感動に溢れた八雲の日本印象記。

948

吉田秀和著(解説・川村二郎)
モーツァルト

わが国の音楽批評の先導者・吉田秀和の出発点にはベートーヴェンでもバッハでもなくモーツァルトの音楽があった。楽曲の細部に即して語りつつ稀有の天才の全体像を構築した、陰影に富むモーツァルト論案。

949

目加田 誠著
詩経

中国古代民衆の心情を伝える美しい古典詩集。遙か遠い殷の世から紀元前五、六世紀の春秋時代までに詠われた詩を現代語に訳し解説。中国文学研究の最高権威が精魂こめて著した「詩経」研究の決定版。

953

山崎正和著(解説・青野昭正)
不機嫌の時代

近代の日本文学に見られる共通の不安感情を追究。嶮外、激石、荷風、直哉らの作品に見られる特有の鬱屈した気分「不機嫌」を、二十世紀の人間学の極めと重要な概念として細密に描きわけた長篇文芸評論。

721

飯田龍太著(解説・島田修二)
俳句入門三十三講

俳句実作に不可欠の要件を説いた初学講義録。季節に対する繊細な感覚、素早い直感力と集中力、また日常身辺に存せる愛情と好奇心など、俳句の魅力とその上達への鍵を、豊富な実例をあげながら教示した好著。

755

久松真一著(解説・藤吉慈海)
茶道の哲学

茶道の本質、無相の自己とは何か。本書は、著者の茶道の実践論ともいうべき「茶道叢」を中心に展開。「日本の文化的使命と茶道」「茶道における人間形成」等の論文をもとに茶道の正道を説いた刮目の書。

813

山本健吉著
基本季語五〇〇選

「最新俳句歳時記」「季寄せ」の執筆をはじめ、多年に亘る俳句研究の積み重ねの中から生まれた季語解説の決定版。俳句研究の最高権威の手に成る基本歳時記で、作句の全てはこの五百語の熟読理解から始まる。

868

高階秀爾著
フランス絵画史 ルネッサンスから世紀末まで

十六世紀から十九世紀末に至る四百年間は、フランス精神が絵画の上に最も美しく花開いた時代である。美の様式を模索する芸術家群像とその忘れ難い傑作の系譜を、流麗な文章で迎える本格的通史。文庫オリジナル。

894

小泉八雲著／平川祐弘編
怪談・奇談

一八九〇年に来日以来、彼と日本の文化を深く愛し続けた小泉八雲。本書は、彼の作として知られている「耳なし芳一」「轢轢首」「雪女」等の怪談・奇談四十二篇を新訳で収録。さらに資料として原撰三十篇を翻刻した。

930

桑田忠親著

茶道の歴史

茶道研究の第一人者による興味深い日本茶道史。能阿弥・紹圖・遠州・宗旦と大茶人の事跡をたどりつつ、歴史的背景や人物のエピソードをまじえながら、茶道の生成発展と「茶の心」を明らかにする。

453

上村悦子著

万葉集入門

「万葉集」中の名歌約二百六十首の現代語訳と鑑賞。著者の現代語訳は歌の気分をそこなわす、また万葉の名歌を手軽な読みもののおもしろさで、楽しみながら読ませてくれる。万葉集入門に最適な書といえる。

525

楠山正雄著解説・楠山三香男

日本の神話と十大昔話

「日本書紀玉葉」(二)に収めてある神話は、神と人間の交流の中に生まれた不思議なロマンを秘めた物語であり、十大昔話は、だれでもが一度は聞き、子供たちにも語り伝えたい心暖まる日本昔話の再話である。

600

阿部脩人著解説・向井 敏

俳句 四合目からの出発

初心者の俳句十五万句を点検・分類し、そこに共通して見られる根深い欠陥である紋切型表現と手を切れば、今すぐ四合目から上に登ることが可能と説く。俳句上達の秘密を満載した必携の画期的な実践入門書。

631

上田三四二著解説・宮内 豊

徒然草を読む

徒然草はただ一つのことを切言していると言われている。著者は言う。「先途なき生」と。明日をも知れぬいのちを生きるその極意は、「ただいまの一念」である」と訴えかけるその思想を、時間論に焦点を合わせて洞察した好著。

719

岡倉天心著解説・松本三之介

東洋の理想

明治の近代黎明期に、当時の知性の代表者のひとり天心は敢然と東洋文化の素晴らしさを主張した。「我々の歴史の中に我々の新生の泉がある」とする本書は、日本の伝統文化の本質を再認識させる名著である。

720

久松潜一著(解説・伊原 昭)
万葉秀歌 (一)～(五)

著者がその解釈と鑑賞に半生を傾けた『万葉集』の秀歌九百首を集大成したライフワーク。生涯『万葉集』を愛し、研究しつづけた著者ならではの深い理解と見識にみちた、古典愛好者必携の名著。(全五巻)

2~6

吉川幸次郎著(解説・奥藤 宏)
中国文学入門

三千年というとはうもなく長い中国文学の歴史の特質は何かを、各時代各ジャンルの代表的作品例に即して、また、西洋文学との比較を通してわかり易く解明。ほかに、『中国文学の四時期』など六篇を収録。

23

東山魁夷著

日本の美を求めて

日本画壇の第一人者、あくなき美の探究者東山画伯が、日本の風景への憧憬と讃歌を綴る随想と講演あわせて五篇を収録する。自然との邂逅とその感動が全篇を貫いて響き、日本美の根源へと読者を誘う好著。

95

井本農一著

芭蕉入門

芭蕉が芸術の境地を確立するまでには、さまざまの試行錯誤があった。その作品には俳諧の道を一筋に追い求めた男のきびしい体験が脈打っている。現代人に共感できる人間芭蕉を浮き彫りにした最適の入門書。

122

井本農一著

良寛 (上) (下)

春の日に手まりをつけて子どもと遊んだ名僧。これが良寛のイメージだが、はたしてそれだけだろうか。良寛はほんとうはどんな人だったのだろうか。良寛の新しい人間像を描き、主要作品をみなおす力作。

210・211

夏目漱石著(解説・瀬沼茂樹)

私の個人主義

文豪夏目漱石の、独創的で魅力あふれる講演集。漱石の根本思想である近代個人主義の考え方を述べた表題作を始め、先見の明に満ちた「現代日本の開化」、他、「道楽と職業」、「中味と形式」、「文芸と道徳」を収める。

271

イザベラ・バード著／時岡敬子訳

イザベラ・バードの日本紀行（上）（下）

一八七八年に行われた欧米人未踏の内陸ルートによる東京―函館間の旅の見聞録。大旅行家の冷徹な眼を通じ、維新後間もない北海道・東北の文化・自然等を活写。関西方面への旅も収載した、原典初版本の完訳。

1871・1872

山本博文著

殉死の構造

戦国時代、主君を犠牲にしても助かろうとした武士の世界になぜ、近世初期、殉死が流行したのか。主君に対する忠誠心の発露とされ、美談や悲劇として語られてきた、独特の日本文化に潜んだ意外な本質とは？

1893

清水 勲著

ピゴーが見た明治職業事情

激動の明治期、人々はどんな仕事をして生活していたのか。洋服屋、鹿鳴館職員など西洋化により登場した職業を始め、超富裕層から庶民まで、仏人画家ピゴーが描いた百点超の作品を紹介、その背景を解説する。

1933

中島義道／加賀野井秀一著

「音漬け社会」と日本文化

注意・案内・お願いなど公共空間に撒き散らされる音は、親切なのか暴力なのか。音の洪水が私たちに苦痛を与えるのは何故か。また苦情が理解されない背景とは。日本人の言語・コミュニケーション観を考察。

1939

森 三樹三郎著

「名」と「恥」の文化

大文字版

名と恥を通し日本と中国の文化の核心に迫る。西洋の罪の文化に対し、日本と中国の恥の文化。名と恥は表裏一体。譯摩札、門聯、標語、中国人の名への強い愛好の念。日本と中国の文化の本質と相違とは何か。

1740

清水 勲著

ビゴーが見た明治ニッポン

西欧文化の流入により急激に変化する社会、時代への波にもまれる人びとの生活を、フランス人画家ビゴーは愛情と諷刺を込めて赤裸々に描いた。百点の作品を通して、近代化する日本の活況を明らかにする。

1794

村澤博人著

顔の文化誌

日本人は「顔隠しの文化」「正面顔文化」など独特の美意識をもつ。どのような顔が美とされ、なぜそれが選ばれたのか。綿密な考証と実験で日本人らしさや日本的美意識を追究する。顔から読み解く日本文化論。

1804

李^イ 御寧^{オウギョウ}著(解説・高階秀爾)

「縮み」志向の日本人

小さいものに美を認め、あらゆるものを「縮める」ところに日本文化の特徴がある。入れ子型、扇子型、折詰め弁当型、能面型など「縮み」の類型に拠って日本文化を分析。「日本人論中の最尚傑作」と言われる名著。

1816

井上^{イノ}忠司^シ著

「世間体」の構造 社会心理史への試み

唯一絶対神をもたない日本人が行動・価値の規準としてきたのが「世間体」だった。世間の原義と変遷、日本人特有の微笑などが生まれる構造を分析、世間体を重んじる意味を再考する。世間論の嚆矢である名著。

1852

エ・A・ゴンチャロフ著／高野 明・島田 陽訳(解説・沢田和彦)

ゴンチャロフ日本渡航記

一八五三年ブチャーチン提督の秘書官として長崎に来航したゴンチャロフ。名作「オプロモフ」作者の目に、日本の風景、文化、庶民や役人の姿はどう映ったのか。鋭い観察眼にユーモアを交え描いた幕末模様。

1867

B・タウト著／森 佛郎訳（解説・佐渡谷重信）
日本文化私観

世界的建築家タウトが、鋭敏な芸術家的直観と秀逸した哲学的瞑想とにより、神道や絵画、彫刻や建築など日本の芸術と文化を考察し、真の日本文化の将来を説く。名著「ニッポン」に続くタウトの日本文化論。

1048

小池喜明著
葉隠 武士と「奉公」

泰平の世における武士の存在を問い直した書。「葉隠」は武士の心得について、元佐賀鍋島藩士山本常朝の語りをまとめたもの。儒教思想を否定し、武士の奉公は主君への忠誠と献身の態度で尽くすことと主張した。

1386

清水 勲著

ピゴーが見た日本人 諷刺画に描かれた明治

在留フランス人画家が描く百年前の日本の姿。文明開化の嵐の中で、急激に変わりゆく社会を戸惑いつつもたくましく生きた明治の人々。愛着と諷刺をこめてピゴーが描いた百点の作品から「日本人」の本質を読む。

1499

ドナルド・キーン著／足立 康訳
果てしなく美しい日本

若き日の著者が瑞々しい感覚で描く日本の姿。緑あふれ、伝統の息づく日本に思いを寄せて描き出した昭和三十年代の日本。時代が大きく変化しても依然として変わらない日本文化の本質を見つめ、見事に切り出す。

1562

R・ベネディクト著／長谷川松治訳
菊と刀 日本文化の型

菊の優美と刀の殺伐——。日本人の精神生活と文化を通して、その行動の根底にある独特な思考と気質を抉別し、不朽の日本論。「恥の文化」を鋭く分析し、日本人とは何者なのかを鮮やかに描き出した古典的名著。

1708

F・フェルディナント著／安藤 勉訳
オーストリア皇太子の日本日記 明治二十六年夏の記録

「サラエボの悲劇」の主人公が綴る日本紀行。明治中頃の日本を旅した皇太子が、各地で出会った風物や伝統文化、美術品蒐集の次第等につき精細に記した旅行記。「世界周遊日記」より日本部分を訳出。本邦初訳。

1725

梅原 猛著

日本文化論

〈力〉を原理とする西欧文明のゆきづまりに代わる新しい原理はなにか？〈慈悲〉と〈和〉の仏教精神こそが未来の世界文明を創造してゆく原理となるとして、仏教の見なおしの要を説く独創的な文化論。

22

山本七平著

比較文化論の試み

日本文化の再生はどうすれば可能か。それには自己の文化を相対化して再把握するしかないとする著者が、さまざまな具体例を通して、日本人のものの見方と伝統の特性を解明したユニークな比較文化論。

48

加藤周一著

日本人とは何か

現代日本の代表的知性が、一九六〇年前後に執筆した日本人論八篇を収録。伝統と近代化・天皇制・知識人を論じて、日本人とは何かを問ひ、精神的開国の要を説いて将来の行くべき方向を示唆する必読の書。

51

山本七平著

日本人の人生観

日本人は依然として、画一化された生涯をめざす傾向からぬけ出せないでいる。本書は、我々を無意識の内から拘束している日本人の伝統的な人生観を再把握し、新しい生き方への出発点を教示した注目の書。

278

S・ウォシュバン著／目黒真澄訳（解説・近藤啓彦）

乃木大将と日本人

著者ウォシュバンは乃木大将を *Brave Man* と呼んだ。この若き異国従軍記者の眼に映じた大将の魅力は何か。本書は、大戦役のただ中に武人としてギリギリの理想主義を貫いた乃木の人間像を描いた名著。

455

B・タウト著／森 佛郎訳（解説・持田季未子）

ニッポン

憧れの日本で、著者は伊勢神宮や桂離宮に滑らかな美の極致を発見して感動する。他方、日光陽明門の華美を拒みその後の日本文化の評価に大きな影響を与えた。世界的な建築家タウトの手になる最初の日本印象記。

1005

多田^{とくだ}等観^{くわん}著／牧野文子編(解説・山口瑞晶)

チベット滞在記

大正時代、国を鎖していたチベットに潜入し、十年余にわたりラサの寺院で修行を積んだ多田等観。ダライ・ラマ十三世との交流、困難な旅路、僧院生活、宗教・習俗、巡礼の旅など、数々の貴重な経験語る。

1946

V・プロップ著／齋藤君子訳

魔法昔話の研究

口承文芸学とは何か

「昔話の形態学」で世界に衝撃を与えた著者の構造的
研究、歴史的研究とは。民間伝承の構造と歴史的現実
との関係を鮮やかに分析、レヴィ・ストロースへの反
論も収録する。口承文芸の豊かな世界に誘う入門書。

1954

波平恵美子著

ケガレ

日本人の民間信仰に深く浸透していた「不浄」の観念
とは？ 死||黒不浄、出産・月経||赤不浄、罪や病
等、さまざまな民俗事例に現れたケガレ観念の諸相を
丹念に追い、信仰行為の背後にあるものを解明する。

1957

桜井 満著(解説・上野 誠)

花の民俗学

ハナは夷りの先触れであり、神の依代よしろであった。日本人にとって花とは何だろうか。正月の花、花見の桜、端午の菖蒲、重陽の菊……日本人の心の源流を万葉集などの古典に求め、祭りや年中行事に探訪する。

1857

野本寛一著

生態と民俗 人と動植物の相渉譜

人は自然から何を享受し、何を守ってきたのか。植物の活用とその生命力への崇拜、動物との敵対とその靈性への畏怖。自然と相渉る人々の民俗事例と伝承から、培われてきた相利相生の思想の有効性を検証する。

1873

R・ベネディクト著／米山俊直訳

文化の型

「菊と刀」で知られる著者の代表作。メラネシアなどの三つの未開社会の文化を分析し、人類学の相對主義的立場、文化の多様性、社会の性格等に論及。「文化とパーソナリティ」の問題の先駆をなした書である。

1881

吉野裕子著

山の神 易・五行と日本の原始蛇信仰

蛇と猪。なぜ山の神はふたつの異なる神格を持つのか？ 神島の「ゲーターサイ」、熊野・八木山の「笑い祭り」などの祭りや習俗を渉猟し、山の神にこめられた意味と様々な要素が絡み合う日本の精神風土を読み解く。

1887

赤坂憲雄著

東北学／忘れられた東北

南と北が相交わる境としての東北。稲作中心史観に費われたまなざしを斥けたとき見えてくる、縄文と弥生が織り重ねられた深い相貌。柳田民俗学を乗り越えて「いくつもの日本」を発見するための方法的出発の書。

1932

早川孝太郎著(解説・久保田裕道)

花祭

修験者たちによって天童川水系に伝えられ、中世に始まるとされる民俗芸能「花祭」。信仰・芸能・生活・自然に根ざした折りを今に伝える奥三河地方の神事を昭和初頭、精緻に調査した、日本民俗学の古典的名著。

1944

五来ごらい 重著しゅう（解説・上別府 茂）
石の宗教

日本人は石に靈魂の存在を認め、独特の石造宗教文化を育んだ。積石、列石、石仏などは、先祖たちの等身大の信心の遺産である。これらを謎を解き、記録に残らない庶民の宗教感情と信仰の歴史を明らかにする。

1809

吉田敦彦著

日本神話の源流

日本文化は「吹溜まりの文化」である。大陸、南方諸島、北方の三方向から日本に移住した民族、伝播した文化がこの精神風土を作り上げた。世界各地の神話と日本神話を比較して、その混淆の過程を探究する。

1820

赤坂憲雄著

結社と王権

王はどこに生まれ、国家はいかに形成されるのか。また共同体とのつながりは？ 血縁・地縁を超える幻想的共同体「結社」の存在分析を足がかりに、日本的王権Ⅱ天皇制の構造と国家形成の道筋を深く考察する。

1826

小松和彦著

日本妖怪異聞録

妖怪は山ではなく、人間の心の中に棲息している。滅ぼされた民と神が、鬼になった。酒吞童子、妖狐、天狗、魔王・崇徳上皇、鬼女、大嶽丸、つくも神……。日本文化史の裏で蠢いた魔物たちに託された闇とは？

1830

飯島吉晴著

竈神と廁神

異界と此の世の境

鹽や廁など、かつての日本家屋の暗所に祀られた神は、新旧や生死を転換する強力な靈威をもつ一方、富をもたらず家の守護神でもあった。昔話や儀礼、禁忌など伝承を博搜し、家つきの神の意味と役割を探る。

1837

石田英一郎著（解説・小松和彦）

新訂版桃太郎の母

桃太郎、一寸法師などの昔話に登場するへ水辺の小王子を遡れば、人類に普遍的な母子関係の原型へといたる。数万年にわたる人類の精神史を描く壮大な試みに取り組んだ名著が、口絵と新解説を増補し、再登場。

1838

瀬川清子著
婚姻覚書

女性民俗学者が調べあげた婚姻の形態と生態。日本女性はどうな婚姻をしてきたか。若者宿、通婚圏、婚舎の形態、嫁入りと祭祀等を、広範な実地踏査に基づいて精緻に分析、性的行事とその文化の本質を解明する。

1745

野本寛一著(解説・赤坂憲雄)
神と自然の景観論

信仰環境を読む

日本人が神聖感を抱き、神を見出す場所とは？ 人々を畏怖させる火山・地震・洪水・暴風、聖性を感じさせる岬・洞窟・淵・滝・湾口島・沖ノ島・磐座などの自然地形。全国各地の聖地の条件と民俗を探る。

1769

石毛直道著
麵の文化史

麵とは何か。その起源は？ 伝播の仕方や製造法・調理法は？ 歴大な文献を渉猟し、「鉄の臼袋」をもつて精力的に繰り広げたアジアにおける広範な実地踏査の成果をもとに綴る、世界初の文化麵類学入門。

1774

内堀基光・山下晋司著
死の人類学

語りの対象となり、アイコンのうちに視覚化され、儀礼的演技の中で操作される死。儀礼と社会構造の関係、靈魂観など、ボルネオ、スラウエシの事例をもとに、文化の中で死がどのように扱われるのかを考察。

1793

和歌森太郎著
神と仏の間

自然神から祖先信仰へ。仏教と民間信仰の融合。日本の宗教の原始風景である。お地藏さんとは何者なのか？ 幕末に「えゝじゃないか」が、なぜ大流行したのか？ 歴史学＋民俗学で、日本人の複雑な宗教意識を解説。

1798

西田正規著
人類史のなかの定住革命

「不快なものには近寄らない、危険であれば逃げてゆく」という基本戦略を捨て、定住化・社会化へと方向転換した人類。そのプロセスはどうだったか。遊動生活から定住への道筋に関し、通説を覆す画期的論考。

1808

赤坂憲雄著(解説・小松和彦)
境界の発生

現今、薄れつつある境界の意味を深く論究。生と死、昼と夜などを分かつかつ境はいまや曖昧模糊。浄土や地獄も消え、生の手応えも稀薄。文化や歴史の昏がりに埋もれた境界の風景を掘り起こし、その意味を探る。

1549

小野武雄著

吉原と島原

江戸時代の一大娯楽機関、遊廓の歴史と生態。色里として名高い江戸の吉原、京の島原、大坂の新町。それらはいかにして生まれ、発展したか。その沿革から説きおこし、遊廓の構造や運営、風俗等の変遷をたどる。

1559

池田弥三郎著

性の民俗誌

民俗学的な見地からたどり返す、日本人の性。一夜妻、一時女郎、女の上ばい等、全国には特色ある性風俗が伝わってきた。これらを軸とし、民謡や古今の文献に拠りつつ、日本人の性への意識と習俗の伝統を探る。

1611

吉本隆明・赤坂憲雄著

天皇制の基層

二人の論客が天皇制を支える原理に切り込む。天皇制とは？ 自己の切実な体験からその根底を問う吉本。歴史学と民俗学の研究成果を踏まえ、宮廷儀礼の大幅な変更と作爲を鋭く指摘する赤坂。注目すべき対談。

1617

宮本常一著(解説・網野善彦)

日本文化の形成

民俗学の巨人が遺した日本文化の源流探究。生涯の实地調査で民俗学に巨大な足跡を残した筆者が、日本文化の源流を探査した遺稿。畑作の起源、海洋民と床住居など、東アジア全体を視野に雄大な構想を掲げる。

1717

赤坂憲雄著

子守り唄の誕生

寝させ唄でも遊ばせ唄でもない、日本独特の子守り唄。年端もいかぬ子守り少女たちの暗いモノローグの背景とは何か。五木の子守唄の詞章を検討し、近代化の過程で消えていった精神史の風景を掘り起こす。

1742

山折哲雄著

仏教民俗学

日本の仏教と民俗は不即不離の關係にある。日本人の生活習慣や行事、民間信仰などを考察しながら、民衆に育まれてきた日本仏教の独自性と日本文化の特徴を説く。仏教と民俗の接点に日本人の心を見いだす書。

1085

宮本常一著(解説・神崎立武)

民俗学の旅

著者の身内に深く刻まれた幼少時の生活体験と故郷の風光、そして柳田國男や沢沢敬三ら優れた師友の回想など生涯にわたり歩きつづけた一民俗学徒の実践的踏査の書。宮本民俗学を育んだ庶民文化探求の旅の記録。

1104

小松和彦著(解説・佐々木宏幹)
ひまわり

憑靈信仰論

日本人の心の奥底に潜む神と人と妖怪の宇宙。闇の歴史の中へうごめく妖怪や邪神たち。人間のもつ邪悪な精神領域へ踏みこみ、憑霊という宗教現象の概念と行為の体系を介して民衆の精神構造に宇宙観を明示する。

1115

吉野裕子著(解説・村上光彦)

蛇 日本の蛇信仰

古代日本人の蛇への強烈な信仰を解き明かす。注連縄・鏡餅・案山子は蛇の象徴物。日本各地の祭祀と伝承に鋭利なメスを加え、洗練と象徴の中にその跡を隠し連続する蛇信仰の実態を、大胆かつ明晰に論証する。

1378

吉野裕子著

天皇の祭り 大嘗祭と天皇即位式の構造

大嘗祭にひそむ古代信仰の論理を解きほぐす。古代天皇制を支える思想原理は何か。北極星は天皇、北斗は宰相と位置づけ、天空の星々を人民を支え、四季を司り、民生の安定を保証する儀式の実態を鋭く明かす。

1455

筑紫申真著(解説・青木周平)

アマテラスの誕生

皇祖神は持統天皇をモデルに創出された！壬申の乱を契機に登壇する伊勢神宮とアマテラス。天皇制の宗教的背景となる両者の生成過程を、民俗学と日本神話研究の成果を用いダイナミックに描き出す意欲作。

1545

C・レヴィ・ストロース著／室 淳介訳
悲しき南回帰線 (上) (下)

「親族の基本構造」によって世界の思想界に波紋を投じた著者が、アマゾン流域のカドゥウエオ族、ポロロ族など四つの部族調査と、自らの半生を紀行文の形式でみごとに融合させた「構造人類学」の先駆の書。

711・712

宮本常一著(解説・田村善次郎)
民間暦

民間に古くから伝わる行事の底には各地共通の原則が見られる。それらを体系化して日本人のものの考え方や、労働の仕方を探り、常民の暮らしの折り目をなす暦の意義を詳述した宮本民俗学の代表作の一つ。

715

宮本常一著(解説・山崎福雄)
ふるさとの生活

日本の村人の生き方に焦点をあてた民俗探訪。祖先の生活の正しい歴史を知るため、戦中戦後の約十年間にわたり、日本各地を歩きながら村の成立ちや暮らしの仕方、古い習俗等を丹念に掘りおこした貴重な記録。

761

宮本常一著(解説・田村善次郎)
庶民の発見

戦前、人々は貧しさを克服するため、あらゆる工夫を試みた。生活の中で若者をどう教育し若者はそれをどう受け継いできたか。日本の農山漁村を生きぬいた庶民の内側からの目覚めを克明に記録した庶民の生活史。

810

折口信夫著(解説・岡野弘彦)
日本芸能史六講

まつりと神、酒宴とまれびとなど独特の鍵語を駆使して芸能の発生を解明。さらに田楽・猿楽から座敷踊りまで日本の歌謡と舞踊の歩みを通観。芸能の名講義と展開を平易に説いた折口民俗学入門に好適の名講義。

994

柳田國男著(解説・桜田勝徳)
新装版明治大正史 世相篇

柳田民俗学の出発点をなす代表作のひとつ。明治・大正の六十年間に発行されたあらゆる新聞を渉猟して得た資料を基に、近代日本人のくらし方、生き方を民俗学的方法によってみごとに描き出した刮目の世相史。

1082

柳田國男著(解説・田中玄一)
年中行事覚書

人々の生活と労働にリズムを与え、共同体内に連帯感を生み出す季節の行事。それらなつかしき習俗・行事の数々に民俗学の光をあて、隠れた意味や成り立ちを探る。日本農民の生活と信仰の核心に迫る名著。

124

柳田國男著(解説・中島河太郎)
妖怪談義

河童や山姥や天狗等、誰でも知っているのに、実はよく知らないこれらの妖怪たちを追求してゆくと、正史に現れない、国土にひそむ歴史の真実をかいまみることが出来る。日本民俗学の巨人による先駆的業績。

135

白川 静著
中国古代の民俗

未開拓の中国民俗学研究に正面から取組んだ労作。著者独自の的方法論により、従来知られなかつた中国民族の生活と思维、習俗の固有の姿を復元、中国古代の民俗の事実との比較研究にまで及ぶ画期的な書。

484

鶴見和子著(解説・谷川健一)
みながたくまぐす
南方熊楠

南方熊楠——この民俗学の世界的巨人は、永らく未開のままに誓え立ってきたが、本書の著者による満身の力をこめた独創的な研究により、ようやくその全体像を現わした。△昭和54年度毎日出版文化賞受賞

528

谷川健一著(解説・宮田 登)
魔の系譜

正史の裏側から捉えた日本人の情念の歴史。死者の魔が生者を支配するという奇怪な歴史の底流に目を向け、呪術師や巫女の発生、呪詛や魔除けなどを通して、日本人特有の怨念を克明に描いた魔の伝承史。

661

宮本常一著(解説・田村善次郎)
塩の道

本書は生活学の先駆者として生涯を貫いた著者最晩年の貴重な話——「塩の道」「日本人と食べ物」「暮らしの形と美」の三点を収録。独自の史観が随所に読みとれ、宮本民俗学の体系を知る格好の手引き。

677

山上正太郎著解説・池上 彰
第一次世界大戦 忘れられた戦争

「戦争と革命の世紀」はいかにして幕を開けたか。交錯する列強各国の野望、装発するナシヨナリズム、ボリシエヴィズムの脅威とアメリカの台頭……「現代世界の起点」を、指導者たちの動向を軸に鮮やかに描く。

1976

鈴木隆雄著
骨から見た日本人 古病理学が語る歴史

縄文人の戦闘による傷痕、古墳時代の結核流行、江戸時代に猖獗をきわめた梅毒……情報之宝庫である古人骨を丹念に調べ、過去の社会構造と時代の与件を解明する。骨が語るもう一つの歴史とは？

1978

関 晃著解説・大津 透)
帰化人 古代の政治・経済・文化を語る

イブン・ジュバイル著／藤本勝次・池田 修監訳
イブン・ジュバイルの旅行記

鹿島 茂著

ナポレオン・フーシェ タレーラン 権威戦争1789-1815

野町 啓著解説・秦 剛平)

学術都市アレクサンドリア

保田孝一著(解説・和田春樹)

最後のロシア皇帝**ニコライ二世の日記**

兵藤裕巳著(解説・山本ひろ子)

〈声〉の国民国家 浪花節が創る日本近代

日本が新しい段階に足を踏み入れ、豊かな精神世界を展開することを可能にした大陸や半島の高度な技術・知識を伝えた帰化人とは？ 古代東アジア研究の傑作として、今なお変わらぬ輝きを放ち続ける古典的名著。カイト、メツカ、バグダード、ダマスクス、十字軍支配下のエルサレム王国……カバ神殿や大モスク、巡礼儀礼を克明に描き、十二世紀末の地中海東方世界事情を生々しく伝える中世「旅行記」の最高傑作を全訳。

「熱狂情念」のナポレオン、「陰謀情念」の警察大臣フーシェ、「移り気情念」の外務大臣タレーラン。情念史観の立場から、交錯する三つ巴の心理戦と歴史事実の関連を読み解き、熱狂と混乱の時代を活写する。

芸術・文学・科学の殿堂ムーセイオンや、世界中の書物を集めた大図書館……。プロレマイオスの庇護下、ギリシアや東方から一流の知性を集め、古代における学問の隆盛を担った謎のヘレニズム都市の姿に迫る。

訪日の際の天津事件、日露戦争、第一次大戦への突入、革命の進行に伴う退位と抑留など、歴史的事件の渦中でロシア皇帝は何を見、どう動いたのか。処刑直前まで書き続けられた日記から、その真情を読み解く。近代国家への歩みを始めた日本に国民国家の理念をもたらししたのは、上からの法制度や統治機構ではなく、浪花節芸人が語る物語と、彼らの〈声〉だった。声を媒介に政治と芸能を架橋して探る、日本近代の成立。

1953

1955

1959

1961

1964

1966

大杉一雄著

日米開戦への道 (上) 遊戦への九つの選択肢

勝算乏しき戦争に、なぜ突入していったのか？「蔣政権を相手にせず」との声明を出し、日中戦争和平への手がかりを消してゆく日本。米国の出方を警戒しつつも、南部仏印進駐へと政策展開してゆく過程を検証。

1928

大杉一雄著

日米開戦への道 (下) 遊戦への九つの選択肢

日本軍の南部仏印進駐によって緊張が高まる日米関係。対日資産凍結などを決定する一方、仏印中立化を提案する米国への拒否回答は悲劇への分岐点であった。交渉の過程で、他にもあり得た遊戦への選択肢を検証。

1929

氏家幹人著

殿様と鼠小僧 松浦静山『甲子夜話』の世界

晋安の夢破れ四十七歳で平戸藩主を隠退した松浦静山が長い「余生」を綴った『甲子夜話』。老いのため息を洩らしつつ多彩な人々との交流を描いた江戸後期屈指の隨筆を中心に「老侯の時代」の江戸社会を活写する。

1934

臼田 昭著

イン イギリスの宿屋のはなし

近代イギリスの大衆が酒食と休息を購ったイン、タヴァン、エールハウス。珍事、艶事、酔漢たちの人間模様など数々の逸話を、近世の日記文学や小説から紹介。ユーモア溢れる秀逸な語り口で英国文化史へと誘う。

1938

逸名作家著／池上俊一訳・解説

西洋中世奇譚集成 東方の驚異

偽の手紙に描かれた、乳と蜜が流れ、黄金と宝石に溢れる東方の楽園「インド」。そこは奇獣・魔人が跋扈する謎のキリスト教国……。これらの東方幻想に、暗黒の時代Ⅱ中世の人々の想像界の深奥を読み解く。

1951

海野 弘著

酒場の文化史

石器時代の洞窟に始まる酒場。十九〜二十世紀に起こった酒場の革命とは？ 中世の宿屋、パブ、キャバレー、ミュージックホールからモダンバーまで。同時代の小説も読み込み、人間臭い特殊空間の変遷を活写。

1952

横田冬彦著

日本の歴史16

天下泰平

中世末期から続いた戦乱が終わり、「徳川の平和」が実現。泰平の世はどのように確立したのか？ 新しく生まれた諸制度の下、文治が始まり情報と知が大衆化した《書物の時代》が出現する過程を追う。

1916

吉田伸之著

日本の歴史17

成熟する江戸

十八世紀。豪商などが君臨する上層から、貧しい乞食僧や芸能者が身分的肩縁を形作った最下層まで、さまざまな階層が溶け合う大都市・江戸。前近代の達成である成熟の諸相をミクロの視点で鮮やかに描き出す。

1917

井上勝生著

日本の歴史18

開国と幕末変革

十九世紀。一揆、打ち壊しが多発し、「開国」「尊皇」「攘夷」「倒幕」が入り乱れて時代は大きく動いた。幕府が倒壊への道を迎えるなか、沸騰する民衆運動に着目し、世界的視野と新史料で「維新前夜」を的確に描き出す。

1918

鬼頭 宏著

日本の歴史19

文明としての江戸システム

貨幣経済の発達、独自の《物産複合》、プロト工業化による地方の発展、人口の停滞と抑制。環境調和的な近世社会のあり方が創出した緑の列島の伝統的成長モデルに、成熟した脱近代社会へのヒントを探る。

1919

鈴木 淳著

日本の歴史20

維新の構想と展開

短期間で近代国家を作り上げた新政府は何をめざし、新たな政策・制度を伝達・徹底したか。五箇条の御誓文から帝国憲法発布までを舞台に、上からの変革と人の自前の対応により形作られてゆく「明治」を活写。

1920

浜林正夫著

世界史再入門

歴史のながれと日本の位置を見直す

生産力を発展させ、自由・平等を求めてきた人類の歴史を、特定の地域に偏らない普遍的視点から捉える。教科書や全集では掘めなかつた世界史の大きな流れを概説し、現代世界の課題にも言及する画期的な試み。

1927

寛^{たかひ} 雅博著

日本の歴史10

蒙古襲来と徳政令

二度の蒙古襲来を乗り切った鎌倉幕府は、なぜ「極盛期」に崩壊したのか？ 徳政令は衰退の兆しを示すものなのか。「御謀反」を企てた後醍醐天皇の確信とは――。鎌倉後期の時代像を塗り替える、画期的論考。

1910

新田一郎著

日本の歴史11

太平記の時代

後醍醐の踐祚、廃位、配流、そして建武政権樹立。足利氏との角逐、分裂した皇統。武家の権能が拡大し、構造的な変化を遂げた、動乱の十四世紀。南北朝とはいかなる時代だったのか。その時代相を解析する。

1911

桜井英治著

日本の歴史12

室町人の精神

三代將軍足利義満の治世から成仁・文明の乱にかけての財政、相続、贈与、儀礼のしくみを精緻に解明し、幕府の権力構造に迫る。中世の黄昏、無為と恐怖と酔狂に彩られた混沌の時代を人々はどうのように生きたのか？

1912

久留島典子著

日本の歴史13

一揆と戦国大名

室町幕府の権威失墜、荘園公領制の変質で集権的性格が薄れる中世社会。民衆はどのように自立性を強めていったのか。守護や國人はいかにして戦国大名に成長したのか。史上最も激しく社会が動いた時代を分析。

1913

大石直正／高良倉吉／高橋公明著

日本の歴史14

周縁から見た中世日本

国家の求心力が弱かった十二～十五世紀、列島「周縁部」としての津軽・十三湊、琉球王国、南西諸島では交易を基盤とした自立的な権力が形成された。京都市中心の国家の枠を越えた、もう一つの中世史を追究。

1914

池上裕子著

日本の歴史15

織豊政権と江戸幕府

一五六八年の信長の上洛から一六一五年の大坂夏の陣での豊臣氏滅亡までの半世紀。戦国時代から続いた乱世の中で民衆はどのように生き抜いたのか？ 天下統一・覇権確立の過程と社会構造の変化を描きました。

1915

渡辺晃宏著

日本の歴史04

平城京と木簡の世紀

日本が国家として成る奈良時代。大宝律令の制定、和同開珎の鑄造、遣唐使、平城宮遷都、東大寺大仏の建立……。木簡、発掘成果、文献史料を駆使して、日本型律令制成立への試行錯誤の百年を精密に読み直す。

1904

坂上康俊著

日本の歴史05

律令国家の転換と「日本」

藤原氏北家による摂関制度、伝統的郡司層の没落と国司長官の受領化……。律令国家の誕生から百年、国家体制は変容する。奈良末期〜平安初期に展開した「古代の終わりの始まり」〜古代社会の再編を精緻に描く。

1905

大津 透著

日本の歴史06

道長と宮廷社会

平安時代中期、「源氏物語」などの古典はどうして生まれたのか。藤原道長はどのように権力を掌握したのか。貴族の日記や古文書の精緻な読解により宮廷を支えた国家システムを解明、貴族政治の合理性に迫る。

1906

下向井龍彦著

日本の歴史07

武士の成長と院政

律令国家から王朝国家への転換期、武装蜂起の鎮圧にあたる戦士として登場した武士。源氏と平氏の拮抗を演出し、強権を揮う「院」たち。権力闘争の軍事的決着に関与する武士は、いかに政権掌握に至ったのか。

1907

大津 透／大岡清陽／岡和彦／熊英芥／丸山裕美子／上高 亨／米谷臣史著

日本の歴史08

古代天皇制を考える

古代天皇の権力をはぐくみ、その権威を支えたものは何か。天皇以前〜大王の時代から貴族社会の成立、院政期までを視野に入れ、七人の研究者が、朝廷饗礼、天皇祭祀、文献史料の解説等からその実態に迫る。

1908

山本幸司著

日本の歴史09

頼朝の天下草創

幕府を開いた頼朝はなぜ政権を掌握できたのか。幕代から中世へ、京都から東国へ、貴族から武士へ。幕府の職制、東国武士の特性、全国支配の地歩を固めた北条氏の功績など、歴史の大転換期の時代像を描く。

1909

藤木久志著(解説・久留島典子)
戦国の作法 村の紛争解決

中世の村の実態は「自力」のさまざまな発動が繰りなされる熟した社会であった。争い事の際の作法、暴力の反復を避ける人質・わびごとの作法、また犯罪解決のための作法などを検証し、その真相に迫る。

竹内弘行著
十八史略

神話伝説の時代から南宋滅亡までの中国の歴史を一冊に集約。韓信、諸葛孔明、関羽ら多彩な人物が躍動し、権謀術数は飛び交い、織りなされる悲喜劇。簡潔な記述で面白さ抜群、中国理解のための必読書。

網野善彦著(解説・大津 透)
 日本の歴史00 **「日本」とは何か**

柔軟な発想と深い学識に支えられた網野史学の集大成。列島社会の成り立ちに関する常識や通説を覆し、日本のカタチを新たに描き切って反響を呼び起こした力作。本格的通史の嚆頭、マニフェストたる一冊。

岡村道雄著
 日本の歴史01 **縄文の生活誌**

旧石器時代人の遊動生活から縄文人の定住生活へ。日本文化の基層を成した、自然の恵みとともにあつた豊かな生活、そして生と死の実態を最新の発掘や研究の成果から活写。従来の古代観を一変させる考古の探究。

寺沢 薫著
 日本の歴史02 **王権誕生**

巨大墳丘墓、銅鐸のマツリ、その役割と意味とは？稲作伝来、そしてムラからクニ・国へと変貌していく弥生・古墳時代の実態と、王権誕生・確立へのダイナミックな歴史のうねり、列島最大のドラマを描く。

熊谷公男著
 日本の歴史03 **大王から天皇へ**

王から神への飛躍はいかにしてなされたのか？なぜ天下を治める「大王」たちは朝鮮半島・大陸との貪欲な関係を持ったのか？ 仏教伝来、大化改新、壬申の乱……。試練が体制を強化し、「日本」が誕生した。

E・B・スレッジ著／伊藤 真・曾田和子訳(解説・保阪正康)
ペリリユー・沖繩戦記

「最も困難を極めた上陸作戦」と言われたペリリユー戦。泥と炎にまみれた沖繩戦。二つの最激戦地で米海兵隊の一步兵が体験した戦争の現実とは。夥しい生命を奪い、人間性を破壊する戦争の悲惨を克明に綴る。

1885

酒井シツ著

病が語る日本史

古来、日本人はいかに病氣と闘ってきたか。糖尿病に苦しんだ道長、ガンと闘った信玄や家康。糞石や古文書は何を語るのか。病という視点を軸に、歴史上の人物の逸話を交えて日本を通過する、病氣の文化史。

1886

鈴木健夫、P・スノードン、G・ツォーベル著

ヨーロッパ人の見た幕末使節団

一八六二年欧州に向けて幕府から派遣された若き日の福沢諭吉らの「文久使節団」は、いかなる関心をもって迎えられたのか。現地目の「初めての日本人」はどう映ったのか。現地の報道からその反響を探る。

1888

堀 敏一著(解説・重近啓樹)

東アジア世界の歴史

中国・朝鮮・日本・ベトナムやチベット高原等を含む地域で歴史はいかに織りなされたのか。漢字・律令制・仏教・中国との冊封関係などを指標とし、一つの文化圏として捉えられる地域の歴史の動態を概観。

1890

松田 治著

トロイア戦争全史

壮大なギリシャ神話の一大要素、トロイア戦争を主題とする古典群の記述をジグソーパズルを組み上げるように綴り合わせ、発端から終焉に至るまで、戦争の推移と折々のエピソードを網羅し、その全貌を描く。

1891

谷川道雄著

隋唐世界帝国の形成

後漢解体後、極度の分裂状態に陥った中国社会では、再統一に向けていかなる原理が模索されたのか。新時代を担う貴族階級は、隋唐帝国に至る過程でどのような精神文化を生んだか。中国中世社会の形成を描く。

1894

J・ギース、F・ギース著／青島淑子訳
中世ヨーロッパの農村の生活

中世ヨーロッパ全人口の九割以上は農村に生きた。舞台はイングランドの農村。飢饉や黒死病、修道院解散や困い込みに苦しむ人々は、村という共同体でどう生き抜いたか。文字記録と考古学的発見から描き出す。

1874

北山茂夫著

女帝と道鏡 天平末葉の政治と文化

政変の相次ぐ八世紀後半。正統の嫡系が皇位を継ぐことにこだわっていた称徳天皇は、なぜ皇統外の道鏡に皇位を譲ろうとしたのか。道鏡の真の姿と、悩み深き女帝称徳の心に迫り、空前絶後の関係を暴き出す。

1876

榎本武揚著／講談社編(解説・佐々木克)

榎本武揚 シベリア日記

明治十一年、シベリア横断一万三千キロの旅。幕臣・明治高官として活躍した榎本武揚が綴った十九世紀末のシベリアの実情が「ぶさ」に紹介された貴重な日記。書簡三通と、洋行船中で綴った「渡蘭日記」も付す。

1877

大隅和雄著

事典の語る日本の歴史

菅原道真が心血を注いだ「類聚国史」、日本初の百科事典「日本百科大辞典」等々……。我が国の知の基盤となった諸書はどのように編まれ、受容され、伝えられたか。事典を通して日本人の精神の系譜をたどる。

1878

村井益男著

江戸城 将軍家の生活

十二世紀半ば以来、太田氏、徳川氏、皇室へと、主を替えてきた江戸城。江戸時代の技術・労力を結集し築かれた城の壮大さと、歴史に占める重みは他に類を見ない。姿なき巨城を様々な視点から観察した好著。

1882

ティルペリのゲルウアシウス著／池上俊一訳・解説

西洋中世奇譚集成 皇帝の閑暇

南フランス、イタリヤを中心にイングランドなどの不思議話を二九篇収録。幽霊・狼男、人魚・煉獄・妖精・魔術師……。奇蹟と魔術の間に立つ(驚異)は神聖な現象である。中世人の精神を知るための必読史料。

1884

井上章一著

狂気と王権

高橋 博著

ペーダ英国国民教会史

畑井 弘著

物部氏の伝承

井上浩一著

生き残った帝国ビザンティン

笹本正治著

中世の音・近世の音 鐘の音の結ぶ世界

M・ブラッグ著／三川基好訳

英語の冒険

元女官長の不敬事件、虎ノ門事件、田中正造直訴事件、あるいは昭和天皇「独白録」の弁明など天皇制をめぐる事件に「精神鑑定ポリティクス」という補助線を引き、斬新な視点で読み解くスリリングな近代史。

古代ローマ時代から八世紀初めまで、伝道者たちの行跡、殉教者の苦難、世俗権力の興亡を客観的に叙述し、「英国史の源泉」と称される著者ペーダ畢生の歴史書。中世史の一級資料「アルフレッド大王版」待望の新訳。

大和朝廷で軍事的な職掌を担っていたとされる物部氏。既存の古代史観に疑問をもつ著者が、記紀の伝承や物部氏の系譜を丹念にたどり、朝鮮語を手がかりに一族の謎に包まれた実像の解読を試みた独自の論考。

興亡を繰り返すヨーロッパとアジアの境界、「文明の十字路」にあって、なぜ一千年以上も存続しえたか。皇帝・貴族・知識人は変化にどう対応したか。ローマ皇帝の改宗から帝都陥落まで「奇跡の二千年」を活写。

かつて神の世界と人間をつないだ鐘の音は、次第に危険や時刻を告げる人間同士の日常的合図となった。その変遷を、記録には残りにくい当時の人びとの感覚も含めて追い、中近世の社会・文化を描き出す。

英語はどこから来てどのように世界一五億人の言語となったのか。一五〇〇年前、一五万人の話者しかいなかった英語の祖先は絶滅の危機を越えイングランドの言葉から「共通語」へと大発展。その波瀾万丈の歴史。

1860

1862

1865

1866

1868

1869

佐伯有清著
最後の遣唐使

承和の第十七次遣唐使は、二度の渡航失敗、副使の乗船拒否という非常事態を押しして強行、莫大な犠牲を出した。連年の飢饉と疫病で疲弊する律令国家は、唐に何を求めたのか。最後の使節団の苦難の旅路に迫る。

1847

横井 清著

中世民衆の生活文化 (上) (中) (下)

激動する日本の中世に生きた人々は、どのような意識を持ち、いかなる主張をし、何に対して戦ったのか。寄合の精神、遊戯の盛行、共同体の規律、自然への畏怖、触穢の思想などを通し、民衆生活の実相に迫る。

1848~1850

岡部牧夫著

満州国

防共の砦、鉱物資源や農産物の供給基地の役割を担われ、盛時は百万人余の日本人が暮らした「満州国」。王道政治、五族協和、財閥排除等のスローガンによって日本に支配された傀儡国家十四年の実態を明かす。

1851

平勢隆郎著

史記の「正統」

なぜ膨大な年代矛盾が存在するのか。「史記」が隠蔽した史実とは？ 誰もなしえなかった年代矛盾の整理を通して、中国古代諸国家の「正統観」が鮮やかに浮かび上がる。春秋戦国時代像を塗り替える画期的論考。

1853

笠谷和比古著

関ヶ原合戦 家康の戦略と幕藩体制

秀吉没後、混沌とする天下掌握への道。慶長十五年九月十五日、遂に衝突する家康・三成の二大勢力。関ヶ原に運参する徳川主力の秀忠軍、小早川秀秋の反忠行動、外様大名の奮戦など、天下分け目の合戦を詳述。

1858

大日方克巳著

古代国家と年中行事

射礼、五月五日節、相撲節、大晦日の雛……古代の律令国家において、なぜ年中行事は国家的儀礼として行われたのか。儀式の過程やその変遷を子細に探究し、天皇を頂点とする国家構造との関わりを解明する。

1859

五百旗頭 真著

占領期 首相たちの新日本

東久邇内閣を皮切りに、幣原、吉田、片山、芦田、再び吉田……。占領という未曾有の難局、苛烈をきわめるGHQの指令のもとで日本再生の重責を担った歴代首相たちの事績と人間像に迫る。古野作造賞受賞作。

1825

小林蒼夫著

チャップ・ブックの世界 近代イギリス庶民と廉価本

行人が売り歩いた素朴で安価な本、チャップ・ブック。人びとが心躍らせて読んで、占い、笑話、物語、犯罪実録などの多彩な内容を紹介、周辺事情も子細に探究し、当時の大衆の日常を生き生きと描き出す。

1828

岡村秀典著

夏王朝 中国文明の原像

『史記』に伝えられながら近代歴史学によって存在を否定された夏王朝は、考古学の最新の成果と古典籍の徹底的な洗い直しにより、実在が確実になった。四千年前と言われる最古の文明と文化の姿を検証する。

1829

R・ナッシュ、G・グレイヴズ著／足立 康訳

人物アメリカ史 (上) (下)

「アメリカ」はいかにして成ったか。コロンブスから始まって、ウインスロップ、フランクリン、女性解放運動家アダムズ、フォード、キング牧師、ニクソンなど十四人。おもしろさ抜群、魅力あふれるアメリカ史。

1833・1834

大久保利謙著解説・佐々木 克

明六社

初の学術結社、初の啓蒙雑誌刊行、初の演説会の開催。森有礼、西村茂樹ら当代一流の知識人が結成した明六社の活動の実態と意義とは。近代化へと踏み出した明治初期を豊富な史料から描く、明六社研究の決定版！

1843

大杉一雄著

日中戦争への道 滿蒙華北問題と衝突への分岐点

一九三一年の満州事変以降十五年に及ぶ戦争の時代。日中間の課題解決には武力行使以外の方法は無かったのか。満蒙・華北問題をめぐる外交の方策、軍部の動き、思想面の展開から、戦争への分岐点を検証する。

1846

青木和夫著

古代豪族

古の豪族たちはいつたどんな生活をしてたのか？ 反朝廷と親朝廷。地方と都。さまざまな貌の豪族たち。郡司の登場、有力豪族の隆盛から、最後の豪族将門まで。飛鳥と平安を動かした人々の実像を描く。

1811

池上俊一著(解説・山崎正和)

イタリア・ルネサンス再考 花の都とアルベルティ

十五世紀、賛美溢れる雅都にして聖都として最盛期を迎えた花の都。なぜ、フィレンツェに拘爛豪華なルネサンスが起こったのか？ 万人人アルベルティを通して、全ヨーロッパを照らした「人文主義」の光源を探る。

1815

前坂俊之著

太平洋戦争と新聞

戦前・戦中の動乱期、新聞は政府・軍部に対しどんな論陣を張り、いかに報道したのか。法令・検閲に自由を奪われるのと同時に、戦争遂行へと社論を転換する新聞。批判から迎合・煽動的論調への道筋を検証。

1817

松田 治著

ローマ建国伝説

ロムルスとレムスの物語

大祖父の謀略で母と引き裂かれ、狼と牧人に養われたローマ建国の祖ロムルスとレムスの数奇な生涯。古代の史書などをもとに、この伝説を再話することともに、物語を構成する諸要素を分析し、その意味を探る。

1818

眞野尚志著

中世ヨーロッパの社会観

教皇・皇帝という聖俗権力の下での階層的秩序を特質とする中世。当時の人々はさまざまな隠喩によって社会を捉えていた。人体・建築・蜜蜂・チェスなどに擬して各階層の役割や構成を説く象徴的思考の形を分析。

1821

二木謙一著

合戦の文化史

武器・武具、戦闘法はどのように進化してきたのか。古代から維新期まで日本史上の合戦の歴史をたどり、武士のいでたち、戦い方、死への覚悟、また死者の葬礼・供養など、知られざる舞台裏を明らかにする。

1823

佐藤武敏著

中国古代理書簡集

官刑の恥辱に堪え、「史記」を著した司馬遷の心情、謀反への諷め、棄てられた妻の怨みなど、春秋から戦国まで、名文で綴られた人の心を打つ三十四通の手紙を収載。読み下し文、現代語訳、解説から成る。

1790

内藤 昌著

復元 安土城

築城三年で灰燼に帰した幻の名城がいま甦る。黄金に輝く瓦、黒漆の壁、朱の八角円堂……。和様、唐様、南蛮風を統合した新時代の造形。戦国の世の終焉と平安楽土をめざした天才信長の都市計画を徹底解説。

1795

高津春繁著

古典ギリシア

今なお人を魅了してやまないギリシア文化。それを生み、育んだ風土、民族、言語、生活等の特質を探り、ギリシア精神の形成とその文化への反映の様を説き示す。古代ギリシアを理解するための最適なガイド。

1797

アルペール・ロビタ著／北澤真木訳

絵で見るパリモードの歴史 エレガンスの千年

すけすけドレスに雲衝く角飾り、釣鐘状のスカート。聖職者のお叱りも国王の禁止令もどこ吹く風。さもなくば、パリジエンヌはガリアの昔から最先端を闊歩していた。図版満載、貴婦人たちのファッション千年史。

1800

岩村 忍著

文明の十字路Ⅱ中央アジアの歴史

ヨーロッパ、インド、中国、中東の文明圏の間に生きた中央アジアの民。東から絹を西から黄金を運んだシルクロード。世界の屋根に分断されたトルキスタン。草原の民とオアシスの民がくり広げた壮大な歴史とは？

1803

梅溪^{うめい} 昇著

お雇い外国人 明治日本の脇役たち

明治期、近代化の指導者として日本へ招かれたお雇い外国人。その国籍は多岐にわたりに、政治、経済、軍事、教育等あらゆる領域で活躍し、多大な役割を果たした。日本繁栄の礎を築いた彼らの功績を検証する。

1807

J・ギース、F・ギース著／青島淑子訳
中世ヨーロッパの都市の生活

一二五〇年、トロワ。年に二度、シャンパーニュ都市が開墾され、活況を呈する町を舞台に、ヨーロッパの人々の暮らしを逸話を交え、立体的に再現する。活気に満ち繁栄した中世都市の実像を生き生きと描く。

1776

棚橋光男著(解説・文庫版あとがき・高橋昌明)
後白河法皇

中世成立期に屹立する「大天狗」後白河法皇。武士にとって常に敵役だった(偉大なる暗闘)の実像とは。王権の転換・再生を軸に文化創造の場や精神史の暗部にまでわけり、政治的巨人が構想した世界を探る。

1777

伊東俊太郎著(解説・三浦伸夫)
十二世紀ルネサンス

中世の真っ只中、閉ざされた一文化圏であったヨーロッパが突如として「離陸」を開始する十二世紀。多くの書がラテン訳され充実する知的基盤。先進的アラビアに接し文明形態を一新していく歴史の動態を探る。

1780

鳥越憲三郎著
出雲神話の誕生

「出雲国風土記」に描かれた多情豊かな国引き説話と大神の名は、記紀において抹殺された——大和朝廷の策略と出雲の悲劇を文献史料の克明な検討により明かす。新見地から読み解く出雲神話の成立とその謎。

1783

岡田英弘・神田信夫著
紫禁城の栄光 明・清全史

十四〜十九世紀、東アジアに君臨した二つの帝国。遊牧帝国と農耕帝国の合体が生んだ巨大な多民族国家・中国。政治改革、広範な交易網、度重なる戦争……。シナが中国へと発展する四百五十年の歴史を活写する。

1784

笠谷和比古著
主君「押込」の構造 近世大名と家臣団

近世武家社会において君臣間の上下秩序は冒すべからざるものだったのか。悪政・不行跡の主君への家臣団の対抗手段とは？ 主君の強制的隠居〓押込の横行に注目し、国制と家のありよう、背景の思想を探る。

1785

堀越孝一著

中世ヨーロッパの歴史

小木新造著

東京時代

江戸と東京の間はざまで

今谷 明著

戦国期の室町幕府

宝木範義著

ウィーン物語

A・アンペール著／高橋邦太郎訳

続・絵で見る幕末日本

桑田忠親ちかちか著

太閤の手紙

ヨーロッパとは何か。その成立にキリスト教が果たした役割とは？ 地中海古代社会から森林と原野の内陸部へ展開、多様な文化融合がもたらしたヨーロッパ世界の形成過程を「中世人」の眼でいきいきと描きだす。

明治時代前半、東京は東京とも書かれ、「とうけい」とも呼ばれていた。江戸時代の意識や感覚を色濃く残し、江戸から東京への架け橋となったこの特異な時代を生きた庶民の生活ぶりを、多様な角度から検証する。

民衆が台頭し、日本文化の伝統形成の時代。山門と五山の争い、幕府財政、徳政一揆等から、政治経済都市としての中世末期の京都を概観、自治都市の成立までを活写。中世史研究の幻の名著、待望の文庫化。

神聖ローマ帝国の都としてヨーロッパに君臨したウィーンは、二十世紀芸術の揺籃の地でもある。歴史を軸に、美術、音楽、建築、人物等々の側面からその実像に迫る。古き良き時代を体現する都市の魅力と歴史。

駭愕な知識、卓越した識見、また人間味豊かなスイス人の目に、幕末の日本はどのように映ったか。大君の居城、江戸の正月、浅草の祭り、江戸の町と生活など。好評を博した見聞記の続編。挿画も多数掲載。

残された書状が語る人間・秀吉の魅力とは？ 道義を好み不義を憎み、仲間と敵を愛し、親孝行で子煩悩、女好きな恐妻家……。日本史にその名を留める英傑の実像を彼の手紙をもとに斯界の権威がいきいきと描く。

1763

1765

1766

1770

1771

1775

大嶽秀夫著(解説・五百歳頭裏)

再軍備とナシヨナリズム 戦後日本の防衛観

戦後政治最大の論点、国防問題の精緻な検証。朝鮮戦争を機に日本は警察予備隊を創設、再軍備への道を歩む。吉田内閣や芦田均、鳩山一郎ら自由主義者、社会党右派は防衛問題をどう捉え、いかに対処したのか。

1738

田中優子監修・解説

江戸の懐古

江戸や武蔵野にまつわる江戸時代の歴史的事実とエピソード。寛政五十年を記念して、大正六年、新聞に連載。粹で独特の情趣漂う江戸の景物と様子が諷刺調の格調高い名文で語られ、消えゆく江戸が鬱鬱と蘇る。

1748

海保嶺夫著

エソの歴史 北の人びと「日本」

かつて大陸と壮大な交易をしていた北方の民、日本の本・唐子・渡覚。記録の間に垣間見える彼らの姿、そしてついに「日本」に組みこまれてゆく過程を活写する。北の地に繰り広げられたもう一つの日本史。

1750

三宅英利著

近世の日本と朝鮮

二千年に及ぶ日朝交渉史上、江戸時代に両国が最も友好的たり得たのはなぜか。朝鮮通信使、幕府の朝鮮政策、対馬藩の倭館貿易等を軸に、東アジアの国際関係を視野に入れつつ、鎖国下の日朝関係を捉え直す。

1751

宮永 孝著

幕末遣欧使節団

文久二年、開港延期交渉の命を受け、欧州六カ国を歴訪した幕府の使節団。その一年余の旅を、日記や現地新聞・雑誌等の記事をもとに立体的に復元、追体験する。三十八人のサムライ達の苦難と感動に満ちた旅。

1753

宇野哲人著

清国文明記

儒教精神が息づく清王朝末期の中国旅行記。漢学の泰斗が、少壮時、儒教ゆかりの名所旧蹟を歴訪。昔ながらの伝統的習慣が残る古き佳き中国を漢文調の流麗な名文で綴る。清朝滅亡直前の各地の様子が描かれる。

1761

清水 勲著
漫画が語る明治

漫画とは世相を写したタイムカプセルである。江戸から近代への劇的な変動の中、人々はどうのように通じてか。時代の一齣を鋭く描き出した数々の漫画を生きた戸惑いと好奇、反骨と愛着が交錯する明治を活写する。

1729

宝木範義著
パリ物語

古来、人を惹きつけるパリの魅力の秘密とは。食の都、芸術の都、ファッションの都等と、さまざまに形容されるパリ。都市空間を構成する諸要素に注目し、その魅力が歴史的にいかに関成されてきたかを検証する。

1730

北山茂夫著
平将門

独立国家を夢み、坂東を疾駆した英雄の生涯。坂東の地に起きた古代史上最大の反乱は朝廷を震撼させた。内乱を招来した律令制の矛盾と「武夫」の誕生、乱の歴史的意味を通し、将門の実像とその時代を活写する。

1733

佐々木 克著
幕末の天皇・明治の天皇

明治維新の前夜、天皇像の対照的激変を探る。薄化粧をした女性的天皇、髯を蓄えた軍服姿の天皇。維新後夥しい数の行幸。養の上の存在から見える天皇へ。時代の推移と共に変わる天皇のあり方を明快に分析する。

1734

白幡洋三郎著
ブランドハンター

まだ見ぬ植物に憧れ世界探検行に赴く者たち。十九世紀イギリスは未知の花や珍しい樹木を求め国中が沸き立っていた。ジャワ・中国・日本をめざし、ラン・ユリ・茶などを持ち帰った植物の狩人たちの活動を追う。

1735

松田壽男著
東西文化の交流

東西を結ぶ主要ルートとそれを支えた人々。かつて東西交渉は、シルクロード、北アジアのステップ・ベルト、海洋ルートが担っていた。これらの特性と、ルートの形成に果たした地域の民の文化的特質を探る。

1736

大文字版

H・ビックス著／吉田 裕監修／岡部牧夫・川島高峰訳
昭和天皇（上）

君主としての人間形成は、どうなされたか。明治天皇を範に帝王教育を受けた皇太子時代から即位を経て政治的君主へ。その過程を膨大な資料により克明に描出した出色の昭和天皇研究。ビュリッツァー賞受賞作

1715

H・ビックス著／吉田 裕監修／岡部牧夫・川島高峰・永井 均訳
昭和天皇（下）

「意思なき君主」か、「意思ある大元帥」か。中国大陸から太平洋へと広がる戦火。昭和天皇は帝国日本の御輿だったのか、あるいは名実ともに大元帥だったのか。近現代史最大のテーマ、天皇の戦争責任に迫る。

1716

長谷川博隆著
ハンニバル 地中海世界の覇権をかけて

大國ローマと戦ったカルタゴの英雄の生涯。地中海世界の覇権をかけて激突した古代ローマとカルタゴ。大國ローマを屈服寸前まで追いつめたカルタゴの將軍ハンニバルの天才的な戦略と悲劇的な生涯を描く。

1720

興津 要著
江戸娯楽誌

江戸の庶民を惹きつけた、さまざまな楽しみ。巧みな技芸や珍奇さを売り物にした見世物・大道芸、四季折々の行楽、信仰と結びついた遊びや行事……。江戸庶民の暮らした潤いとリズムを与えた娯楽の数々を紹介。

1722

石母田 正著／武者小路 穰著
物語による日本の歴史

時代時代の物語から紡がれてゆく日本の姿。「古事記」「風土記」から「今昔物語集」「平家物語」まで古典文学に描かれた英雄や庶民の姿を読むことで歴史が浮かび上がる。若き日の網野善彦氏が編集担当した名著。

1723

藤木久志著
天下統一と朝鮮侵略 織田・豊臣政権の実像

中世末〜近世初めの激動の歴史を描き直す。天正四年安土築城を画期とする石山戦争から朝鮮侵略に至るひと筋の道。一向一揆をつぶし侵略へと展開する統一権力とは何か。民衆の視点からの織豊政権研究の成果。

1727

いっせきべ
五百旗頭 真著

日米戦争と戦後日本

日本の方向性はいかにして決定づけられたか。現代日本の原型は「戦後」にあるが、その大要は終戦前までに定められていた。新生日本の針路を規定した米国の占領政策を軸に、開戦前夜から日本の自立までを追う。

1707

H・G・ボンディング著／長岡祥三訳

英国人写真家の見た明治日本 この世の楽園・日本

明治を愛した写真家の見聞録。写真百枚掲載。日本の美しい風景、精巧な工芸品、優雅な女性への愛情こもる叙述。浅間山噴火や富士登山の迫力満点の描写。スコット南極探検隊の様子を撮影した写真家の日本賛歌。

1710

林田愼之助著

北京物語

黄金の薨と朱楼の都

千年の都に躍動する英雄と庶民の歴史絵巻。十世紀、契丹人が都城を構えて以来、数々の王朝の都として繁栄した北京。その千年物語を、フビライ、永楽帝などの逸話と紫禁城、頤和園などの米歴を交えて描く。

1711

J・ギース、F・ギース著／栗原 泉訳

中世ヨーロッパの城の生活

中世英国における封建社会と人々の暮らし。時代は十一世紀から十四世紀、ノルマン征服を経て急速に封建化が進む中、城を中心に、人々はどのような暮らしを営んでいたのか。西欧中世の生活実態が再現される。

1712

かわのんぢぢ
河野真知郎著

中世都市

鎌倉 遺跡が語る武士の都

考古学が照らし出す、東国最大の都市の実像とは。豪荘な武家屋敷、軒を連ねる浜辺の倉、中国との盛んな交易……。考古学は古都鎌倉のイメージを次々と塗りかえる。発掘資料から明らかになる「ものぶの栄華」。

1713

島田俊彦著(解説・戸部良一)

関東軍

在満陸軍の独走

対中国政策の尖兵となった軍隊の実像に迫る。日露戦争直後から太平洋戦争終結までの四十年間、満州に駐屯した関東軍。時代を転換させた事件と多彩な人間群像を通して実証的に描き出す、その歴史と性格。実態

1714

川島高峰著

流言・投書の太平洋戦争

戦時下庶民の実像を流言蜚語や日記で解明。「先般の空襲は国民を脅かしたニセ空襲」と書かれた不穏投書や「特高月報」など治安史料を駆使して戦後の実態を描出。庶民の本音と不安を辿る異色の戦時下日本史。

1688

角川源義・高田 実著(解説・野口 実)

源 義経

文芸と歴史の間にたゆたう悲劇の英雄の実像とは。源平争乱期に突如現れ、消えていった源義経。その悲劇性は民衆に義経伝説を語り継がせた。日本人の心に今なお生き続ける稀代の雄に迫り、義経伝承を解明する。

1690

網野善彦著(解説・山本幸司)

中世の非人と遊女

専門の技能や芸能で天皇や寺社に奉仕した中世の職人の多様な姿と生命力をえがく。非人も汚目を芸能とする職能民と指摘し、遊女、白拍手など遍歴し活躍した女性像を描いた網野史学の名著。

1694

上垣外憲一著

雨森芳洲

元禄享保の国際人

江戸期の日朝交流史に屹立する思想家の生涯――。朝鮮通信使が称賛した語学力と人道主義に根ざす平等思想。偏見や目文化中心主義を否定する現代的思索を展開しながら、国学の擡頭で忘却された思想家が現代に甦る。

1696

宮永 孝著

万延元年の遣米使節団

徳川幕府初の遣米使節団の衝撃的異文化体験。修好通商条約の批准書交換を使命に、威臨丸を従え被米した七七人の使節団。彼らが強い衝撃を受けた初の異文化体験を、日記や回想録、新聞記事等を駆使し再現する。

1699

村井康彦著

律令制の虚実

大陸伝来の制度はいかに受容され変容したか。古代国家の形成、天平文化に続く貴族社会の成立、そして武士の擡頭。律令制という建前が古代日本独自の体質の中で展開された奈良・平安時代の社会と文化を活写。

1703

中村 元著

古代インド

モヘンジョ・ダロの高度な都市計画から華麗なグプタ文化まで。苛酷な風土と東西文化の混濁が古代文明を育んだ。古代インドの生活と思想と、そこに展開された原始仏教の誕生と変遷を、仏教学の泰斗が活写する。

1674

勝 海舟著／江藤 淳・松浦 玲編

海舟語録

晩年の海舟が奔放自在に語った歴史的証言集。官を辞してなお、陰に陽に政治に関わった勝海舟。ざつぱらんな口調で語った政局評、人物評は、冷徹で手厳しい。海舟の慧眼と人柄を偲ばせる魅力溢れる談話集。

1677

井上秀雄著(解説・鄭草苗)

古代朝鮮

中国・日本との軋轢と協調を背景に、古代の朝鮮は統一へとその歩を進めた。旧石器時代から統一新羅の滅亡まで、政治・社会・文化を包括し総合的に描き、朝鮮半島の古代を鮮やかに再現する朝鮮史研究の傑作。

1678

周藤吉之・中嶋 敏著

五代と宋の興亡

唐末の動乱から宋の統一と滅亡への四百年史。五代十国の混乱を経て宋が中国を統一するが、財政改革を巡る抗争の中、金軍入寇で江南へ逃れ両朝並立。都市が栄える一方、モンゴル勃興で滅亡に至る歴史を辿る。

1679

山本博文著

江戸城の宮廷政治 熊本藩細川忠興・忠利父子の往復書状

大名たちにとって江戸城大広間は戦場だった。大坂の陣、転封、鳥原の乱と藩主の急逝。うち続く危難に細川藩はどう対処したか。藩主父子の書状から、幕藩体制確立期の江戸城を舞台とした権力抗争を活写する。

1681

佐々木 克監修

大久保利通

明治維新の立て役者、大久保の実像を語る証言集。明治四十三年十月から新聞に九十六回掲載、好評を博す。強い責任感、冷静沈着で果敢な態度、巧みな交渉術など多様で豊かな人間像がゆかりの人々の肉声から蘇る。

1683

井上光貞著(解説・大津 透)
飛鳥の朝廷

文化の飛躍的發展が開く古代統一国家への道。仏教伝来、聖徳太子の施策、大化の改新、白村江の戦いと壬申の乱、そして古代天皇制の確立へ。中国・朝鮮との濃密な関係をふまえ、六・七世紀の日本を活写する。

1664

伊藤貞夫著

古代ギリシアの歴史 ポリスの興隆と衰退

西欧文明の源流・ポリスの誕生から落日まで。先史文明から諸王国の崩壊を経て民主政を確立した都市国家。ペルシア戦争に勝利し黄金期を迎えたポリスがなぜ衰退したか。栄光と落日の原因を説明する力作。

1665

丸山 昇著

上海物語 国際都市上海と日中文化人

上海の近現代を彩った人々が織りなすドラマ。帝国主義対半植民地、革命対反革命。矛盾・対立が渦巻く「中国の中の外国」上海租界を舞台に展開された、魯迅、郭沫若、金子光晴、内山完造らの活動の軌跡を追う。

1667

黒羽清隆著(解説・保阪正康)

太平洋戦争の歴史

公文書や庶民の日記で描く戦地と戦後の真実。真珠湾奇襲、ミッドウエー、ガダルカナルの死闘、原爆投下、ポツダム宣言と敗戦。人々に大きな傷跡を残した戦争を臨場感あふれる筆致で描く、忘れえぬ昭和の断章。

1669

鬼頭清明著(解説・渡辺晃宏)

木簡の社会史 天平人の日常生活

木簡から明らかになる古代人の暮らしと社会。宮城への通行証、役人の出勤伝票、借金の証文、物品の荷札や納品書、役行手形等々、多様な用いられ方をした木簡。その解析を通じて、古代社会のありさまを探る。

1670

A・アンペール著／茂森唯士訳

絵で見る幕末日本

スイス商人が描く幕末の江戸や長崎の姿。鋭敏な観察力、才能豊かな筆の運び。日本各地、特に、幕末江戸の町を自分の足で歩き、床屋・魚屋・本屋等庶民の生活の様子を生き生きと描く。細密な挿画百四十点掲載。

1673

エドゥアルド・スエンソン著／長島要一訳
江戸幕末滞在記 若き海軍士官の見た日本

若い海軍士官の好奇心から覗き見た幕末日本。慶喜との謁見の模様や舞台裏も紹介、ロッシュ公使の近辺で貴重な体験をしたデンマーク人の見聞記。旺盛な好奇心、鋭い観察眼が王政復古前の日本を生き生きと描く。

1625

宮地佐一郎著

龍馬の手紙 坂本龍馬全書簡集・関係文書・詠草

幕末の異才、坂本龍馬の現存する手紙の全貌。動乱の世を志高く駆け抜けていった風雲児の手紙は何を語るのか。壮大な国家構想から姉や姪宛の私信まで、計一三九通。龍馬の青春の軌跡が鮮やかに浮かび上がる。

1628

桑田忠親著

武士の家訓

乱世を生き抜く叡知の結晶、家訓。戦国の雄たちは子孫や家臣に何を伝えたのか。北条重時、毛利元就から、信長・秀吉・家康まで、戦国期の大名二十三人の代表的家訓を現代語訳し、挿話を交えて興味深く語る。

1630

黒田勝弘・畑好秀編

昭和天皇語録

昭和天皇の「素顔」を映し出す折々のことは。踐詐の勅語から日航機墜落事故への感想まで、歴代最長となる在位期間中の発言の数々に、周辺の事情を伝える新聞記事等を添えて綴った、臨場感溢れる昭和天皇語録。

1631

上田雄著

渤海国 東アジア古代王国の使者たち

謎の国渤海と古代日本の知られざる交流史。七世紀末中国東北部に建国され二百年に三十回も日本に使者を派遣した渤海。新羅への連携策から毛皮の交易、遣唐使の往還まで、多彩な交流を最新の研究成果で描く。

1653

エミール・ルートヴィヒ著／北澤真木訳解説・アンリ・ピドゥー

ナポレオン (上) (下) 英雄の野望と苦悩

人間ナポレオンの実像に迫る世界的な名著。一兵士から皇帝に上り詰めた英雄。その生誕から臨終までの全生涯をドラマティックに記述。克明で、辛辣な心理描写。揺れ動く心の内面に光を当てたナポレオン伝。

1659・1660

窪田蔵郎著

鉄から読む日本の歴史

考古学・民俗学・技術史が描く異色の文化史。大和朝廷権力の背景にある鉄器、農耕力を飛躍的に向上させた鉄製農耕具、鋳造鍛錬技術の精華としての美術工芸品や日本刀。〈鉄〉を通して活写する、日本の二千年。

1588

網野善彦著(解説・田島佳也)

海と列島の中世

海が人を結ぶ、列島中世を探照する網野史観。海は柔かい交通路である。海村のあり方から「倭寇世界」まで文化を結ぶ海のダイナミズムを探り、東アジアに開かれた日本列島の新鮮な姿を示す網野史学の論集。

1592

川勝義雄著(解説・氣賀澤保規)

魏晉南北朝

〈華やかな暗黒時代〉に中国文明は咲き誇る。秦漢帝国の崩壊をもたらした混乱と分裂の四百年。専制君主なき群雄割拠の時代に、王羲之、陶淵明、「文選」等を生み出した中国文明の一貫性と強韌性の秘密に迫る。

1595

小林蒼夫著

イギリス紳士のユーモア

卓抜なユーモアを通して味わう英国人生哲学。山高帽にこうもり傘、悠揚迫らぬ精神から大英帝国を彩るユーモアが生まれた。当意即妙、グロテスクなほどブラック、自分を笑う余裕。ユーモアで読む英国流人生哲学。

1605

山本博文著

江戸お留守居役の日記 寛永期の萩藩邸

根廻しに裏工作。現代日本社会の原像を読む。萩藩の江戸お留守居役、福岡彦右衛門の日記「公儀所日乗」由井正雪事件や支藩との対立等、迫り来る危機を前に、藩の命運を賭けて奮闘する外交官の姿を描く好著。

1620

上垣外憲一著(解説・井上秀雄)

倭人と韓人 記紀からよむ古代交流史

古代日韓の人々はどんな交流をしていたのか。記紀神話を「歴史」として読みなおし、そこに描かれた倭と半島の交流の様子を復元する。比較文学・比較文化の手法を駆り描き出す、刺激的かつダイナミックな論考。

1623

ハインリッヒ・シュネー著／金森誠也訳

「満州国」見聞記 リットン調査団同行記

満州事変勃発後、国際連盟は実情把握のため、リットン卿を団長とする調査団を派遣した。日本、中国、満州、朝鮮……。調査団の一員が、そこで見た真実の姿とは。「満州国」建国の真相にせまる貴重な証言。

1567

横井 清著

室町時代の一皇族の生涯 「看聞日記」の世界

室町前期の息づまる政局の脈動を伝える日記。皇位継承をめぐる皇族間の確執、將軍養教の崩落政治。四季を彩る行事、猿楽・連歌など芸能文化の様子。後花園天皇の父、伏見宮貞成の綴った興味溢れる日記の世界。

1572

藤本正行著(解説・橋岸純夫)

信長の戦争 「信長公記」に見る戦国軍事学

霸王・信長は「軍事的天才」だったのか？ 明治に作られた「墨俣一夜城」の史実。根拠のない長篠の「鉄砲三千挺・三段撃ち」。『信長公記』の精流があかす信長神話の虚像と、それを作りに上げた意外な事実。

1578

井波律子著

酒池肉林 中国の贅沢三昧

中国の麗大な宮が大奢侈となって降り注ぐ。甕を競う巨大建築、後宮三千の美女から、美食と奇食、大量殺人、麻薬の海、そして精神の満尽まで。四千年をいろうる贅沢三昧の中に、もうひとつの中国史を読む。

1579

門脇禎二著

古代出雲

荒神谷遺跡発掘以後の古代出雲論を総括する。一九八四年、弥生中期の遺跡荒神谷から大量の青銅器が発掘された。出雲にはどんな勢力が存在したのか。新資料や多くの論考を検討し、新しい古代出雲像を提示する。

1580

田中 彰著

明治維新

世界の中の「日本革命」を描く維新史の名著。十九世紀米欧を体験した維新のリーダーたちは、列強の巨大な圧力の中でいかに国家を造ったか。民衆はいかに自らの主体性を自覚したか。今なお瑞々しい名著の復刊。

1584

原 武士著

《出雲》という思想 近代日本の抹殺された神々

《出雲》はなぜ明治政府に抹殺されたのか？「国家神道」「団体」の確立は、《出雲》に対する《伊勢》の勝利宣言だった。近代化の中で闇に葬られたオホクニヌシを主祭神とするもう一つの神道思想の系譜に迫る。

1516

増井経夫著(解説・山根幸夫)

大清帝国

最後の中華王朝、栄華と落日の二百七十年。政治・経済・文化等、あらゆる面で中国四千年の伝統が集大成された時代・清。満州族による建國から崩壊までを描き、そこに生きた民衆の姿に近代中国の萌芽を眺む。

1526

エリザ・R・シドモア著／外崎克久訳

シドモア日本紀行 明治の人力車ツアー

女性紀行作家が描いた明治中期の日本の姿。ポトマック河畔の桜の植樹の立役者、シドモアは日本各地を人力車で駆け巡り、明治半ばの日本の世相と花を愛する日本人の優しい心を鋭い観察眼で見事に描き出す。

1537

飛鳥井雅道著

坂本龍馬

幕末の英雄・龍馬の思想と生涯を捉えなおす。三十余年の短い生涯ながら、幕末史に燦として輝く坂本龍馬。数多伝わるその人物像ははたして正しいか。文化史的・思想的側面から龍馬の実像を探る異色の龍馬伝。

1546

山本博文著

対馬藩江戸家老 近世日朝外交をささえた人びと

国境藩を通して見た日朝外交の本音と建前。八代将軍吉宗の代替わりに際し、朝鮮通信使が来日する。幕府と朝鮮の間において、双方に嘘をつき続けながら、日朝の「交隣」を支えた小藩の苦悩と奮闘を活写する。

1551

今谷 明著

信長と天皇 中世的權威に挑む霸王

霸王・信長は勳皇の忠臣か、面従腹背の徒か。中世的權威を否定し統一事業を推進する織田信長の前に立ちはだかる最大の障壁・正親町天皇。信長の政治構想を通し、天皇制存続の謎と天皇の權威の実体に迫る好著。

1561

小林章夫著

コーヒー・ハウス 18世紀ロンドン、都市の生活史

珈琲の香りに包まれた近代英国の喧噪と活気。十七世紀半ばから一世紀余にわたるイギリスの政治や社会文化に多大な影響を与えた情熱基地。その歴史を通して、爛熟する都市・ロンドンの姿と市民生活を描写する。

1451

永積 昭著(解説・広末雅士)

オランダ東インド会社

東インド貿易の勝利者、二百年間の栄枯盛衰。香料貿易を制し、胡椒・コーヒー等の商業用作物栽培に進出して成功を取めたオランダ東インド会社は、なぜ滅亡したか? インドネシア史を背景にその興亡を描く。

1454

勝 海舟著／江藤 淳・松浦 玲編

氷川清話

海舟が晩年語った人物評・時局批判の小話集。幕末期の難局に手腕を発揮し、次代を拓いた海舟、齒に衣着せず語った辛辣な人物評、痛烈な時局批判は、彼の人間臭さや豪快さが伝わる魅力いっぱい的好著である。

1463

今谷 明著

戦国大名と天皇 室町幕府の解体と王権の逆襲

戦国時代の天皇制は崩壊寸前だったのか? 室町幕府の解体が進み、戦国大名は上洛を目指す。義満により権威を喪失したかに見えた天皇は、この状況下に復権を図る。天皇制特続の秘密を解明する刺激的な研究。

1471

A・B・ミットフォード著／長岡祥三訳

ミットフォード 日本日記 英国貴族の見た明治

元外交官が描く四十年ぶりに見た素顔の明治。幕末維新の激動期を体験したミットフォードが英国王族随員として来日。徳川慶喜公との会見や各地の歓迎の様子、大変貌した日本の姿などを生き生きと描写する。

1474

エドウィン・O・ライシャワー著／國弘正雄訳

ライシャワーの日本史

グローバルな視点から大胆に日本史を見直す。主要な流れと傍流を判然と区別し、随所に独特な見方を織り混ぜ、日本史の全体像を描き出す。日本生まれの異質な体験をもつ著者が本領發揮、視野の広い異色の通史。

1500

佐々木 克著

志士と官僚 明治を「創業」した人びと

幕末の志士は明治政府にいかに関わったのか。官僚へ見事に変身した大久保利通。志士の資質から遂に脱しきれなかった西郷隆盛、木戸孝允。維新期の混乱の中で形成された「官僚」を斬新な手法で解明した好著。

1416

貝塚茂樹・伊藤道治著

古代中国 原始・殷周・春秋戦国

北京原人から中国古代思想の黄金期への歩み。原始時代に始まり諸子百家が輩出した春秋戦国期に到る悠遠な時間の中で形成された、後の中国を基礎づける独自の文明。最新の考古学の成果が書き換える古代中国像。

1419

門脇禎二著

葛城と古代国家 《付》河内王朝論批判

葛城の地に視点を据えたヤマト国家成立論。統一王朝大和朝廷はどのように形成されていったか。海外の新文化の流入路であり、大小多数の古墳が残る葛城——その支配の実態と大和との関係を系統的に解明する。

1429

鬼頭 宏著

人口から読む日本の歴史

歴史人口学が解明する日本人の生と死の歴史。増加と停滞を繰り返す四つの大きな波を経て、一万年にわたる増え続けた日本の人口。そのダイナミズムを分析し、変容を重ねた人びとの暮らしをいきいきと描き出す。

1430

堀 敏一著

中国通史 問題史としてみる

歴史の中の問題点がかかる独自の中国通史。中国の歴史をみる上で、何が大事で、どういう点が問題になるのか。書く人の問題意識が伝わることに意を注ぎ古代から現代までの中国史の全体像を描き出した意欲作。

1432

網野善彦著 解説・山本幸司

中世再考 列島の地域と社会

日本中世史を見直す著者の思想の原点を収録。中世史の諸説に対して様々な疑問を提示した小論を集めたもの。研究の現状分析、民衆の生活史、東国と西国、漁業民等、網野史学が展開する問題の原点がここににある。

1448

ピーター・ミルワード著／松本たま訳
ザビエルの見た日本

ザビエルの目に映った素晴らしい日本と日本人。一五四九年ザビエルは「知識に飢えた異教徒の国へ勇躍上陸し精力的に布教活動を行った。果して日本人はキリスト教を受け入れるのか。書留で読むザビエルの心算。」

1354

エセル・ハワード著／島津久大訳（解説・長岡祥三）
明治日本見聞録 英国家庭教師婦人の回想

一英国婦人の目に映った懐かしき明治の日本。薩摩藩主の家系島津家五人の子息の教育を託された家庭教師の興趣溢れる養育体験記。当時の上流社会の家庭の様子と日本の風俗、日本人の気質が愛憎こめて語られる。

1364

エドウィン・O・ライシャワー著／田村完誓訳
えいたん
円仁 唐代中国への旅「入唐求法巡礼行記」の研究

円仁の波瀾溢れる旅日記の価値と魅力を語る。九世紀唐代中国のさすらいと苦難と冒険の旅。世界三大旅行記の一つ「入唐求法巡礼行記」の内容を生き生きと描写し、歴史的意義と価値を論じるライシャワーの名著。

1379

大隅和雄著解説・五味文彦
愚管抄を読む 中世日本の歴史観

中世の僧慧円の主著に歴史思想の本質を問う。平清盛全盛の時代、比叡山に入り大僧正天台座主にまで昇りつめた慧円。摂関家出身で常に政治的立場をも意識せざるを得なかった慧円の目に映った歴史の道理とは？

1381

ルドルフ・ヘス著／片岡啓治訳（解説・芝 健介）
アウシユヴィッツ収容所

大量虐殺の責任者R・ヘスの驚くべき手記。強制収容所の建設、大量虐殺の執行の任に当たったヘスは職務に忠実な教養人で良き父・夫でもあった。彼はなぜ凄惨な殺戮に手を染めたのか。本人の淡々と語る真実。

1393

網野善彦・森 浩一著解説・岩田 扇
馬・船・常民 東西交流の日本列島史

日本列島の交流史を新視点から縦横に論じている。馬・海・女性という日本の歴史学から抜け落ちていた事柄を、考古学と日本中世史の権威が結び合う。常識を打ち破り、日本の真の姿が立ち現われる刺激的な対論の書。

1400

R・フォーチュン著／三宅 馨訳(解説・白幡洋三郎)

幕末日本探訪記 江戸と北京

世界的プラントハンターの幕末日本探訪記。英国生まれの著名な園芸学者が幕末の長崎、江戸、北京を訪問。珍しい植物や風俗を旺盛な好奇心で紹介し、桜田門外の変や生支事件の見聞も詳細に記した貴重な書。

1308

愛宕松男・寺田隆信著

モンゴルと大明帝国

征服王朝の元の出現と漢民族国家・明の盛衰。チンギスハーンによるモンゴル帝国建設とそれに続く元の中国支配から明の建国と滅亡までを論述。耶律楚材の改革、帝位奪奪者の永楽帝による遠征も興味深く読可。

1317

H・シュリーマン著／石井和子訳

シュリーマン旅行記 清国・日本

シュリーマンが見た興味尽きない幕末日本。世界的に知られるトロイア遺跡の発掘に先立つ世界旅行の途中で、日本を訪れたシュリーマン。執拗なまでの探究心と旺盛な情熱で幕末日本を活写した貴重な見聞記。

1325

イザベラ・バード著／時岡敬子訳

朝鮮紀行 英国婦人の見た李朝末期

百年まえの朝鮮の実情を忠実に伝える名紀行。英人女性イザベラ・バードによる四度わたる朝鮮旅行の記録。国際情勢に翻弄される十九世紀末の朝鮮とその風土、伝統的文化、習俗等を活写。絵や写真も多数収録。

1340

網野善彦著(解説・山折哲雄)

東と西の語る日本の歴史

日本人は単一民族説にとられすぎていないか。日本列島の東と西に生きた人びとの生活や文化の差異が、歴史にどんな作用を及ぼしたかを根本から見直す網野史学の代表作。新たな視点で日本民族の歴史に迫る。

1343

A・B・ミットフォード著／長岡祥三訳

英国外交官の見た幕末維新 リーズデル卿回想録

激動の時代を見たイギリス人の貴重な回想録。アーネスト・サトウと共に江戸の寺で生活をしながら、数々の事件を体験したイギリス公使館員の記録。徳川幕府崩壊の過程を見すえ、様々な要人と交った冒険の物語。

1349

上田正昭著

大和朝廷

古代王権の成立

大和朝廷が成立するまでを、邪馬台国を経て奈良盆地の三輪王権から河内王権への王朝交替観などで分析。葛城、蘇我や大伴、物部などの部族と、大王家との権力争奪の実態を克明に解く。古代日本の王権確立の過程を解明した力作。

1191

松本健一著

北一輝論

昭和初期の国家主義運動の教典「日本改造法案大綱」を発表、一九三六年の二・二六事件の黒幕として処刑された北一輝。新資料を駆使して昭和史の暗部を照射、ロマン的革命家・北一輝像の実像を描く力作評伝。

1214

カエサル著／國原吉之助訳

内乱記

英雄カエサルによるローマ統一の戦いの記録。前四九年、ルビコン川を渡ったカエサルは地中海を股にかけ政敵ポンペイユスと戦う。あらゆる困難を克服し勝利するまでを追真の名文で綴る。ガリア戦記と並ぶ名著。

1234

直木孝次郎著

日本古代国家の成立

古墳や遺物の面期的分析で説く古代国家成立。邪馬台国をめぐる様々な学説の検証や注目の古墳、鉄剣銘文の解説から古代史の謎に肉迫。畿内大和の三輪王朝から河内王朝への政権交代による日本国家成立を説く。

1262

西嶋定生著

秦漢帝国

中国古代帝国の興亡

中国史上初の統一国家、秦と漢の四百年史。始皇帝が初めて中国全土を統一した紀元前三世紀から後漢末までを兵馬俑の全貌も盛り込み詳述。皇帝制度と儒教を軸に劉邦、項羽など英雄と庶民の歴史を秦斗が説く。

1273

布目潮瀧・栗原益男著

隋唐帝国

三百年も東アジアに君臨した隋唐の興亡史。律令制の確立で日本や朝鮮の古代国家に多大な影響を与えた隋唐帝国。則天武后の専制や玄宗と楊貴妃の悲恋など、波乱に満ちた世界帝国の実像を精緻に論述した力作。

1300

樺山紘一著
かほやまこういち

ルネサンス

人間精神が解放され近代文化の基盤を開いたルネサンス。その華やかな文化の光の部分のみならず陰の部分にも焦点をあてて、ルネサンスを総合的に捉えた斬新な歴史書。最新の見解にもとづく待望のルネサンス論

1083

長澤和俊著

シルクロード

シルクロードをめぐる必読の東西文化交流史。荒涼たる砂漠の西域を貫き、東西文化の架橋であったシルクロード。この国際交易路の歴史と文化研究の第一人者が、最新の成果をもとに渾身から書下ろした注目の書。

1086

長谷川博隆著

カエサル

古代ローマの転換期を生きたカエサルの生涯。英雄カエサルの波乱に満ちた一生をたどりながら、共和政から帝政へと移行する激動期の古代ローマ政治家群像を活写。ローマ史研究の泰斗による決定版カエサル論

1111

カエサル著／國原吉之助訳

ガリア戦記

ローマ軍を率いるカエサルが、前五八年以降、七年にわたりガリア征服を試みた戦闘の記録。当時のガリアとゲルマニアの事情を知る上に必読の歴史的記録として有名。カエサルの手になるローマ軍のガリア遠征記。

1127

橋口倫介著

十字軍騎士団

秘密結社的な神秘性を持ち二百年後に悲劇的結末を迎えたテンブル騎士団、強大な海軍力で現代まで存続した聖ヨハネ騎士団等、十字軍遠征の中核となった修道騎士団の興亡を十字軍研究の権威が綴る騎士団の歴史

1129

小堀桂一郎編

東京裁判

日本の弁明

「却下未提出弁護側資料」抜粋

語られざる資料が語る東京裁判の本質とは？ 日本の戦後を決定づけた東京裁判。果してこの裁判は、歴史の事実にもとづいた正義と公平な裁判であったのだろうか。戦後五十年余、いま問いなおされる歴史の真実。

1189

朝河貫一著(解説・由良君美)

日本の禍機

かき

世界に孤立して困窮を感ずるなかれ——日露戦争後の祖国日本の動きを憂え、遠く米国からエル大学教授の朝河貫一が訴えかける。日米の追間で日本への批判と進言を続けた朝河の熱い思いが人の心に迫る名著。

784

石村貞吉著(解説・嵐 義人)

有職故実 (上) (下)

国文学、日本史学、更に文化史・民俗史研究と深い関係にある有職故実の変遷を辿った本書には官職位階・平安京及び大内裏・儀式典札・年中行事・服飾・飲食・殿舎・調度輿車・甲冑武器・武技・遊戯等を収録。

800・801

直木孝次郎著

日本神話と古代国家

記・紀編纂の過程で、日本の神話はどのような潤色を加えられたか……天孫降臨や三種の神玉、ヤマトタケルなどの具体例をもとに、文献学的研究により日本の神話が古代国家の歴史と形成に果たした役割を究明。

928

小塩 節著

ドイツの都市と生活文化

歴史的な困難を乗り越えて東西の統一をなしたドイツ。強烈な自己主張と自立精神は、一体どんな歴史と文化の中から生まれたのか。ドイツ人の精神をささえる生活文化を日常の生活の現場から明す刮目の書。

1064

所 功著

伊勢神宮

日本人にとって伊勢神宮とはいかなる処か。93年は伊勢神宮の第61回の式年遷宮の年。二十年ごとの造替行事が千数百年も持続できたのはなぜか。世界にも稀な聖地といわれる神宮の歴史と日本人の英知を論述。

1068

村川堅太郎・長谷川博隆・高橋 秀著

ギリシア・ローマの盛衰

古典古代の市民たち

トロヤ戦争など伝説の時代から、ギリシアに都市国家ができ古代市民が誕生するまでを活写。さらに空前の帝国を築いたローマがなぜ滅亡したのかその原因を究明する。古代市民の盛衰を軸にした地中海世界の興亡。

1080

若槻禮次郎著解説・伊藤 隆

明治・大正・昭和政界秘史 古風庵回顧録

和田英松著(校訂・所 功)
新訂官職要解

東京裁判研究会編
共同研究 パル判決書 (上) (下)

福沢諭吉著(解説・小泉 仰)
明治十年 丁丑公論・瘠我慢の説

金達寿著
日本古代史と朝鮮

金達寿著
古代朝鮮と日本文化 神々のふるさと

日本の議會政治隆盛期に、二度にわたる内閣総理大臣を務めた元宰相が語る回顧録。明治から昭和激動期まで中央政界にあった若槻が、親しかった政治家との交流や様々な抗争を冷徹な眼識で描く政界秘史。

平安時代を中心に上代から中近世に至る我が国全官職の官名・職掌を漢籍や有職書によって説明するだけでなく、当時の日記・古文書・物語・和歌を縦横に駆使してその実態を具体的に例証した不朽の名著。

東京裁判とは何だったのか。豊かな学識と平和を祈念する人類愛に基づいた「パル判決書」は、東京裁判の多数派判決を正面から論駁した記念碑的名著である。本書はさらに多角的解説を付した割目の書である。

西南戦争勃発後、逆賊扱いの西郷隆盛を弁護した「丁丑公論」、及び明治維新における勝海舟、榎本武揚の挙措と出処進退を批判した「瘠我慢の説」他を収録。諭吉の抵抗と自由独立の精神を知る上に不可欠の書。

地名・古墳など日本各地に現存する朝鮮遺跡や、記紀に見られる高句麗・百濟・新羅系渡来人の足跡等を通して、密接な関係にあった日本と朝鮮の実像を探る。豊富な資料を駆使して描いた古代日朝関係史。

高麗神社、百濟神社、新羅神社など、日本各地に散在する神々は古代朝鮮と密接な関係があった。神社・神宮に関する文献や地名などを手がかりにその由来をたどり、古代朝鮮と日本との関わりを探る古代史への旅。

619

621

623・624

675

702

754

内藤湖南著(解説・桑原武夫)

日本文化史研究 (上) (下)

日本文化は、中国文化圏の中にあつて、中国文化の強い影響を受けながらも、日本独自の文化を形成してきた。著者はそれを深い学識と日中の歴史事実とを通して解明した。卓見あふれる日本文化論の名著。

76・77

河口慧海著(校訂・解説・高山樗三)

チベット旅行記 (一) (二) (三) (四) (五)

仏教の原典を求めたいという一心から、厳重な鎖国をしくチベットにあらゆる困難に打克つて単身入国を果たした河口慧海師の波瀾万丈の旅行記。チベット研究のための第一級の古典的文献でもある。(全五巻)

263~267

河口慧海著(解説・川喜田三郎)

第二回チベット旅行記

仏教の原典を求めて、チベット、ヒマラヤの秘境をたずねる冒険旅行の第二回目。次々とふりかかる苦難のなかで、チベットの生物や民俗を観察する著者の視線は鋭く、読み物として学術資料として第一級の書。

317

平泉澄著

物語日本史 (上) (中) (下)

著者が、一代の熱血と長年の学問・研究のすべてを傾けて、若き世代に贈る好著。真実の日本歴史とは何か、正しい日本人のあり方とは何かが平易に説かれ、人物中心の記述が歴史への興味をそそる。(全三巻)

348~350

ニコライ著／中村健之介訳

ニコライの見た幕末日本

幕末・維新時代、わが国で布教につとめたロシアの宣教師ニコライの日本人論。歴史・宗教・風習を深くさぐり、鋭く分析して、日本人の精神の特質を見事に浮き彫りにした刮目すべき書である。本邦初訳。

393

白川静著

中国古代の文化

中国の古代文化の全体像を探る。斯界の碩学が中国の古代を、文化・民俗・社会・政治・思想の五部に分ち、日本の古代との比較文化的な視野に立って、その諸問題を明らかにする画期的作業の第一部。

441

藤澤房俊著(解説・武谷なおみ)
シチリア・マフィアの世界

名督、沈黙、民衆運動、ファシズム……。大土地所有制下、十八世紀に台頭した農村ブルジョア層は、暴力と脅迫でイタリア近・現代政治を支配した。過酷な風土と丘政が育んだ謎の組織の誕生と発展の歴史を辿る。

1965

千葉正士著

世界の法思想入門

西欧法思想を唯一普遍とする従来の常識を見直し、ユダヤ、イスラム、中国、日本など非西欧圏の法思想を固有の歴史や文化に絡めて紹介する。各文化に根付いた法思想を学ぶことで、異文化理解にも繋がる好著。

1842

青木昌彦著

比較制度分析序説 経済システムの進化と多元性

普遍的な経済システムはありえない。アメリカ型モデルはどう進化していくか。日本はどう「変革」すべきか。制度や企業組織の多元性から経済利益を生み出すための「多様性の経済学」を、第一人者が解説する。

1930

K・マルクス、F・エンゲルス著／水田 洋訳

共産党宣言・共産主義の諸原理

全人類の解放をめざした共産主義とはなんだったのか。力強く簡潔な表現で、世の不均衡・不平等に抗する労働者の闘争を支えた思想は、今なお重要な示唆に富む。斯界の泰斗による平易な訳と解説で読む、不朽の一冊。

1931

秋元英一著(解説・林 敏彦)

世界大恐慌 1929年に何がおこったか

一九二九年、ニューヨーク株式市場の大暴落から始まった世界的大恐慌。株価は七分の一に下落、銀行倒産六千件、失業者一千万人。難解な専門用語や数式を用いず、庶民の目に映った米国の経済破綻と混乱を再現。

1935

J・K・ガルブレイス著／斎藤精一郎訳(解説・根井雅弘)

不確実性の時代

大恐慌、戦争、超巨大企業の支配、貧困、核の脅威など、増大する不確実性。鋭い時代感覚とジャーナリスティックな視点で現代資本主義の本質を抉り出す。「経済学の巨人」が語る、未来のための経済思想史。

1945

中根千枝著

タテ社会の力学

不朽の日本人論「タテ社会の人間関係」で「タテ社会」というモデルを提示した著者が、全人格的参加、無差別平等主義、儀礼的序列、とりまきの構造等の事例から日本社会のネットワークを描き出した社会学の名著。

1956

バーナード・クリック著／添谷育志・金田耕一訳（解説・藤原希）
現代政治学入門

「政治不在」の時代に追究する、政治の根源。政治は何をなしうるか。我々は政治に何をなしうるか。そして政治とは何か。現代社会の基本教養・政治学の最良の入門書として英国で定評を得る一冊。待望の文庫化。

1604

ニココロ・マキアヴェッリ著／佐々木 毅全訳注
君主論

大文字版

近代政治学の名著を平易に全訳した大文字版。乱世のルネサンス期、フィレンツェの外交官として活躍したマキアヴェッリ。その代表作「君主論」を第一人者が全訳し、権力の獲得と維持、喪失の原因を探る。

1689

根井雅弘著
経済学の歴史

スミス以降、経済学を築いた人と思想の全貌。創始者のケネシー、スミスからマルクスを経てケインズ、シュンペーター、ガルブレイスに至る十二人の経済学者の生涯と理論を解説。珠玉の思想と哲学を発掘する力作。

1700

根井雅弘著
シュンペーター

大文字版

二十世紀経済学の天才と謳われた孤高の学者。ケインズと並び称され独自の理論を立てたシュンペーター。イノベーション・企業者精神・創造的破壊などが与えた影響は？ 学派を作らなかつた研究者の思想と生涯。

1743

伊藤 誠著
『資本論』を読む

経済学のバイブル的書物「資本論」。マルクスは当時の人々の生活を見据え、資本主義経済の仕組みを分析した。その膨大で難解な名著のエッセンスとなる章句を選び出し、懇切な解説を施し、その魅力を説く。

1796

M・I・フィンリー著／柴田平三郎訳（解説・木庭 颯）
民主主義 古代と現代

古代ギリシアと現代。根本的に異なる二つの世界から、理想の民主主義をいかに構想しうるか。ギリシア史の泰斗がアテナイの政治の実態と本質を功罪両面から分析し、現代の民主主義のあり方を考える歴史的名著。

1810

M・ウェーバー著／祇園寺信彦・祇園寺則夫訳
社会科学の方法

ウェーバーは人間存在の諸現象を歴史的な理念とは捉えなかつた。彼は事実を比較対象する方法で、個人を主体性をもつ市民として救わんとした。マルクスの社会学方法論を凌駕した、時代を超える名著の新訳。

1151

J・R・ヒックス著／新保 博・渡辺文夫訳
経済史の理論

古代ギリシアの都市国家を分析し、慣習による非市場経済から商人経済が誕生した背景を証明。その後の市場経済の発展と、現代の計画経済との並立を論述した名著。理論経済学の泰斗が説いた独自の経済史論。

1207

水田 洋著
アダム・スミス 自由主義とは何か

自由主義経済の父A・スミスの思想と生涯。英国の資本主義勃興期に「見えざる手」による導きを唱え、経済学の始祖となったA・スミス。その人生と名著「国富論」や、道徳感情論、誕生の背景と思想に迫る。

1280

E・F・シューマッハー著／酒井 懋^{つとむ}訳
スモールイズビューティフル再論

人間中心の経済学を唱えた著者独特の随筆集。ベストセラー「スモールイズビューティフル」以後に雑誌に発表された論文をまとめたもの。人類にとって本当の幸福とは何かを考察し、物質主義を徹底批判する。

1425

W・ゾンバルト著／金森誠也訳
恋愛と贅沢と資本主義

資本主義はいかなる要因で成立・発展したか。著者はかつてM・ウェーバーと並び称された経済史家。「贅沢こそが資本主義の生みの親の一人であり、人々を贅沢へと向かわせたのは女性」と断じたユニークな論考。

1440

佐々木 毅著
プラトンの呪縛

理想国家の提唱者か、全体主義の擁護者か。西欧思想の定立者・プラトンをめぐる論戦を通して、二十世紀の哲学と政治思想の潮流を検証し、現代社会に警鐘を鳴らす注自作。和辻哲郎文化賞、読売論壇賞受賞。

1465

高坂正堯著
こうさかまさたか

現代の国際政治

904

高橋亀吉・森垣
たかはし かみきち・もりがき
淑著(解説・鈴木正俊)

昭和金融恐慌史

1066

戦後世界を動かしてきた共産主義の崩壊。今何が起きているのか。世界はこれからどう動く？ 対立と抗争に明け暮れた戦後国際政治を振り返り、冷戦からベレストロイカへの激動の歩みを辿り、世界の明日を考える。

第一次大戦後の投機ブームと不良債権の増大は、昭和二年、全国に銀行倒産が続発する事態に。巨額不良債権に苦悩するわが国金融界のあるべき姿を示す画期的な書。昭和金融恐慌の原因と実態を解明した名著。

佐々木 毅著
ささき たけ

マキアヴェッリと『君主論』

1109

近代政治学の開祖マキアヴェッリの生涯と思想形成をたどりながら、混沌の時代に権力の正体を見抜いて名高い名著『君主論』とその神髄を政治学の第一人者が論述。マキアヴェッリの思想を説き、『君主論』を全訳。

中村隆己著
なかむら たかひ

世界経済史

1122

ギリシア・ローマの古代から中世を経て近代に至る東西の経済発達史を解説。とくに資本主義の成立とその後の危機を掘り下げ、激変する世界経済の行方を示す好著。経済の歩みで迎える人類の歴史―刮目の経済史。

中村隆英著
なかむら たかひ

昭和恐慌と経済政策

1130

経済史の泰斗が大不況の真相を具体的に解明。金輸出解禁をきっかけに勃発した昭和恐慌。その背景には井上準之助蔵相の緊縮財政と政党内の対立抗争があった。平成不況の実像をも歴史的に分析した刮目の書。

長尾龍一著
ながお 龍一

リヴァイアサン 近代国家の思想と歴史

1140

近代における「主権国家」のあり方を問う。ホッブズ、ケルゼン、シュミットという西欧の三人の思想家の国家論を基軸に、国家はどうあるべきかという視点から国家史の再構成を試みた意欲作。文庫オリジナル。

中根千枝著

家族を中心とした人間関係

錯綜する現代社会の人間関係、集団構造を理解するには「家族」をどうとらえるかにある。本書は、タテ社会論を提唱した著者が日本をはじめ諸社会の家族に焦点をあて、その人間関係を解明した注目の書である。

101

マックス・ウェーバー著／濱島 朗訳・解説

社会主義

歴史は合理化の過程であるというウェーバーは、マルクスの所有理論に基づく資本主義批判に対して、支配の社会学が欠如していることを指摘し、社会主義の歴史的宿命は官僚制の強大化であると批判する。

511

日本国憲法

国民主権、平和主義、基本的人権の尊重を基本として生まれた日本国憲法。本書はこの新憲法を始め「大日本帝国憲法」「英訳日本国憲法」等の関係資料を収録した。憲法問題を正しく捉えるための国民必読の書。

678

E・F・シューマツハー著／小島慶三・酒井 懋訳

スモールイズビューティフル 人間中心の経済学

一九七三年、著者が本書で警告した石油危機はたちまち現実のものとなった。現代の物質至上主義と科学技術の巨大信仰を痛撃しながら、体制を超えた産業社会の病根を抉った、予言に満ちた知的革新の名著。

730

A・トクヴィル著／井伊玄太郎訳

アメリカの民主政治 (上) (中) (下)

フランスの政治学者トクヴィルが、独立後のアメリカの政治制度や法律、多数者の権力とその抑制機能、精神文化や風習の特性等の実態と本質を探り、アメリカンデモクラシーの本質を解明した古典的名著。

778~780

E・デュルケム著／井伊玄太郎訳

社会分業論 (上) (下)

機械的連帯から有機的連帯へ。個人と社会との関係において分業の果たす役割を解明し、幸福の増進と社会との相関をふまえた分業の病理を探る。闘争なき人類社会への道を展望するフランス社会学理論の歴史的名著。

873・874

福沢諭吉著／土橋俊一校訂・校注(解説・竹内 洋)
福翁自伝

幕末・維新の激動期、封建制の枠を軽々と突き破り、長崎、大坂、江戸、欧米へと自らの世界を展げ、日本の思想的近代化に貢献した福沢諭吉。痛快無類の人生を平明な口調で存分に語り尽くす、自伝文学の最高傑作。

1982

P・G・ハマトン著／渡部昇一・下谷和幸訳
知的生活

生き生きとものを考える喜びを説く人生哲学。時間の使い方・金銭への対し方から読書法・交際法まで自己を磨き有用の人物となるための心得万般を伝授。学識だけでない全人間的な徳の獲得を奨める知的探求の書。

985

ジョン・デューイ著／市村尚久訳
学校と社会・子どもとカリキュラム

デューイの教育思想と理論の核心を論じる。学校を小型の共同社会と捉え、子どもの主体性と生活経験の大切さを力説する名論考。シカゴ実験室学校の教育成果から各教科の実践理論と学校の理想像を提示する。

1357

シャルル・ヴァグネル著／大塚幸男訳／祖田 修監修
簡素な生活 一つの幸福論

百年前に書かれた今に通ずる人生の指針。本当に人間らしい生き方とはなにか。目の前の贅沢な物に惑わされず、「低く暮らし、高く思う」ための簡素な精神を主張する。世界的ミリオンセラーを再び世に問う。

1486

ジョン・デューイ著／市村尚久訳
経験と教育

大文字版

デューイの教育哲学を凝縮した必読の名著。子どもの才能と個性を切り拓く教育とはどのようなものか。子ども自身の経験を大切に、能動的成長を促す教育理論を構築。生きた学力をめざす総合学習の導きの書。

1680

寺崎昌男著(解説・折田悦郎)
東京大学の歴史 大学制度の先駆け

学部、学位、講座制、停年制、成績評価の方式など、日本の大学の組織・制度や慣行の多くは、東京大学が雛型となった。それらの側面から東大の歴史を追い、あわせて大学が直面している今日の課題を考察する。

1799

麻生 誠著(解説・岩水雅也)
日本の学歴エリート

卓越したリーダーたちをいかに育成するか――。明治中期から高度成長期まで、日本の近代化における「学歴エリート」の形成とその功罪を分析。日本型学歴社会の病理を抉り、社会としての英才教育を問い直す。

1974

人生・教育

村井 実全訳・解説

アメリカ教育使節団報告書

戦後日本に民主主義を導入した決定的文獻。臣民教育を否定し、戦後の我が國の民主主義教育を創出した不朽の原典。本書は、「戦後」を考え、今日の教育問題を考える際の第一級の現代史資料である。

253

小堀桂一郎訳・解説

森鷗外の『智恵袋』

文豪鷗外の著わした人生智にあふれる箴言集。世間へ船出する若者の心得、逆境での身の処し方、朋友・異性との交際法など、人生百般の実践的な教訓を満載。鷗外研究の第一人者による格調高い口語訳付き。

523

サミュエル・スマイルズ著／中村正直訳（解説・渡部昇一）
西国立志編

原著「自助論」は、世界十数カ国語に訳されたベストセラーの書。「天は自ら助くる者を助く」という精神を思想的根幹とした、三百余人の成功立志談。福沢諭吉の「学問のすゝめ」と並ぶ明治の二大啓蒙書の一つ。

527

新渡戸稲造著（解説・佐藤全弘）
自警録 心のもちかた

日本を代表する教育者であり国際人であった新渡戸稲造が、若い読者に人生の要諦を語りかける。人生の妙味はどこにあるか、広く世を渡る心がけは何か、全力主義は正しいのかなど、処世の指針を与える。

567

貝原益軒著／伊藤友信訳
養生訓 全現代語訳

大儒益軒は八十三歳でまだ一本も歯が脱けていなかった。その全体験から、庶民のために日常の健康、飲食、飲酒、色欲、洗浴、用薬、幼育、養老、鍼灸など、四百七十項に分けて、噛んで含めるように述べた養生の百科である。

577

小泉信三著（解説・阿川弘之）
平生の心かけ

慶応義塾塾長を務め、「小泉先生」と誰からも敬愛された著者の平明にして力強い人生論。「知識と智慧」など日常の心支度を説いたものを始め、実用有用の助言に富む。一代の碩学が説く味わい深い人生の心得集。

852

M・ボイス著／山本由美子訳
ゾロアスター教 三五〇〇年の歴史

三五〇〇年前に啓示によって誕生したこの宗教は、キリスト教、イスラム教、仏教へと流れ込んだ。火と水の祭儀、善悪二元論、救世主信仰……。謎多き人類最古の世界宗教の信仰内容と歴史を描く本格的入門書。

1980

鑑よき 淳まじし 訳

バガヴァッド・ギーター

星はかり 義よし 治はる 著

宗教哲学入門

佐藤弘夫全訳注

日蓮「立正安国論」

井上とじか 銳か 夫か 著(解説・草野顯之)

本願寺

田中久夫著

鎌倉仏教

中村 元・三枝充恵著(解説・丘山 新)

パウツダ「佛教」

「私利私欲を離れ、執着なく、なすべき行為を遂たせ」と神への献身的愛を語り、インドの人びとが古来愛甞してきた珠玉の聖典。多くの人の心に深い感銘を与え、本書は懇切な訳注と事項索引を付す原典訳。

宗教とは何か。その役割はどこにあるのだろうか。現代的「苦」からの救済の道を、キリスト教、仏教、イスラム教という三大宗教は指し示せるのか。「信なき時代」における自然科学の存在意味と課題を問い直す。

社会の安穏実現をめざし、具体的な改善策を「勘文」として鎌倉幕府に提出された「立正安国論」。国家主義と結びついた問題の書を虚心坦懐に読み、「先ず国家を折って須らく仏法を立つべし」の真意を探る。

日本史の表舞台にも登場する一大社会勢力となった浄土真宗。本願寺の成立から発展、信長との対戦、時の政權との結びつき、そして東西分立に至る事情など、日本社会の深部に浸透した教団の背景を考察する。

中世の幕開きに興った仏教改革の潮流。新宗派が誕生し、旧仏教にも変革の機運が生じた時代に、人々は何を求め、何に折ったのか。貴族のための伝統的仏教が個人の救済をめざす大衆仏教に変貌する過程を描く。

釈尊の思想を阿含經典に探究し、初期仏教の発生から大乘仏教や密教の展開に至るまでの過程を追い、仏教の壮大な全貌を一望する。思想としての仏教を解明し「仏教」の常識を根底から覆す、真の意味の仏教入門。

1864

1875

1880

1896

1968

1973

宗教

大谷哲夫全訳注

道元「小参・法語・普勧坐禅儀」

しちさん

ふかんざぜんぎ

仏祖の家訓をやさしく説く小参。仏道の道理を懇切に述べた法語。只管打坐、坐禅の要諦と心構えを記した普勧坐禅儀。真劍勝負に生きた道元思想を漢文体の名文で綴った「永平広録」巻八を丁寧に解説する。

1768

秋月龍珉著 解説・竹村牧男

誤解された仏教

靈魂や輪廻転生、神、死者儀礼等をめぐる問題につき、日本人の仏教に対するさまざまな誤解を龍珉師が喝破。「仏教」無神論・無靈魂論の主張を軸に、仏教への正しい理解のあり方を説いた刺激的論考。

1778

河口慧海著／奥山直司編

河口慧海日記 ヒマラヤ・チベットの旅

禁断の聖地へ、仏教の原典を求めて苛酷なヒマラヤ越えを敢行、砂嵐に耐え飢えをしのぎ、強盗に遭い大河で溺れながらもしたチベット行の驚愕の日記を、懇切な注釈と解説とともに全文掲載。姪の追想録も付す。

1819

村上重良著

天皇制国家と宗教

キリシタン弾圧、仏教への打撃政策など、天皇中心の神道の国民教化に乗り出した明治政府。その徹底的統制支配の体制はいかに構築、維持されたか。維新から敗戦までの歴史を通じ、「国家と宗教」を問直す。

1832

田上太秀著

禅語散策

挨拶とは、心で心を読むこと——。日常語になった禅のことば、著名な禅語の一つ一つに、人生の機微に溢れる深い意味がある。血脈、面目、行云流水など、滋味あふれる文章で禅の世界に誘う、「読む禅語辞典」。

1835

大谷哲夫全訳注

道元「永平広録・頌古」

「正法眼蔵」と双璧をなす道元の主著「永平広録」より巻九を全訳、わかりやすく解説。「拙筆微笑」「面壁九年」など、綿々と伝えられてきた仏法の真実、さとり真髓が、玄妙な漢詩によって眼前に立ち現れる。

1845

宗 教

大谷哲夫訳注

道元「永平広録・上堂」選

道元が全生命を賭して修行僧に語った説法集。仏法を知として示した「正法眼蔵」に對し、実践の場で悟りについての眞つ向からの問いかけを集めた。永平広録。道元の迫力ある言葉が伝わる上堂の精髓を掲載。

1698

久保田展弘著

修験の世界 始原の生命宇宙

日本の基層宗教を求めて歩く、全国の修験の場。山上ヶ丘岩場での捨身行、大峯山・出羽三山での行の实践、比叡山千日回縁行への同行など、実際に現場に身を置いた著者が描く、自然を介した宗教と人間の關係。

1701

大谷暢順全訳注

蓮如上人・空善聞書

真宗中興の祖、蓮如上人言行録の初の注釈書。衰微していた本願寺を一大教団へと再興した蓮如。弟子の空善が身辺で見聞きした上人の動靜、折々の法語を読み解き、その思想の核心と教勢拡大の秘訣に肉迫する。

1702

関根清三著(解説・坂部恵)

旧約聖書の思想 24の断章

旧約は、モラルなき現代に何を語りかけるか。罪と赦し、愛、終末等の主題のもとに旧約から二四の断章を選び、従来の解釈を踏まえつつ最新の読みを提示。これを糸口にエイズ、授受等、現代の諸問題をも考える。

1705

北森嘉蔵著(解説・関根清三)

聖書の読み方

大文字版

聖書には多くのメッセージが秘められている。聖書に基づくケイス・スタデイにより、その読み方を具体的にかつ根元のなから提示、聖書の魅力を浮き彫りにする。わかりづらい聖書を読み解くためのコツとは。

1756

宮元啓一著

仏教の倫理思想 仏典を味読する

仏教が等しく掲げる教えは「高邁な志と無執著」という実践哲学。倫理であり、これこそは仏教思想の核をなすものである。「スッタニパータ」をはじめとする代表的な三つの仏典に即して学ぶ仏教思想入門の書。

1760

宗教

三枝充憲著あとがき・横山敏一
さいてつこうけん
さんえき
たけのこ
あきこ

世親

唯識の大成者にして仏教理論の完成者の全貌。現代の認識論や精神分析を、はるか千六百年の昔に先取りした精緻な唯識学を大成した世親。仏教理論をあらゆる面で完成に導いた知の巨人の思想と全生涯に迫る。

1642

道元著／増谷文雄全訳注
どうげん
みちのぶ
あきこ

正法眼蔵

(一)～(八)

禅の奥義を明かす日本仏教屈指の名著を解説。魂を揺さぶる迫力ある名文で仏教の本質を追究した「正法眼蔵」。浄土宗の人でありながら道元に深く傾倒した著者が繰り返し読み込み、その真髄は何かと肉迫する。

1645～1652

久保田展弘著

日本の聖地

日本宗教とは何か

豊かな自然と歴史に根ざす日本人の信仰。熊野・国東半島・四国霊場・白山・出羽三山をはじめ、仏教や神道、修験道等の聖地をつぶさに踏査し、わが国固有の風土と歴史、生命観が育んだ宗教の多様な形を探る。

1658

鈴木大拙著(解説・田上太秀)

禅学入門

大文字版

禅界の巨星が初学者に向けて明かす禅の真実。外国人への禅思想の普及を図り、英語で執筆した自著を自らが邦訳。禪師家と弟子との疑問答を豊富に添えて禅の概要を懇切に説くとともに、修行の実際を紹介する。

1668

五来重著
ごらい
しげる

熊野詣 三山信仰と文化

日本人の思想の原流・熊野。記紀神話と仏教説話、修験思想の融合が織りなす謎と幻想に満ちた聖なる空間を宗教民俗学の巨人が踏査、活写した歴史的名著の文庫化。熊野三山の信仰と文化に探るこころの原風景。

1685

田上太秀著

『涅槃経』を読む ブッダ臨終の説法

いまわの際にブッダが説いた秘密の教えとは。多様な比喩を用いた巧みな問答形式で、ブッダが自らの得た覚りを弟子たちに開示した「涅槃経」。東アジアの仏教思想に多大な影響を与えた經典の精髓を読み解く。

1686

北森嘉蔵著
 聖書百話

神とは誰か、信仰とは何か、そして人はいかに生きるべきか……。これらへの答えは聖書にある。神、イエス・キリスト、聖霊、信仰、教会、終末等々の主題の下に、聖書に秘められた真のメッセージを読み解く。

1550

秋月龍珉著
 無門関を読む

無の境地を伝える禪書の最高峰を口語で読む。公案四十八則に詳唱、頌を配した「無門関」は『碧巖録』と双壁をなす名著。悟りへの手がかりとされながらも、難解で知られるこの書の神髄を、平易な語り口で説く。

1568

秋月龍珉著(解説・竹村牧男)
 一日一禪

師の至言から無門関まで、魂の禪語三六六句。柳縁花紅、照願脚下、大道無門。禪者が、自らの存在をその一句に賭けた禪語。幾百年、師から弟子に伝わった魂に食い入る禪語三六六句を選び、一日一句を解説する。

1598

立川武蔵著
 空の思想史 原始仏教から日本近代へ

一切は空である。仏教の核心思想の二千年史。神も世界も私すらも実在しない。仏教の核心をなす空の思想は、絶対の否定の果てに、一切の聖なる甦りを目指す。印度・中国・日本で花開いた深い思惟を追う二千年。

1600

山崎正一全訳注
 正法眼蔵随聞記

道元が弟子に説き聞かせた学道する者の心得。修行者のあるべき姿を示した道元の言葉、高弟懐奘が光明に筆録した法語集。実生活に即したその言葉は平易で懇切丁寧である。道元の人と思想を知るための入門書。

1622

竹村牧男著
 インド仏教の歴史 「覚り」と「空」

インド亜大陸に展開した知と静の教えを探究。菩提樹の下のブッタの正覚から巨大な「アジアの宗教」へ。悠久の大河のように長く広い流れを、寂靜への「覚り」と一切の「空」というキーワードのもとに展望する。

1638

古田紹欽全訳注

米西喫茶養生記

大文字版

日本に茶をもたらした米西が説く茶の効用。中国から茶の実を携えて帰朝し、建仁寺に栽培して日本の茶の始祖となった米西が著わした飲茶の効能の書。座禅時に眠けをほらう効用から、茶に於ける養生法を説く。

1445

おれたとらうじけん
大谷暢順著解説・前田憲孝

蓮如「御文」読本

大文字版

真宗の思想の神髄を記した御文を読み解く。蓮如が認めた御文は衰微していた本願寺再興の切り札となった。親鸞の教えと蓮如の全思想が凝集している御文十通を丁寧に読み解き、真宗の信心の要訣を描き示す。

1476

金岡秀友校注

般若心経

大文字版

「般若心経」の法隆寺本をもとにした注釈書。「般若心経」の経典の本文は三百字に満たない。本書は法隆寺本梵文と和訳、玄奘による漢訳を通して、その原意と内容に迫る。仏教をさらに広く知るための最良の書。

1479

宮家 準著

修験道 その歴史と修行

大文字版

平安時代末に成立した我が国固有の山岳信仰。山岳を神霊・祖霊のすまう霊地として崇め、シャーマニズム、道教、密教などの影響のもとに成立した我が国古来の修験道を、筆者の修行体験を基に研究・解明する。

1483

田上太秀著

道元の考えたこと

大文字版

曹洞宗の祖道元が考えた真の仏法とはなにか。主著「正法眼蔵」等に記された出家者の行住坐臥に関する厳格な規矩を通じて道元の思想の根底を探り、釈尊の教えと対比しつつ仏祖正伝と称するその仏法を考える。

1487

中村 元著

龍樹

大文字版

一切は空である。大乘最大の思想家が今甦る。真実に存在するものはなく、すべては言葉にすぎない。深い思索と透徹した論理の主著「中論」を中心に、「八宗の祖」と謳われた巨人の「空の思想」の全体像に迫る。

1548

大橋俊雄著
法然

鎌倉仏教の先がけ、法然上人の思想と人間像。数多の教えから専修念仏だけを選びとり、浄土宗を開いた法然。八十年の生涯の言動のうちに人間法然の実像を探る。「選訳本願念仏集」一撰述八百年記念書き下ろし。

1326

慧立・彦棕著／長澤和俊訳
玄奘三蔵
西域・インド紀行

天竺の仏法を求めた名僧玄奘の不屈の生涯。七世紀、大店の時代に中央アジアの砂漠や天に至る山嶺を越えて聖地インドを目ざした求法の旅。更に經典翻訳の大事業に生涯をかけた玄奘三蔵の最も信頼すべき伝記。

1334

紀野一義著

名僧列伝(一)～(四)

(一)明恵・道元・夢窓・一休・沢庵
(二)良寛・盤桂・鈴木正三・自隱
(三)西行・漂信・親鸞・日蓮
(四)一遍・蓮如・元政・辨榮聖者

乱世の中で、悟りへの壮烈な思いを貫き、日本独自の宗教の樹立に寄与した名僧たち。すさまじく鮮烈な生きざま。死にざまに深く共感しながら、その仏者たちの人柄・風貌と硬骨の人生観、教えの真髓を熱く語る。

1389・1391
1392・1513

宗

田上太秀著(解説・湯田 豊)

仏陀のいいたかったこと

釈尊の言動のうちに問い直す仏教思想の原点。靈魂の否定、宗教儀礼の排除、肉食肯定等々、釈尊の教えは日本仏教と異なるところが多い。釈尊は何を教えどこへ導こうとしたのか。仏教の始祖の本音を探る好著。

1422

夢窓国師著／川瀬一馬校注・現代語訳
夢中間答集

仏教の本質と禪の在り方を平易に説く法語集。悟達明眼の夢窓が在俗の武家政治家、足利直義の問いに懇切丁寧に答える。大乘の慈悲、坐禪と学問などについて、欲心を捨てることの大切さと仏道の要諦を指し示す。

1441

梅原 猛全訳注(解説・杉浦弘通)
歎異抄

大文字版

流麗な文章に秘められた生命への深い思想性。悪人正機、他力本願を説く親鸞の教えの本質とは何か。親鸞の苦悩と信仰の極みを弟子の唯円が書き綴った聖典を、詳細な語釈、現代語訳、丁寧な解説を付し読みとく。

1444

宗 教

宮家^{みやけ}準^{じゆん}著

日本の民俗宗教

従来、個々に解明されてきた民間伝承を宗教学の視点から捉えるため、日本人の原風景、儀礼、物語、図像等を考察。民俗宗教の世界観を総合的に把握し、日本の民間伝承を体系的に捉えた待望の民俗宗教論。

1152

小田垣雅也著

キリスト教の歴史

イエス誕生から現代に至るキリスト教通史。旧約聖書を生んだユダヤの歴史から説き起こし、イエスと使徒たちによる布教やその後の教義の論争や改革運動を、世界史の中で解説した。キリスト教入門に最適な書。

1178

山田 昆著(解説・飯沼二郎)

アウグステイヌス講話

アウグステイヌスの名著「告白」を綿密に分析し「青年期は放蕩者」とした通説を否定。また「創造と悪」の章では道元との共通点を指摘するなど著者独自の解釈が光る。第一人者が説く教父アウグステイヌスの実像。

1186

窪 徳忠著

道教の神々

道教の神々の素顔に迫る興味尽きない研究書。日本の習俗や信仰に多大の影響を及ぼした道教。鍾馗や竈の神など、中国唯一の固有宗教といわれる道教の神々を紹介。道教研究に新局面を拓いた著者の代表作。

1239

笠原一男著

親鸞

真宗研究の第一人者が書き下ろした親鸞入門。「悪人正機」を説き「妻帯」を実践して、既成宗教の思想を否定した親鸞。流罪、遍歴、長子普賢の養絶等々、起伏に富んだ九十年の生涯の言と行とにその思想を探る。

1288

脇本平也著(解説・山折哲雄)

宗教学入門

人間生活に必要な宗教の機能と役割を説く。宗教学とは何か。信仰や伝道とは無縁の立場から世界の多宗教を客観的に比較考察。宗教を人間の生活現象の一つとして捉え、その基本知識を詳述した待望の入門書。

1294

宗 教

鏡島元隆著
道元禪師語録
どうげんぜんじごろうく

道元著・中村璋八他訳
典座教訓・赴粥飯法
てんざせきょうくん かしゆくはんぽう

鎌田茂雄著
観音経講話
かんのんきょう

早島鏡正著
歎異抄を読む
たんいしやう

鎌田茂雄著
法華経を読む
ほけきょう

荒井 献著
トマスによる福音書
あらい けん

トマスによる福音書
とますによるふくいんしょ

仏法の精髓を伝えて比類ない道元禪師の語録。道元の思想と信仰は、「正法眼蔵」と双壁をなす「永平道録」に最も鮮明かつ凝縮した形で伝えられている。思慮を傾けた高度な道元の言葉平易な現代語訳で解説。

典座とは、禪の修行道場における食事司の役をいい、赴粥飯法とは、僧堂に赴いて食事頂く作法をいう。両者の基本にあるものこそ真実の仏道修行そのものと説く。食の仏法の平等一如を唱えた道元の食の基本。

宇宙の根本原理を説く観音経のころ。時代と地域を超えて信仰されてきた観世音菩薩。そして最も広く読誦されてきた観音経。道元や明恵などの仮名法語を引用しつつ、観音経典の真髓を平易に解説した好著。

歎異抄は、親鸞晩年の弟子唯円が、自らの願いを織りまぜて先師の口伝を綴ったものである。歎異抄を宗学から解放して仏教思想との関連から平明懇切に論及。本願念仏の真実を生きた親鸞の法語を説く好著。

諸経の主たる「法華経」の根本思想を説く。文学的にも思想的にも古今独歩といわれる法華経。わずかに七巻二十八品の經典の教えを、日蓮は「心の財第一なり」といった。混迷した現代を生きる人々にこそ必読書。

キリスト教史上、最古・最大の異端グノーシス派によってつくられたトマス福音書。同書は資料的に正典福音書と匹敵する一方、同派ならではの独自のイエス像を示す。第一人者による異端の福音書の翻訳と解説。

944

980

1000

1040

1112

1149

宗 教

鎌田茂雄著
鎌田茂雄著
華嚴の思想

限りあるもの、小さなものの中に、無限なるもの、大なるものを見ようとする華嚴の教えは、日本の茶道や華道の中にも生きている。日本人の心に生き続ける華嚴思想を分り易く説いた仏教の基本と玄理。

919

窪徳忠著
窪徳忠著
道教百話

神仙思想を中心とする道教は、昔から中国民衆の生活に密着して中国の宗教の主流をなし、また日本の民間習俗にも深くかかわってきた。道教の眞の姿を百話にまとめて平易に解説した、道教を学ぶ人必携の書。

875

井筒俊彦著(解説・牧野信也)
井筒俊彦著(解説・牧野信也)
マホメット

沙漠を渡る風の声、澄んだ夜空に纏れて光る星々。世に無道時代と呼ばれるイスラーム誕生前夜のアラビアの美しい風土と人間から説き起し、沙漠の宗教の誕生を描く。世界的に名高い碩学による名著中の名著。

877

石田瑞磨著
石田瑞磨著
教 行 信 証 入 門

浄土の眞実の心を考えるとき、如来の恵みである浄土に生まれる姿には、眞実の教えと行と信ときとがありがあるという。浄土眞宗の根本をなす親鸞の「教行信証」を源々と説きながらその思想にせまる格好の入門書。

902

鎌田茂雄著
鎌田茂雄著
維摩経講話

維摩経は、大乘仏教の根本原理、すなわち煩惱即菩提を最もあざやかにとらえているといわれる。在家の信者の維摩居士が主役となつて、出家者の菩薩や声聞を相手に、生活に即した教えを活殺自在に説き明かした。

919

早島鏡正著
早島鏡正著
ゴータマ・ブツダ

さとりを得ても、なお道を求めて歩みつづけたゴータマ・ブツダ。信仰の対象として神格化される、堂奥に祀られていたブツダを、永遠の求道者、人間ブツダとして把え、仏教を「道」の体系として究明した卓越の書。

922

大森曹玄著(解説・寺山日中)
参禅入門

禅を学ぶには理論や思想も必要であるが、実践的には直接正師につくことが第一である。本書は「わが修道の記録」と自任する著者が、みずからの体験に照らして整然と体系化した文字禅の代表的な指南書。

717

玉城康四郎著

仏教の根底にあるもの

仏教そのものとは何か。各宗派の発想の源泉は何かを問いつけてきた著者が、釈尊・空海・親鸞・道元などの教説を、経典・語録の引用を交えて平易に説明。著者の長年の思索体験から仏教の根本思想を探った書。

731

鎌田茂雄著

般若心経講話

数多くのお経の中で「般若心経」ほど人々に親しまれているものはない。わずか二六二文字の中に、無限の真理と哲学が溢れているからである。本書は字句の解釈に捉われることなく、そのころを明らかにした。

756

山折哲雄著

仏教信仰の原点

奈良・平安・鎌倉時代を通じて、庶民のなかに深く根づいている靈魂信仰と、それを超えようとした仏教思想との葛藤は今日も本質的に変わりにないことを説く。日本人の宗教信仰の核心を歴史的に探った好著。

760

鎌田茂雄著

正法眼蔵随聞記講話

学道する人は如何にあるべきか、またその修行法や心構えについて生活の實際に即しながら弟子の懐疑に氣骨をこめて語った道元禪師。その言葉を分かりやすく説きながら人間道元の姿を浮彫りにする。

785

鈴木大拙著(解説・古田紹欽)

一禅者の思索

若者に向けて大拙博士が語る講演、随想集。「大地と宗教」「行脚の意義に就いて」など各篇を一貫して流れるのは、東洋思想の精髓である。人間疎外の進む現代への警世の書として、その思想は清新かつ深い。

792

凝然大徳著／鎌田茂雄全訳注
はつしゅうこうとう

八宗綱要 仏教を真によく知るための本

仏教の教理の基本構造を簡潔に説き明かした名著。凝然大徳の「八宗綱要」は今日なお仏教概論として最高のものといわれている。その原文に忠実に全注釈を加えた本書は、まさに初学者必携の書といえる。

555

鎌田茂雄著

天台思想入門 天台宗の歴史と思想

日本仏教の母胎をなす天台宗の成立と発展の歴史、および根本経典である『法華経』を初めとする経典の内容、教理などについて分りやすく解説した本書は、日本仏教を理解するための格好の入門書である。

626

酒井得元著（解説・鎌田茂雄）
さわきこうとう

沢木興道聞き書き ある禅者の生涯

沢木興道老師の言葉には寸毫の虚飾もごまかしもない。ここには老師の清らかに、真実に、徹底して生きぬいた一人の禅者の珠玉の言葉がちりばめられている。近代における不世出の禅者、沢木老師の伝記。

639

友松圓諦著（解説・奈良康明）
はつくぎきょう

法句経

法句経は、お経の中の「論語」に例えられる釈尊の人生訓をしるしたお経。宗教革新の意気に燃え、人間平等の人格主義を貫く青年釈尊のラジカルな思想を、四百二十三の詩句に凝りあげた真理の詞華集である。

679

M・エックハルト著／相原信作訳（解説・上田閑照）

神の慰めの書

「脱却して自由」「我が苦惱こそ神なれ、神こそ我が苦惱なれ」と好んで語る中世ドイツの神秘思想家エックハルトが、己れの信ずるところを余すところなく説いた不朽の名著。格調高い名訳で、神の本質に迫る。

690

柳田聖山著
やまざか

禅と日本文化

禅とは何か。禅が日本人の心と文化に及ぼした影響、またその今日的課題とは何か。これら禅の基本的テーゼが明快に説かれるとともに、禅からの問いかけとして「現代」への根本的な問題が提起されている。

707

友松圓諦著(解説・金岡秀友)
仏陀のおしえ

今日の仏教を再興した著者が、サンスクリット・パーリ語・漢文による仏教原典の研究を背景に著した現代人のための仏教入門書。仏・法・僧という「三宝」の構成で仏教の本質を説いた昭和仏教の総和の書。

489

高橋保行著
ギリシヤ正教

今なおキリスト教本来の伝統を保持しているギリシヤ正教。その全貌が初めて明らかにされるとともに、キリスト教は西洋のものとする通念を排し、西洋のキリスト教とその文化の源泉をも問いつくす注目の書。

500

内村鑑三著(解説・山本七平)
キリスト教問答

近代日本を代表するキリスト教思想家内村鑑三が、信仰と人生を語る名著。「米世は有るや無きや」などキリスト教の八つの基本問題に対して、はぎれよく簡明に答えるとともに、人生の指針を与えてくれる。

531

友松圓諦著(解説・奈良康明)
法句経講義

原始仏教のみずみずしい感性を再興し、昭和の仏教改革運動の起点となった書。法句経の名を天下に知らしめるとともに、仏教の真の姿を提示した。混迷を深める現代日本の精神文化に力強い指針を与える書。

533

暁烏(敏)著(解説・松水伍一)
歎異抄講話

本書は、明治期まで秘蔵書とされた「歎異抄」をはじめて公衆に説き示し、その真価を広く一般に知らしめた画期的な書である。文章の解釈、さらに種々の角度からの解説により、「歎異抄」の真髓に迫る。

547

友松圓諦著(解説・友松誦道)
仏教聖典

釈尊の求道と布教の姿を、最古の仏典を素材にして格調高い文章で再現した仏教聖典の決定版。全日本仏教会の推薦を受け、広く各宗派にわたって支持され、全国にあまねくゆきわたった、人生の伴侶となる書。

550

倉田百三著 解説・楢垣友美

法然と親鸞の信仰 (上) (下)

本書では、法然の「一攷起請文」と、親鸞の「歎異抄」を中心として、浄土宗と浄土真宗の信仰を平易にし、しかも奥所をつきつめて説かれる。倉田百三の熟っぽい語り口は、読者の心を動かさずにはおかない。

155・156

鎌田茂雄著

仏陀の観たもの

仏教は一体どんな宗教であり、どういう教えを説いてきたのだろうか。本書は難解な仏教の世界をその基本構造から説き起こし、仏教の今日的な存在意義を明らかにする。只今を生きる人のための仏教入門書。

174

共同訳聖書実行委員会訳(注・解説・楢垣友美)

新約聖書 共同訳・全注

カトリックとプロテスタントが、共同して翻訳した本邦初の「新約聖書」。興味深い注が付してあるので、新約の世界とその時代が、読者の眼前にありありと甦る。これからの時代の万人向け聖書の決定版。

318

増谷文雄著

釈尊のさとり

長年に亘って釈尊の本当の姿を求めつづけた著者は、ついに釈尊の菩提樹下の大覚成就、すなわち「さとり」こそ直観であったという結論を導き出した。釈尊の真実の姿を説き明かした仏教入門の白眉の書。

344

鎌田茂雄著

禅とはなにか

禅に関心をよせる人は多い。だが、禅を理解することは難しい。本書は、著者自らの禅修行の体験を踏まえ、禅の思想や禅者の生き方、また禅を現代にどう生かすか等々、禅の全てについて分りやすく説く。

409

梅原 猛著(解説・宮坂有勝)

空海の思想について

「大師は空海にとられ」といわれるように、宗派を越え、一般庶民大衆に尊崇されてきた空海であったが、その思想は難解さの故に敬遠されてきた。本書はその空海の思想に真向から肉薄した意欲作である。

460

佐々木正人著(解説・計見一雄)
アフオーダンス入門 知性はどこに生まれるか

アフオーダンスとは環境が動物に提供するもの。外界は人間に対してどんな意味を持つのか。また知性とは何なのか。二〇世紀後半に生態心理学者ギブソンが提唱し衝撃を与えた革命的理論をわかりやすく紹介。

1863

河合隼雄著(解説・遠藤周作)
影の現象学

意識を裏切る無意識の深層をユング心理学の視点から掘り下げ、新しい光を投げかける。心の影の自覚は人間関係の問題を考える上でも重要である。心の影の世界を鋭く探究した、いま必読の深遠なる名著。

811

土居健郎著
精神分析

心理学としての精神分析、精神病理学としての精神分析、療法としての精神分析の三部に分け、精神分析の全体像を描く。「甘え」を初め、日常語による分析が独創的な、著者の記念碑的処女作である。

851

小此木啓吾著
フロイト

フロイトは人間の潜在意識の領域に正面から挑んで、性欲動と自己破壊にかられる無意識界を直視させた。膨大な全集から選出した著作と論文を通して、精神分析の創始者・フロイトの生涯と思想を探る。

860

G・ル・ボン著／櫻井成夫訳(解説・横山貞彦)
群衆心理

民主主義の進展により群衆の時代となった今日、個人の理性とは異なる「群衆」が歴史を動かしている。その群衆心理の特徴と功罪を心理学の視点から鋭く分析する。史実に基づき群衆心理を解明した古典的名著。

1092

小此木啓吾著
現代の精神分析
フロイトからフロイト以後へ

精神分析百年の流れを、斯界第一人者が展望。二十世紀は精神分析の世紀でもある。始祖フロイトの着想から隣接諸科学を巻き込んだ巨大な人間学の大成へ。一世紀にわたる精神医学のスリリングな冒険を展望する。

1558

計見一雄著
脳と人間
大人のための精神病理学

世界・現実との関係に置き、ズレていく統合失調症Ⅱ精神分裂病は、脳の働きのどのような不具合が関係しているのか。精神科医の著者が、脳科学の最新の成果を動員して練り上げた、脳と精神に関する総合理論。

1773

加地伸行全訳注
論語 増補版

中沢新一著

純粹な自然の贈与

斎藤忍随著／左近司祥子訳

プロティノス「美について」

三島憲一著

ベンヤミン 破壊・収集・記憶

人間とは何か。深淵の時代にあつて、人はいかに生くべきか。儒教学の第一人者が『論語』の本質を読み切り、独自の解釈、逆意の現代語訳を施す。漢字一字から検索できる「手がかり索引」を増補した決定新版!

古式補録の深層構造を探る。「すばらしい日本補録」、モースの思想的可能性を再発見する「新贈与論序説」などを収録。贈与の原理を経済や表現行為の土台に据え直し、近代の思考法と別の世界を切り開く未来の贈与価値論。

三世紀、プラトンの正統的理解者を自任し、イデアを体系化したプロティノスは、美を、善を、どのように捉えたのか。善と魂との関係を究明して後代の哲学に影響を与えた「新プラトン主義の祖」の名品三篇を訳出。

ヨーロッパ現代史の最も悲劇的な時期を生きたベンヤミン。思想の根底にドイツ青年運動・ユダヤ神秘主義・シュルレアリスムを据え、右か左かという出来合いの選択を拒んだ孤立無援のラディカリスムに肉迫する。

1962

1970

1971

1979

山川偉也著

哲学者デイオゲネス 世界市民の原像

變カの中に住まい、ほろをまどってアテナイの町をうろつき教説を説いた「犬哲学者」の実像とは。そして、アリストテレスの人間観を完全否定して唱導・実践した「世界市民」思想とは何か。その現代的意味を問う。

1855

三宅剛一著(解説・酒井 滯)

人間存在論

大文字版

哲学史の中で「人間」はどのように考えられてきたのか。アリストテレス的なコスモスの体系とヘーゲルの歴史の体系を軸に、師・西田幾多郎の絶対無に対する自らの立場を明らかにした京都学派哲学者の代表作。

1861

野家啓一著

パラダイムとは何か クーリーの科学史革命

著書「科学革命の構造」によってそれまでの科学史の常識に異を唱えたトーマス・クーリー。考古学的手法で「知の連続的進歩」という通念を覆し、二〇世紀後半最大の流行語となった「パラダイム」概念を解説。

1879

三浦國雄訳・注

「朱子語類」抄

儒教・仏教・道教を統合した朱子学は、万物の原理を求め、縦横無尽に哲学を展開する。理とは？ 氣とは？ 宇宙の一部である人間は、いかに善をなさうのか？ 近世以降の東アジアを支配した思想を眺む。

1895

大塚健洋著

大川周明 ある復古革新主義者の思想

資本主義打倒を訴えていた学生が、日本精神に目覚めたアジア主義へと展開する思想経路はいかなるものだったのか。また大東亜戦争の理論家として破局に向かう道行とは？ 「始末に困る」至誠の人の思想と生涯。

1936

大橋良介著(解説・野家啓一)

日本的なもの、ヨーロッパ的なもの

日本人は、あるべき近代を、をどう模索したか。漱石、西岡、西田、九鬼、和辻らの思想遺産を通し、近代日本の精神構造と、ヨーロッパ近代に対する根本的反省を解明する。我々が直面する現代文明の課題とは何か。

1950

W・マクガイアー、W・ザウアーレンダー編／金森誠也訳
フロイトとユンク往復書簡（上）（下）

フロイトとユンクの間で取り交わされた夥しい数の書簡から、主に一九〇六―一三年のものを紹介。同志として緊密な共闘態勢にあった二人の間に、やがて対立点が生じ、訣別へと至るまでの道すがら露わになる。

1812・1813

柄谷行人著

日本精神分析

資本、国家、ネーションの三位一体が支える近代国家。芥川、菊池、谷崎の短編を手がかりに、近代日本のナショナリズムと天皇制、民主主義、貨幣を根源的に問い、近代国家を乗り越える道筋を示す画期的論考。

1822

加地伸行全訳注

孝経

大文字版

この小篇は単に親孝行を説く道徳書ではない。中国人の死生観・世界観が凝縮されている。「女孝経」「法然上人母へのごとば」など中国と日本の資料も併せ、精神的紐帯としての家族を重視する人間観を分析する。

1824

岩崎允胤著

ヘレニズムの思想家

古典期ギリシア哲学はアレクサンドロス以降のヘレニズム期にどのように展開したのか。エピクロス、ストア派のゼノン、懐疑派のピュロンなど、運命への関心、生き方の探求を主眼とした思想家たちを紹介。

1836

今村仁司著（解説・市田良彦）

アルチュセール全哲学

マルクス研究を一新し、フーコー、デリダ、ドゥルーズらを育てた「真空の哲学者」が、精神的肉体的苦悶あるいは自身の「認識論的切斷」を経て到達した地平とは。その思想的全生涯を第一人者が論じた決定版！

1839

丸山圭三郎著（解説・末永朱胤）

言葉・狂気・エロス 無意識の深みにうごめくもの

意味を固定させることなく、無意識レベルで激しく滑り流れる欲動のエネルギ―。それを覆う言葉の活動の場、狂気・エロスの発現の場から、人間は何を身にもどるのか。欲動と意識の存在様式に挑む刺激的な書。

1841

矢代 粹著
年表で読む二十世紀思想史

一八八三年マルクスの死から一九九五年ドゥルーズの自死まで約百年の文化的事件や人物の記録。細部に拘る筆者の視点から事物、人物の深い相互関連が浮かび上がる。二十世紀の思想的出来事をまとめた読む年表。

1758

福沢諭吉著／伊藤正雄校注
学問のすゝめ

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」近代日本を代表する思想家が本書を通してめざした精神革命。自由平等・独立自尊の思想、実学の奨励を平易な文章で説く不朽の名著に丁寧な語釈・解説を付す。

1759

湯浅博雄著
バタイユ 消尽

パリ国立図書館に勤務するかたわらヘーゲル、ニーチエを学び近代の主知主義や生産中心の世界像を批判するバタイユ。強いインパクトと深さを持つ独特の思想の奥にある、柔軟な思考の展開を読む。

1762

西田幾多郎著／小坂国継全注釈
善の研究 全注釈

日本最初の本格的な哲学書「善の研究」。西洋思想と厳しく対決し、独自の哲学体系を構築した西田幾多郎。人間の意識を深く掘り下げ、心の最深处にある真実の心は何かを追究した代表作を噛み砕き読み解く。

1781

中沢新一著
森のパロック

生物学・民俗学から宗教学まであらゆる不思議に挑んだ南方熊楠。森の中に、結菌の生態の奥に、直感される「流れるもの」とは？ 南方マンダラとは？ 後継者を持たない思想が孕む怪物的子供の正体を探る。

1791

長尾龍一著
法哲学入門

知の愛である哲学が非常識の世界に属するのに対し、法学は常識の世界に属する。両者の出合うところに立ち上がる人間存在の根源的問題。正義の根拠、人間性と秩序、法と実力など、法哲学の論点を易しく解説。

1801

近藤光男著
戦国策

前漢末、皇帝の嘗庫にあった国策、国事等の竹簡を校定し編まれた『戦国策』。陰謀渦巻く一方、壮士・將軍・能臣が活躍、賢后・寵姫が微笑む擾乱の世を、人物編・術策編・弁説編の三編百章にわけて描出。

1709

廣川洋一著

イソクラテスの修辞学校 西欧的教養の源泉

古代ギリシアの教育者の理念と後世の受容史。プラトーンに抗して、教育理念に二大潮流を形成したイソクラテス。その思想は、遠く近代にまで影響を与えた。ではイソクラテスとはいかなる人物か。その思想とは。

1718

服部正明著(解説・赤松明彦)

古代インドの神秘思想 初期ウパニシャッドの世界

大文字版

インド学の碩学による最良のインド思想入門。個体の本質アトマンと最高実在ブラフマンの一致とは何か。インド精神文化の源泉となった特異な叡知、神秘思想の本質を、初期ウパニシャッドをもとに平易に解説。

1731

はかり
 量 義治著

西洋近世哲学史

近代への道を切り開いた西洋近世哲学の歩み。ルネサンス以降、ダイナミックに展開した西洋の哲学。主観の自己意識の深化と新たな理解。近世哲学を巨視的かつ的確に記述し、近世・近代とはどんな時代かを問う。

1737

中村 元著

東洋のこころ

東洋人の心性を育み、支えてきたものとは？ 人心の荒廃が叫ばれる今こそ、我々の精神生活の基盤「東洋のこころ」を省みることが肝要である。比較思想的な観点を踏まえ、碩学が多角的に説く東洋の伝統的思想。

1741

M・アウレリウス著／鈴木照雄訳

マルクス・アウレリウス「自省録」

ローマ皇帝マルクス・アウレリウスはストア派の哲学者でもあった。合理的存在論に与する精神構造を持つ一方、文章全体に漂う硬質の色を帯びる無常観。哲人皇帝マルクスの心の軌みに耳を澄ませます。

1749

貝塚茂樹著
孟子

孟母三遷で名高い孟子の生涯と思想の真髄。戦国七雄が対立した前四世紀、小国^諸に生まれ諸国を巡って仁政を説いた孟子。井田制など理想国家の構想や、あるべき君子像の提言を碩学が平易に解説する。

1676

浅野裕一著
諸子百家

春秋・戦国を彩る思想家たちの才智と戦略。戦乱の世に自らの構想を実現すべく諸国を遊説した諸子百家。利己と快楽優先を説いた楊朱、精緻な論理で存在の实体を問う公孫龍から老子、孔子までその実像に迫る。

1684

町田三郎著
呂氏春秋

秦の宰相、呂不韋^{しよふゐ}が作らせた人事教訓の書。始皇帝の宰相、呂不韋と賓客三千人が編集した「呂氏春秋」は天地万物古今の事を備えた大作。天道と自然に従い人間行動を指示した内容は中国の英知を今日に伝える。

1692

伊藤勝彦著
愛の思想史

愛とは何かを西洋の歴史を通り、究明する。ギリシア的少年愛、一貴婦人に熱誠を捧げる中世の騎士道的愛、自己充足をめざす近代的エゴティズムの愛。愛の思想の歴史を追い、西洋文化の問題点を掘り下げる。

1693

高橋哲哉著
戦後責任論

難る戦争の記憶と戦後日本の責任を問ひ直す。戦後六十年を経てもなぜ日本の戦争責任が問われるのか。台頭する新ナショナリズムを批判し、かつて破壊したアジアの民衆との信頼関係を回復する戦後責任を論述。

1704

S・クマール著／尾関 修・尾関沢人訳
君あり、故に我あり 依存の宣言

平和への世界巡礼で名高い英国思想家の名著。懷疑・自我の確立・二元論的世界観。デカルト以降の近代思想は対立を助長した。分離する哲学から関係をみる哲学へ。ひたすら平和を願い、新しい世界観を提示する。

1706

森 三樹三郎著(解説・蜂屋邦夫)
老荘と仏教

中国は外来思想＝仏教をいかに吸収したのか。西域より移入以来二千年の歴史をもつ中国仏教。仏教根本義「空」の思想の、老荘の「無」を通じた理解から禪仏教の確立まで、中印思想のダイナミックな交流を追究

1613

金谷 治著

易の話 「易経」と中国人の思考

大文字版

占い書にして思想の書「易経」を易しく解説。儒教の重要な經典として「五経」の筆頭におかれた「易経」。二千余年来の具体的な占い方を解説しつつ「易」と歩んだ中国人の自然・人生・運命観を探る大文字本。

1616

九鬼周造著／藤田正勝全注釈

「いき」の構造

「粹」の本質を解明した名著をやさしく読む。いきとは何か？ ヨーロッパ現象学を土下敷に歌舞伎、清元、浮世絵等芸術各ジャンルを涉猟、その独特の美意識を追究。近代日本の独自の哲学に懇切な注・解説を施す。

1627

今道友信著

アリストテレス

「万学の祖」の人間像と繊細な思想の精髄。人間界、自然界から神に至るまで、森羅万象の悉くを知の対象とした不朽の哲人アリストテレス。その人物と生涯、壮大な学問を、碩学が蘊蓄と情熱を傾けて活写する。

1657

徳永 恂著

ヴェニスからアウシユヴィッツへ ユダヤ人殉難の地を考える

ナチスによるユダヤ人虐殺は何故起きたのか。ユダヤ人への差別・追放・迫害。ゲットー発生の地ヴェニスなどユダヤ人殉難の地を旅し、その理由に思いを巡らせ、文明対野蛮等近代思想の意外な陥穽を鋭く刺る。

1666

宮谷宣史著

アウグスティヌス

古代ローマ最大の思想家の生涯と思索の全貌。アフリカに生まれ、栄達を願ってローマ・ミラノに渡り、放蕩の生活を経てキリスト教に回心。異端と論争し、動乱の時代を生きた巨人の生涯と全思想を説く力作。

1671

梅原 猛著

哲学する心

独創的思想家が熟つばく磨る第一エッセイ集。哲学の意義、日常性の哲学の大切さ、日本への思い、仏教思想の再認識……。哲学のみならず他の学問領域にまでも踏み込み、洞察力に満ちた思索を縦横に展開する。

1539

小坂国継著

西田幾多郎の思想

自己探究の求道者西田の哲学の本質に迫る。強靱な思索力で意識を深く掘り下げた西田幾多郎。西洋思想と厳しく対決して、独自の体系を構築。西田哲学とはどのようなものか。その性格と魅力を明らかにする。

1544

古川 薫全訳注

吉田松陰 留魂録

死を覚悟して執筆した松陰の遺書を読み解く。志高く維新を先駆けた思想家、吉田松陰。安政の大獄に連座し、牢獄で執筆された「留魂録」。松陰の愛弟子に対する最後の訓戒で、格調高い遺書文学の傑作の全訳注。

1565

大文字版

楠山春樹著

老子入門

老子の名言名句を通しその思想の核心に迫る。五千数百字の凝縮された知恵の宝庫。人間の欲望や文明を激しく批判し、独特の「道」の形而上学を説く老子。親しみやすい名言名句を手がかりに老子の思想を語る。

1574

中沢新一著(解説・吉本隆明)

チベットのモーツァルト

密教の実践的研究が現出させた、チベット高原の仏教思想と現代思想のスリリングな出会い——。八〇年代以降の思想潮流を創り、今なお、思想の大海を軽やかに横断しつつける著者の代表作、待望の文庫化なるか。

1591

貝塚茂樹著

韓非

諸子百家最後の異才・韓非の人と思想を探る。始皇帝に見込まれ秦に赴きながら、皇帝による刑死の憂き目にあつた悲劇的思想家韓非。その著「韓非子」を縦横に読み解き、法家の大成者の思想的発展と本質を検証。

1594

中島義道著

時間と自由 カント解釈の冒険

カントの引力圏から抜け出そうとする冒険。時間と自由という哲学的命題をカントの読み替えを通して追究する刺激的な一冊。カント研究・哲学研究のあり方として哲学とは何かを情熱に満ちた文章で問いかける。

1396

木田 元著(解説・保坂和志)

反哲学史

新たな視点から問いなおす哲学の歴史と意味。哲学を西洋の特殊な知の模式と捉え、古代ギリシアから近代への歴史を批判的にたどる。講義録をもとに平明に綴った刺激的哲学史。学術文庫「現代の哲学」の姉妹篇。

1424

清水幾太郎著(解説・川本隆史)

倫理学ノート

新たな倫理学を思索し構築するための出発点。ケインズ、ロレンス、ムアラに代表される二十世紀前半以来の英語圏倫理学の伝統に異を唱え、「新しい時代の功利主義」を提唱した、後期清水社会学を代表する名著。

1437

柄谷行人著(解説・鎌田哲哉)

〈戦前〉の思考

国民国家を超越する「希望の原理」とは？「終わり」が頻繁に語られる時、我々は何かの「事前」に立っていることを直観している。戦前を反復させぬために〈戦前〉の視点から思考を展開する著者による試論集。

1477

中島義道著

哲学の教科書

平易なことばで本質を抉る、哲学・非入門書。哲学とは何でないか、という視点に立ち、哲学の何たるかを探る。物事を徹底的に疑うことが出発点になる、哲学センス・予備知識ゼロからの自由な心のトレーニング。

1481

坂部 惠著

カント

哲学史二千年を根源から変革した巨人の全貌。すべての哲学はカントに流れ入り、カントから再び流れ出す。認識の構造を解明した「純粹理性批判」などカントの独創的作品群を、その生涯とともに見渡す待望の書。

1515

髯田清一著(解説・小林康夫)

顔の現象学 見られることの権利

曖昧微妙な「顔」への現象学的アプローチ。顔を思い描くことなしにその人について思いめぐらすことはできない。他人との共同的な時間現象として出現する「顔」を、現象学の視域によってとらえた思索の冒険。

1353

柄谷行人著(解説・東浩紀)

ヒューモアとしての唯物論

超越論的批判とは何か。有限な人間の条件を超越し、同時にそのことの不可能性を告知する精神的姿勢、それこそが唯物論でありヒューモアなのだ。宙吊りの緊張に貫かれた主要論文を集成した。柄谷理論の新展開。

1359

アリストテレス著／桑子敏雄訳
アリストテレス心とは何か

心を論じた史上初の唯物物の新訳、文庫で登場。心についての先行諸研究を総括・批判し、独自の思考を縦横に展開した書。難解で鳴る原典を、気鋭の哲学者が分かり易さを主眼に訳出、詳細で懇切な注・解説を付す。

1363

稲垣良典著

トマス・アクイナス

哲学史に光芒を放つ中世の巨人の思索と生涯。スコラ哲学の大成者であり、「学としての神学」を成立させた神学者でもあったトマス・アクイナス。その生の軌跡をたどり、著作の内に独創的な思想の本質を探る。

1377

E・レヴィナス著／合田正人訳
存在の彼方へ

現象学に新たな一步を印した大著文庫化成る。平和とは何か。今まさに切実な問題を極限まで考察し、現代思想に決定的な転回点をもたらしたユダヤ人哲学者レヴィナス。独自の「他者の思想」の到達点を示す主著。

1383

内山俊彦著
荀子

戦国時代最後の儒家・荀子の思想とその系譜。秦帝国出現前夜の激動の時代を生きた荀子。性悪説で名高い人間観をはじめ自然観、国家観、歴史観等、異彩を放つその思想の全容と、思想史上の位置を明らかにする。

1394

浅野裕一著

孫子

人間界の洞察の書「孫子」を最古史料で精読。春秋時代末期に書かれ、兵法の書、人間への鋭い洞察の書として名高い「孫子」を新発見の前漢末の竹簡文をもとに解説。組織の統率法や人間心理の饒など詳細に説く。

1283

鷲田清一著

現象学の視線

分散する理性

生とは、経験とは、現象学的思考とは何か。〈経験〉を運動として捉えたフッサール、交換として捉えたメルローポンティ。現代思想の出発点となった現象学の核心を読み解き、新たな可能性をも展望した好著。

1302

廣川洋一著

ソクラテス以前の哲学者

ヘシオドス、タレス、ヘラクレイトス……。ソクラテス以前の哲学は、さまざまな哲学者の個性的な思想に彩られていた。今日に伝わる「断片」の真正の言葉のうちに、多彩な哲学思想の真実の姿を明らかにする。

1306

上山安敏著
うえやまやすとし

魔女とキリスト教

ヨーロッパ学再考

魔女の歴史を通じてさぐる西洋精神史の底流。魔女像の変遷、異端審問、魔女狩りと魔女裁判、ルネサンス魔術、ナチスの魔女観……。キリスト教との関わりを軸に、興味深い魔女の歴史を通観した画期的な魔女論。

1311

プラトン著／三嶋輝夫・田中享英訳

ソクラテスの弁明・クリトン

プラトンの初期秀作二篇、待望の新訳登場。死を恐れず正義を貫いたソクラテスの法廷、獄中での最後の言説。近年の研究動向にもふれた充実した解説を付し、参考にくセノフォン「ソクラテスの弁明」訳を併載。

1316

浅野裕一著

墨子

博愛・非戦を唱え勢力を誇った墨子を読む。中国春秋末、墨子が創始した墨家は、戦国末まで儒家と思想界を二分する。兼愛説を掲げ独自の武装集団も抱えたが、秦漢期に絶学、二千年後に脚光を浴びた思想の全容。

1319